令和５年度
史跡古津八幡山 弥生の丘展示館
企画展関連講演会
記録集

2024

新潟市文化財センター

花と遺跡のふるさと公園散策マップ（「花と遺跡のふるさと公園」魅力アップ連携協議会作成）

目　次

目　次

第１章　企画展関連講演会の記録

企画展２関連講演会（第１回）
　石器・鉄器から探る新潟の弥生文化（森　貴教）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

第２章　企画展の概要と企画展関連講演会アンケート結果

（1）令和５年度「史跡古津八幡山　弥生の丘展示館」企画展の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・37
（2）企画展関連講演会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38
（3）企画展関連講演会アンケート結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38

第３章　古津八幡山遺跡復元竪穴住居の災害復旧工事

（1）令和４年度実施の「新潟市古津八幡山遺跡歴史の広場」復元竪穴住居災害復旧工事について・・43
（2）復元竪穴住居災害復旧工事の内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・45
（3）復元竪穴住居災害復旧工事の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・45

付　録　令和５年度企画展１・２パンフレット

本書は、新潟市文化スポーツ部歴史文化課文化財センター（以下、市文化財センター）が、令和５年度に催した「史跡古津八幡山　弥生の丘展示館」（以下、弥生の丘展示館）企画展関連講演会の記録集である。

スライドは講演会当日に使用されたものを基本的に収録したが、都合により編集したものがある。

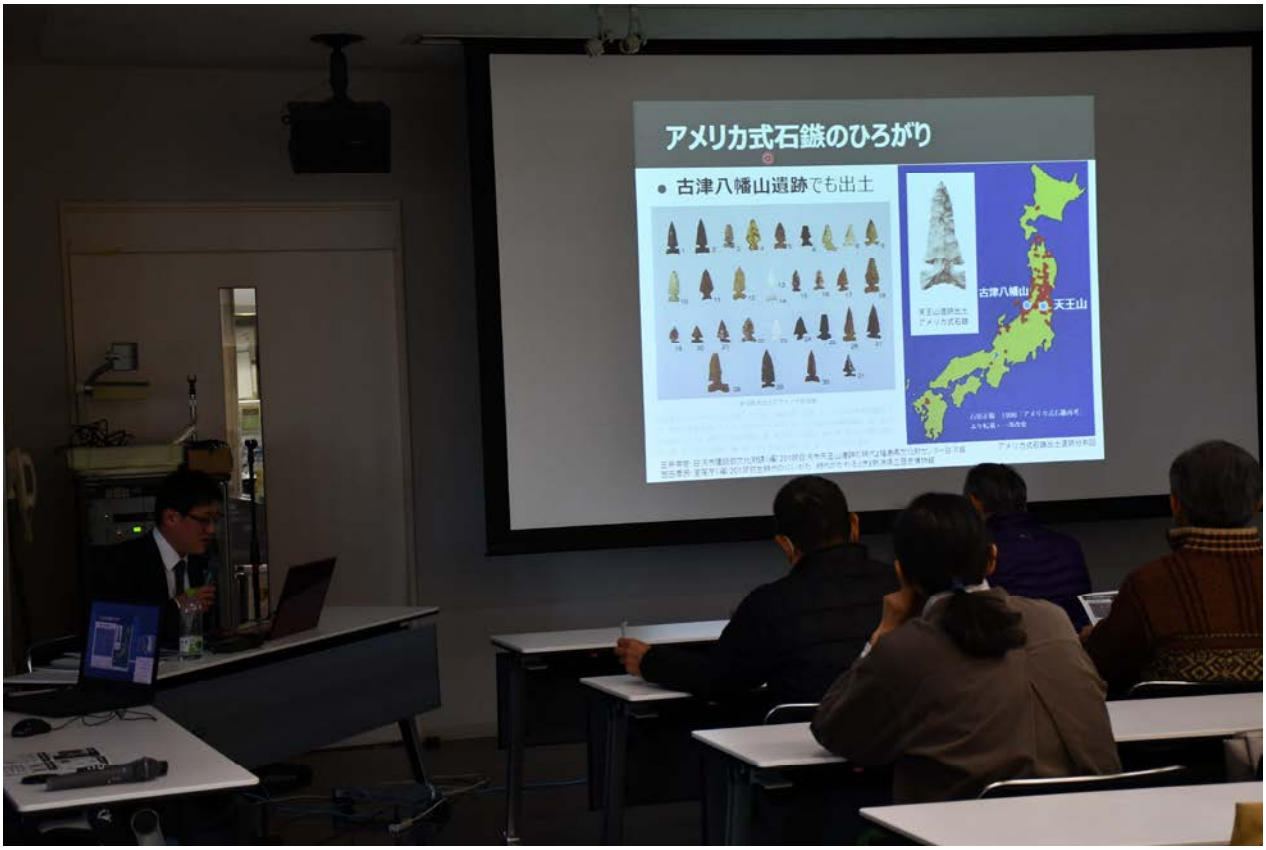
第２章には令和５年度に開催した各企画展の概要と関連講演会のアンケート結果を、第３章には令和４年度に実施した古津八幡山遺跡復元竪穴住居の災害復旧工事の概要について収録した。

本書は電子データに限られ、紙での発行は行っていない。

本書の編集は相田泰臣・八藤後智人・奈良佳子（市文化財センター）が行った。

※表紙写真：災害復旧工事後の古津八幡山遺跡の復元竪穴住居　（令和５年４月撮影）

講演風景（第１回）



講演風景（第１回）

企画展１　展示風景－１

企画展１　展示風景－２

企画展１　展示風景－３

企画展１で制作・展示した木槨のイメージレプリカ

企画展１　展示解説風景

企画展２　展示風景－１

企画展２　展示風景－２

企画展２　展示風景－３

企画展２で制作・展示した鉄鏃・ヤリガンナのイメージレプリカ

企画展２　展示解説風景

第１章　企画展関連講演会の記録

■令和５年度 企画展２関連講演会（第１回）　令和５年 11 月 26 日（日）

石器・鉄器から探る新潟の弥生文化

森 貴教（新潟大学准教授）

目次

１．はじめに
２．弥生時代とは
３．弥生時代の石器・石製品
４．弥生時代の鉄器と鉄器化
５．おわりに

１．はじめに

皆さん、こんにちは。今日はお集まりいただきありがとうございます。新潟大学人文学部の森貴教と申します。現在、古津八幡山弥生の丘展示館で､「古津八幡山遺跡の石器と鉄器」という企画展が開催されております｡来年の３月 24 日までということですけれども、この企画展にあたり、関連したテーマで発表してほしいという依頼がありました。

（スライド 1）石器と鉄器から新潟の弥生文化を考えるというのは、出土資料の豊富な西日本に比べて実はなかなか難しい状況です。私は石器や鉄器の研究をしておりますが、その研究の難しさ、これは楽しさの裏返しでもあるのですが、そういったニュアンスを含めて、今日はこのタイトル、石器・鉄器から「わかった」とかではなく「探る」､まだ探っている最中で今後いろいろな発見や研究の成果というのが出てくるだろうということで「探る」として、その最新の研究状況の一端について発表してみたいと思います。

（スライド２）古津八幡山遺跡というのは、新潟を代表する、弥生時代の終わり頃の遺跡です。皆さんご存じの内容もたくさんあるとは思うのですけれども、全体の道筋を｢はじめに｣で述べて､｢弥生文化とは｣というところから入っていきたいと思います。新潟を中心とした弥生時代の石器や石製品にはどのような特徴があるのかについて、そして休憩をはさみながら、後半は鉄製品、鉄器が弥生時代の終わり頃から新潟でも少しずつございますが、そうした石器から鉄器への移り変わりや鉄製品の内容についてご紹介する、という流れで今日はご報告したいと思います。

（スライド３）最初に「はじめに」ということですが、ご承知のように新潟県は日本海側に位置しておりますので、日本海を通じて様々なものや人､情報が入ってくる、要となるような地域です｡それは弥生時代、あるいはそれ以前の時代から、地域的にみて歴史的な重要性があることをまず押さえていただきたいと思います。日本列島の中の新潟の地理的な位置というのが、非常に大きな歴史的な重要性を持っているということです。

最近の弥生時代の研究では、石器や鉄器について､どの地域からもたらされたのか、あるいはものが勝手に動くわけではないので、それを担った人たちがどういうような交流や交易を担っていたのかというような視点で､活発に議論されているところです。新潟は周辺の地域である北陸、例えば石川

とか富山辺りとの関係性も非常に強いですし、長野県、福島県のほうとの関連性というのも非常に強いのですけれども、石器や鉄器というのに注目していくとそのルーツをどうも日本の国外、朝鮮半島のほうに求めたほうがいいのではないかというようなものとか、西日本のほうからものが来ているのではないか、そういうようなものもあります。あとは北海道とか東北地方にルーツがあるのではないかという石器もあります。石器や鉄器の内容をすべて考えるというのは難しいのですが、広い地域の交流とか交易の内容というのを考える際の研究の材料になっているのは確かで、私もそうしたことについて研究をしております。

（スライド４左）石川県小松市の八日市地方遺跡という遺跡で、６年前にヤリガンナという柄付きの鉄製品が見つかりました。この先端の部分が鉄でできています。ここはイヌガヤ属の木の柄が付いていて、ここはテープ状のサクラの樹皮でとめているというものです。この木と樹皮の部分が土の中で腐らずに残っており非常に良い状態で出た、柄付きの鉄製ヤリガンナです。ヤリガンナというのは木の表面を薄く削ったりする木工用の道具ですけれども、中世、15世紀以降に普及する台鉋より古い時代は槍のような形のカンナ、ヤリガンナというものが使われておりまして、現在でも宮大工の方とか伝統的にこういう木工具で木材を加工する方はいますが、こういうようなものが見つかりました。その驚きというのは、資料の残りの良さはもちろん、弥生時代の中でも、中期の中頃というかなり古い時代に、こうした鉄製品が北陸地方まで伝わり使われていたということを示していることです。北陸地方では、従来もっと後の時代にならないと鉄製品は見られないとか、発達しない、普及しないというふうに言われていました。しかし、こうしたヤリガンナの発見、それからたくさんの木の柄、木製の斧の柄ですけれども、これは石斧を付けるものだけではなく、鉄斧を取り付けるような柄が石川県のほうで多く見つかりはじめたことで、予想以上に早い時期から北陸地方で鉄製品の使用、普及があったのではないかというようなことが言われております。

（スライド４右）年表については細かいので省略いたしますが、弥生時代の中期と言われる時代に、北陸には八日市地方遺跡という非常に大きな遺跡があり、この遺跡を発信源として、新潟のほうにも文化的な影響関係があり、本格的な農耕集落が見られはじめたということをまずご紹介しておきたいと思います。

２．弥生時代とは

（スライド５）「弥生時代とは」というところです。もうすでに少し話しておりますが、弥生時代というのは日本の歴史の時代区分で、縄文時代のあとの時代、そして古墳時代の前の時代のことを言います。年代としては紀元前９世紀頃から紀元後３世紀の半ばまでの 1,000 年余り続いた時代です。日本の歴史上、教科書で最初に出てくる有名な女性として「卑弥呼」があげられますが、女王・卑弥呼というのは弥生時代の終わり頃、３世紀の前半頃に共立されたとされる人物です。

そして、弥生時代は非常に重要な様々な変化がある時代でして、縄文時代までは動物の狩りをしたりとか、ドングリなど木の実の採集をしたり、どちらかといえば自然の恵みに頼って生活しているのですけれども、弥生時代になると現在にも通じる農業がはじまる、水田稲作がはじまった時代です。米だけではないのですけれども、穀物を栽培することがはじまり、それがメジャーフード、主な生業活動になった時代です。

そのほか、この２つ目、３つ目の点というのは、争いに関わる事柄ですけれども、ムラの周囲に濠とか溝をめぐらす防御性を高めた集落の形が出てきたり、集団間の争いごとが増える。武器が発達した時代ということ。そして、今日の話のテーマでもありますけれども、金属器。金属器は青銅のもの、銅と錫、鉛の合金のようなもののほかに、鉄というのが実用の刃物として使われはじめます。こうした金属器、特に鉄器が現れて、また簡単な鉄製品というのが作られはじめる時代でもあります。製鉄自体はもっと後の時代、古墳時代の後期頃からですのでさらに約 600 年後のことですが、鉄の矢じりや刀子（とうす）とよばれるナイフ、小さな斧など、簡単な鉄製の道具などは自前で作られるようになります。

そして、社会的な階層関係が生まれはじめる時代。人々の社会的な階層関係とか身分の上下関係というのは、考古学の分野だと主にお墓の規模とか、あるいはお墓に一緒に埋められている、副葬されているものの内容から、この葬られた人はかなり位が高いのではないかというふうに考えるのですが、そうした社会的な階層関係が生まれはじめる。

最後も関係するのですけれども、周辺のムラや地域だけではなくて、より広い社会と関係を持つような時代。例えば朝鮮半島であったりとか、あるいは女王・卑弥呼は魏（ぎ）という中国の王朝と交渉するわけですけれども、中国大陸や朝鮮半島の勢力とか、非常に広い地域と直接的・間接的に関わりをもったり、ものを交換したりする交易活動も発達する。このように弥生時代というのは日本の歴史でターニングポイントになっている時代といえます。今日は石から鉄の刃物へというところが、核になるかと思います。

（スライド６左）この辺りも教科書のような内容ですけれども、縄文時代以来、狩猟採集の時代から水田稲作へということで、中国の山東、遼東半島をへて、朝鮮半島を南下し、福岡平野、あるいは佐賀県の唐津平野の辺りに水田稲作、米づくりは伝わります。その後、列島の各地に広がるわけですけれども、単に稲だけが伝わったというわけではなくて、米づくりの技術、水田とか、稲作に関わる道具というのも体系的に伝わるということが現在考えられているところです。新潟のほうにも少し時期をあとにして伝わってきます。

（スライド６右）時代の背景のところですけれども、この年表も少し細かくて恐縮ですが､左のほうに数字が書いてあります。１、２、３というのは、紀元後１世紀、２世紀、３世紀のことです。赤い四角で囲ったところが、ちょうど古津八幡山遺跡の時代、そこで主に人びとが暮らしていた時代です。１世紀から３世紀の前半頃まで、そこにムラがあり、お墓がありという時代です。そのあと、女王・卑弥呼が共立され、そして古墳時代のようなまた別の社会的な内容に変わっていきます。弥生時代の終わり頃の話が今日はメインになります。

この 1～３世紀は、お隣の韓国のほうだと初期鉄器時代から原三国時代と言われている時代ですね。馬韓とか弁韓、辰韓という、複数の政治的な勢力が朝鮮半島南部に存在していた時代です。中国のほうではどうかというと、王莽（おうもう）という皇帝の新、そのあと後漢、魏・呉・蜀という『三国志』の時代。およそ漢帝国の時代ですね。あとは地中海のほうだと古代ローマ帝国の時代。こうした時代、弥生時代の終わり頃の代表的な遺跡というのが新潟にあるということです。

（スライド７）「弥生文化のはじまりと時代の区分」というところです。弥生時代は米づくりが日本ではじまった時代というこ

とで、その最初の段階からかなり大きな、それ以前の時代とは質的に内容が異なる面が見られます。板付遺跡という遺跡が福岡市にございます。現在の福岡空港の辺りの遺跡ですが、この遺跡が調査された際、縄文時代の一番終わりごろの時期の土器と言われている夜臼式という土器とかなり体系立った水田の跡とが一緒に見つかりました。考古学者の佐原真さんは、この体系的な水田の施設、あるいは道具のまとまりというのが、縄文時代の終わり頃の形の土器と一緒に出てくるということで、この時期を縄文時代から区分して、弥生時代の「早期」というふうに設定をしました。こういう矢板や杭をもつ水路があったり、取水口、板を取り外せるようになっている堰のような、かなりしっかりとした水田というのがこの時期からあるということで、土器自体の形は縄文的なものですけれども、弥生時代という時代の区分をしました。

（スライド８）このように、福岡平野辺りで生まれた弥生文化､水田を伴う稲作と、それと一緒に土器のスタイルも大きく変わります｡これを１つ鍵として注目しながら、列島における弥生文化の広がりについての研究が進められています。板付土器様式と書いてありますが、これは福岡に遠賀川という川があり、その名前を冠して遠賀川式土器というふうによばれたりもしますけれども、右下の写真のような壺、それから甕とか深鉢と言われるような煮炊きに使う器、そして浅鉢、盛り付ける器である高杯などがあるのですけど、こういうような土器のまとまり、様式が生まれます。これを鍵として弥生文化の広がりや影響というのが考えられています。この弥生文化の広がりや影響というのは、新潟も含めた東日本、あるいは東北地方の北部、青森県弘前市の砂沢遺跡まで水田が伝わっておりますし、遠賀川系あるいは類遠賀川系とよばれる、土器の特徴がそのルーツをたどっていけば福岡平野などの北部九州に求められるような土器というのが見られます。

（スライド９）弥生時代は米づくりの時代だということで、さまざまな道具が使われます。特徴的なものは水田稲作に関わる道具です。例えば、博物館の弥生時代に関する展示などで見られるものとして、石庖丁というのがあります。この写真だと一番左下のものが石庖丁ですね。孔があいていて、ここにひもを通して使うのですね。手首にひっかけて落とさないようにする、あるいは手と一緒にひもを引っかけることによって使い勝手が良いようにするという、なぜか孔を２つ開けるのが共通するのですけれども、こういうようなものとか、あとは新潟ではあまりないと思うのですが、石鎌。石鎌は根刈りとか、草を刈ったりするような道具。それから脱穀具ですね。うすやきねというのは、木製品として残っています。それから農具ですね。土を耕したりとか起こしたりとかいうので、現在のスコップのようなもの。あるいは木でできたくわですね。この真ん中のものはすきだと思いますが、スコップのような形の木製品などもありますし、杭や板などもあります。こういうように木製品というのもたくさん出てきますので、こういう板とか杭とか、形がちょっと複雑なものはやはり木を細かく加工する必要があるということで、その加工するための道具というのも非常に発達する。例えば木の表面を削ったりはつったりする手斧で、片刃石斧というのがあるのですが、こういうようなもの。あとは木を切り倒したりする石の斧ですね。あとで出ますが蛤刃石斧というものなども弥生時代になって身厚に発達する。水田稲作は木製品の利用との関わりがかなりあり、そうしたものを作るためには、木製、あと石製の工具ですね、木工具も発達するという、そ

ういう流れです。

（**スライド 10**）「弥生文化を構成する要素」ということで、これも佐原真さんがＡ、Ｂ、Ｃの３つに分類をしています。大陸、あるいは朝鮮半島のほうから伝わったＡの要素のほか、縄文文化からの伝統のＢの要素、弥生時代になって新しく現れるＣの要素があります。このＡ、Ｂ、Ｃの組み合わせで列島の弥生文化に地域色、地域差というのが生まれるのですが、このＢというのは縄文文化からの伝統として受け継いだ要素ということで、例えば打製の石器、石を打ちかいて作る石の矢じり、石鏃や、あとは皮をなめしたりするときのスクレイパーなども、縄文文化以前の伝統を受け継いで弥生時代にもあります。

Ｃの弥生文化に特徴づけられるものの１つで、石戈（せっか）というものがあって、これはあとで説明をします。

そのほか赤字で示したところを説明しますと、鉄器の多くというのは、製鉄自体が弥生時代にはないので鉄の素材を入手して日本で作る、あるいは朝鮮半島とか中国大陸のほうで作られたものが輸入されます。海外で作られたものが日本に渡ってくるというものも鉄器のほか、磨製石器の一部は朝鮮半島製のものが一部輸入されているものもあるのではないかなと思います。こういうふうにＡ、Ｂ、Ｃの要素というのが組み合わさって地域差が生じています。

新潟はどちらかというと、このＢの要素が大きくて、縄文文化からの伝統で、弥生時代に打製石器というのが色濃く残るし、大陸から伝来した要素のうちの磨製石器はかなり少ない。鉄器も量としては少ない印象があります。

（**スライド 11**）実際の石器としては、このようなものです。朝鮮半島のものと当初はかなり似たセットなのですけど、一部打製石器、石の矢じりも残ります。あと石庖丁ですね。石庖丁とか石斧類があります。この円形のものは紡錘車といって、糸を紡ぐときの重しにする道具です。ちょうど今、新潟市文化財センターの企画展で「育てる・紡ぐ・織る　麻の歴史」というのをやっていますが、紡織の技術ですね、こういうものも朝鮮半島から影響、ルーツを持つ道具になります。

（**スライド 12**）あとは弥生土器に残るくぼみを分析することで、穀物、イネとかアワ、キビの栽培というのがいつごろはじまったか、という研究がございます。新潟では上越のほうが少し時代的には古いのですけど、弥生時代の前期の段階でアワではないかというのが見つかっています。かなり専門的な内容なのであまり詳しく説明しませんが、こういう圧痕分析、くぼみをシリコンで型取りして電子顕微鏡で観察すると、この穀物の内容というのが判断できるという分析です。こういうのを見ると弥生時代の前期からアワ、中下越、緒立（おたて）遺跡では「穀物？」になっています。弥生時代の前期の終わり頃、この辺りでもそうした雑穀の利用というのがはじまった。イネ自体は弥生時代の中期、このあとの時代に明確なものが圧痕のほか炭化米としても見つかっています。こういう分析も本当に日進月歩で、まだ新潟は分析の事例が少ないので、いつから穀物栽培、稲作があるのかというのは今後大きく研究が変わる可能性もあるかと思います。

（**スライド 13**）新潟の石製農具ということで石庖丁というのがあります。これは稲の穂を摘む道具ですね。磨製でできたものと、少し打ちかいて作る打製の石庖丁、あるいは収穫具かどうか明確にわからないけど、刃先を持つ打製石器もございます。磨製の石庖丁の数はかなり少ないですね。それとともに大形石庖丁という板状の石器がありまして、これは刃先が 20 センチを超え

るような、手で持つとかなりずっしり重たいようなものです。手で持っている写真がありますが、こういうものが長岡市（小国町）の水上遺跡や村上市の道端遺跡で見つかっています。

（スライド 14）石庖丁は穂摘み、こういう穂の軸のふもとの部分をほぼ１本ずつ摘んでいく道具です。ですので現在の収穫と比べるとものすごく手間がかかるのですが、こういうような使い方、１本ずつプチプチ摘んでいくというものです。先ほどの大形石庖丁とよんでいるものは、稲わらの根元に近い部分に刃を当てて、のこぎりのように刃を縦方向に動かして刈る道具というふうに考えられています。なぜこういうふうに考えられるのかというのは、専門的な内容になりますけれども、刃についた傷痕を金属顕微鏡で観察すると、どういう方向に石器を動かしたのかがわかったりする。あとは特徴的な傷痕、使用痕というのがありまして、イネ科植物との接触ではコーングロスという非常に小さな光沢を帯びた痕跡が見つかるということで、具体的な機能や用途の推定がされています。

北陸では磨製の石庖丁というのは非常に少なくて、一方で大形の石庖丁というのは割と確認されています。稲作の時代だとか、水田稲作が広まった時代といいますけれども、どのような道具を用いて、稲を収穫していたのか、その地域差の詳細は実はまだよくわかっていません。石庖丁が少ないのは、穂摘みがやや少なく、根刈りのようなやり方も多かったかもしれないと思うのですけれども、このような農具が組み合わさって使われていたようです。

３．弥生時代の石器・石製品

（スライド 15）さて、新潟の弥生時代の石器にはどういうものがあるのかということで、これは古津八幡山遺跡弥生の丘展示館で今企画展がされていますけれども、そこで配布されているパンフレットをそのまま、非常に説明しやすいということで使わせていただいています。新潟の弥生時代の石器というのは、大きく弥生時代の中期、紀元前の時代と、紀元後、１から３世紀の時代と、大きく時代を分けて考える必要がありますが、紀元前の時代、弥生時代の中期の遺跡の平均的な数量というのを 13 遺跡の平均を出していくと、１遺跡あたり 450 点を超える石器、石でできた道具というのがあります。これはもちろん遺跡の規模とか、発掘調査の面積などによりますので、一概に言えないのですけど、代表的な遺跡の 13 遺跡ということなので、割と多くの数量の石器が使われている時代といえます。弥生時代の後期、紀元後の時代になると、それが 160 点、170 点というように３分の１ぐらいに落ちていくということで、遺跡の規模自体は非常に大きいので、この減少した背景というのをどういうふうに考えるのかということで、金属が使われはじめたから少なくなったのではないかという推測ができます。

内訳について見てみると、この円グラフです。特徴をつかむためにいくつか抜き出して太字にしていますけれども、この赤い点線の部分が、石を打ちかいて作る石器、打製石器の種類です。石鏃がかなり多いですね。それと青いところが木や骨や皮、内容物すべてについて推定は難しいのですけど、何か削ったりする道具ということで、掻削器類。両極石器というのは用途不明であったり、石器製作の過程で出たものもあると思うのですが、いずれにしても打製石器が全体の４分の３ぐらい、非常に多くを占めています。

弥生時代の後期になると、この赤い点線の部分、打製石器の割合が減ります。今回資料を準備していて新たに気づいた点とい

うか、面白いと思ったのは、この薄緑のところで、「磨石」と書いています。この磨石がかなり多いことです。ドングリなどの種実の脱殻・粉砕に使うような石製品なので、生業のなかで稲作の比重が中期から変化したのかもしれません。もちろん石器自体は減っているのですけれども、全体に占める割合として磨石というのが多い。あと、緑色のところの軽石製品ですね。軽石製品は裏山遺跡や古津八幡山で出ておりますが、何か刃物、金属も含めて刃物を少し粗く削ったりするときに使ったりとか、あとは浮きとして使ったりとか、そういう使われ方をするものだと思います。

こういうふうに打製石器の割合が減るということ、あとは石器全体の量が減るということから、金属の利用というのが増えていったのではないかと推定できるわけです。

あとは砥石の性格、おそらく研ぐ内容や対象物というのが弥生時代後期には変わるのではないかと思います。この黄色で示しているところが砥石ですが、比率自体は中期と後期で変わりませんけれども、後期になると金属、主に鉄器を研ぐ砥石が増えたのではないかということで、今日の講演の最後のほうで砥石のことについても触れたいと思います。

（スライド 16）それで、弥生時代の石器、鉄器の代表例ということでいくつかご紹介していきたいと思います。まず木を切り倒すための道具ということで、太形蛤刃石斧というふうによびます。よく学生から質問があって、どこが蛤刃なのかということですが、この刃を横から見るとここが蛤の形に似ているということで、水野清一さん、小林行雄さんといった戦前・戦後に活躍された先生方が太形蛤刃という形でよばれたのが最初のようです。これは木を切り倒すための道具、伐採用の斧です。

新潟の特徴ということでいくと、太形蛤刃石斧のかなり多くの量が榎田型石斧というものです。これは何かというと、長野盆地、長野県の北部の遺跡でつくられたもので、緑色岩とか閃緑岩と言われるような岩石で、非常に比重があって、持ったらずっしりと重たい岩石なのですけれども、こういうようなものが多く認められます。長野のほうで作られたものが、新潟の弥生時代の中期を代表する遺跡では、点々と見つかっています。上越市の吹上遺跡では 20 点弱ですね。これには蛤刃石斧だけではなくて、扁平片刃石斧という木材を加工する斧にも使われておりますけれども、かなり多いですし、あとは長岡市の大武遺跡でも５点見つかっています。

榎田型石斧の特徴ですが、表面全体をきれいに磨いたものが大半を占めています。そして一部は、刃先と反対の根元の部分、ほとんど使用とは関係ないところまで入念に磨いたりとか、平担にしたり、そういう手のこんだことをしています。そして中央から根元の部分まで厚さが一定で、ずんぐりとしたような円筒形をしている。刃先の両縁・側面側が面どりされる、こういうような形の特徴があります。

今言った器面ですね、表面をピカピカに磨くということは非常に手間のかかることなので、そうして作られたものというのはかなり高い価値を持っていて、「交換財」として遠くまで交易されたのではないかと思われます。図面上では、研磨した部分が表現されていますが、このように刃先から根元までピカピカに磨いたものは、付加価値の高い、いわば信州のブランド品と言ってもよいものだと思います。

（スライド 17）どういう地域に広がっているのかというと、まず長野県の北部で作られます。榎田遺跡や松原遺跡です。１遺跡だけではなくて、製作の工程を分担しながら複数の遺跡で作られたのではないかと

考えられています。ここで作られたものが、上越とか、柏崎とか長岡市まで運ばれています。ものが勝手に動くのではなくて、おそらくこれらの遺跡と遺跡の間に人の交流とか婚姻、何らかのもののやりとり、それぞれの地域の特産物もあるかもしれません。長野県埋蔵文化財センターの馬場伸一郎さんは、佐渡で作られる管玉というビーズがその交易の対価のような扱われ方をしたのではないか、という説を出されています。佐渡辺りで作られたビーズが長野県とか関東のほうへ南下するのですけれども、それと逆の方向で長野のほうからはこの石斧というのがブランド品として逆輸入というか、搬出されている。こういうようなことをおっしゃられています。この10年20年の調査で新潟、そして長野県の北部、あるいは群馬県の方面という北陸新幹線ルート周辺の大規模な遺跡の調査・研究が進み、交流、交易の内容についても注目されています。

（**スライド18**）次に金属製の武器をまねて作られた石製品についてご紹介します。弥生時代、弥生文化で独特な発展を遂げた石器ということで、A、B、Cと先ほどご説明したうちのCにあたるもので、武器形の石製品とよばれているものが新潟でも見つかっています。これ自体が武器として使われたかというと、おそらく多くは武器としては使われていないもので、祭祀具として使われるようなものだと思われます。金属製の武器というのがルーツになっており、それが石や土で形をまねて作られます。この左のほうにある、これは上越市の潟町というところで、1927年、昭和初期に高田師範学校の生徒さんが拾われて、そこの先生であった森成麟造という方が所有していた磨製石戈です。戈という長い柄をもって、うち下ろすように使われる句兵の武器が青銅器であります。穿とよばれるひもを通す孔、そしてここが内とよばれる木の柄に挿し込む突出部で、切先・刃と直交する向きに柄が取り付きます。もともとは武器なのですけど、それが石に置き換わって、柄に挿し込むこの突出部が、どんどん退化して、あまり機能を果たさなくなる、武器ではなくなっていくのですが、こういうものが見つかっています。

そのほかに石でできた剣ですね。おそらくこれも武器というよりも、何か持って脅したり、祭祀具として使ったり、あまり実用的ではない道具かと思います。

右上は石ではなく土でできたもので、明らかに武器ではありません。これも先ほど説明した戈を模したものです。青銅の戈の形を、土でまねて作られたものが、吹上遺跡で見つかっています。これも観察のポイントがいろいろあるのですが、こういう樋とよばれる溝を掘って、その間に鋸歯文とよばれるジグザグの文様、これは実際に青銅器で全く同じ文様を持つ、近畿型銅戈とよばれるものが長野県中野市の柳沢遺跡で見つかっています。溝の先端が離れていることなど細かな特徴も共通しています。なので、青銅器の存在を知っている人がおそらく吹上遺跡の辺りに住んでいてこの土製品を作ったのだと思います。そのほかにも、大武遺跡で見つかっているこういう幅がやや広い切先の石製品も石戈ではないかと考えています。こうした石製品・土製品の製作は、金属器を知っている人物の手によるもので、金属器文化が朝鮮半島南部や西日本から新潟のほうへと広がってきていたことを示しています。

（**スライド19**）次に、はかりについてご紹介いたします。これも吹上遺跡ですけれども、報告されたときは銅鐸形石製品というふうによばれていたものです。近年、はかりについての研究が進む中で見出されています。ほかの銅鐸形と言われているものだと、打ち鳴らすための仕掛けみたいなも

の、ここが中空になっているようなものというのが土製品であれば一般的です。このように平担で中実になっていて、穴が１つあいているようなものは、銅鐸形ではなくて、何かものを量ったりする、さおばかりに吊るして使うおもりの可能性が指摘されています。権（けん）といいますけど、こういうものが新潟でも見つかっています。まだ慎重な意見とか、銅鐸形かどうかというところは議論が分かれるところもあるのですけれども、吹上遺跡ではこれとは別に、確実に銅鐸形の土製品とよべるものもあることから、私はさおばかりの権の可能性が高いと考えています。弥生時代の計量に用いるおもりとしては新潟が最東端、最北端の事例になります。こういうはかりを用いるような交易活動があったことを示しています。砂岩でできていて、２センチ×３センチほどの非常に小さなもので、８グラム弱という重さなので、何を量ったのかというと、ビーズとか何か軽いものだと思われます。

（**スライド 20**）このように石権、石のはかりは日本列島の中で日本海側だと吹上遺跡が現在見つかっている最東端ですし、太平洋側では愛知県の八王子（はちおうじ）遺跡という所で、分銅のような石製品が見つかっています。権にはさおばかりに取り付け、吊るして使うものと天秤にのせて使うものがあるわけですが、その東端の例です。そして新潟という地域性を考慮すると、日本海を通した交易などで用いられたのではないかと考えられます。

（休憩）

今まで、弥生文化の話から始まって、新潟の弥生時代の石器・石製品についてご紹介しており、かなり資料の個別的な話になっているのですけれども、新潟というのは地域色を強く反映した、そういう場所だということがご理解いただけたかと思います。

（**スライド 21**）次に、アメリカ式石鏃とよばれている石鏃についてご紹介したいと思います。これもよく学生からの質問で、何がアメリカなのかという話になるのですけど、これはアメリカインディアンですね、先住民の人が使っていた石鏃、石の矢じりの形に類似するということで、「アメリカ式」というふうに言われているものです。どういう形なのかというと、ご存じの方もかなりいらっしゃるとは思うのですけれども、ここに代表例を出していますが、平基ですね、基部が平担なものか、ちょっと内湾するもので、ここに２つのえぐりが入るのですね。根元の側辺に２カ所、両方向からえぐりが入って、上から見るとカタカナの「エ」というような字に似ているようなものです。こういうようなものをアメリカ式石鏃とよんでいます。このえぐりの部分は、おそらく矢柄に矢じりを取り付けるときに巻き付けるのに必要な仕掛けだと思います。

十日町市の石原正敏（いしはらまさとし）さんが「アメリカ式石鏃再考」という論文を出しておられ、基礎的な研究となっています。それから 25 年以上経っていますので、遺跡の数とか範囲とか、内容は変わっているとは思うのですけれども、主要な遺跡の範囲というのはこの赤い点で示した範囲に広がっています。最も多く見つかっているのは福島県の白河市の天王山（てんのうやま）遺跡という遺跡で約 30 点、かなりまとまった量のアメリカ式石鏃が見つかっています。東北地方を代表する弥生時代の後期の遺跡です。濃密に分布するのは、東北地方の南部です。新潟でも、例えば古津八幡山遺跡では約 10 点見つかっています。石鏃全体は約 50 点見つかっているのですけど、そのうちの２割ほどがこのアメリカ式石鏃です。あとは分布の範囲を見ると、東北地方に多い。離れた場所では近畿の事例があり、新潟方面の石材で作られたもの

ではないかという意見もあるようですが私自身は実物をまだ確認していません。それから、直接的に系譜がつながるかどうかはまた別で、形がたまたま同じといういわゆる他人のそら似の可能性もあるのですが、九州方面でもアメリカ式、同じこのえぐりを２つ持つ、ノッチを２つ持つ石鏃というのが見つかっています。

ここで確認したいのは、この石鏃の形はおそらく東北地方の人々との関わりがあるということ、そして分布範囲の日本海側の西部、新潟でも点々と見つかっているということです。古津八幡山遺跡の出土例がその代表かと思います。これは企画展でも展示されていましたので、ご覧になってほしいと思います。

（**スライド 22**）最後、石製品の話題で、最近の調査事例ということで、石偶について触れたいと思います。弥生時代の石製品の中で、上越市の下馬場遺跡という弥生時代の後期後半の遺跡、高地性集落ですけれども、そこで打製石偶と報告をされ、さまざまな企画展や図録などでも石偶として注目されてきたものが１点出ています。遺跡の場所はここです。石偶とは何かというと、石でかたどったもの、偶というのは偶像のことですね。縄文時代から弥生時代に土偶というのがありますが、これは基本的には人の形をかたどったものと考えられています。石偶が何をかたどったのかについては、熊を模したのではないかという意見と人の形という、大きく２つの説があります。

その分布は、青森県の八戸、下北半島、それから北海道ということで、東北地方の北部から北海道にあり、秋田県や山形県では見つかっていません。東北北部の弥生時代では、中期初頭から中期前葉の石偶の事例がむつ市の二枚橋（１）遺跡にありますが、下馬場遺跡は弥生時代の後期と時期がかなり新しく、また何百キロも離れています。報告書ではこれを石偶とよび、同じ遺跡で見つかった続縄文土器とあわせて、北方系の文化との関わりが指摘されています。

実物はこういうようなものです。３センチぐらいの非常に小さなもので、これが石偶なのか何なのかというのは判断が難しいのですが、中央がくびれてわずかに突出する形、これを四肢の表現とするのかというのは、評価が分かれるところだと思います。

この石製品は、黒曜石でできたものです。両方向から意図的に加工しているというのはわかるので、石鏃の未成品ではないとは思いますが、特殊な形の黒曜石製の遺物です。

私は最初、報告書の見解に従ってこれを石偶だというような想定をし、石偶だとすれば北海道とか東北北部との関わりが深い遺物ではないかということで、その由来について検証してみようと考えました。蛍光Ｘ線分析という方法で黒曜石自体の産地を調べるという分析があります。蛍光Ｘ線を資料に当てて、発生したＸ線のスペクトルや量の特徴を調べることで、黒曜石に含まれる元素成分の量を調べる方法で、この分析を用いて大体どこの黒曜石なのかを調べることができます。産地不明なものもあるのですが、東日本～東北、北海道の代表的な産地については判別することができます。私のほかに、近年黒曜石の産地分析を精力的に進めている同僚の青木要祐さん、岩手県で東北地方の黒曜石の産地分析を行っている佐々木繁喜さんと一緒に研究をしたところ、この石製品は長野県の和田峠産の黒曜石であるということがわかりました。北方系の遺物だと考えていたので、この結果はとても意外で、より悩ませてしまう資料ということになります。要するに、石偶と断定することもできないですが、下馬場遺跡では弥生時代の後期に黒曜石を長野県のほうから入手していたということです。

研究というのは本当に日進月歩で、わかることと同時にわからないことが出てきます。下馬場遺跡の石製品は、従来石偶として続縄文文化、北海道方面の人びととの関わりで評価されてきましたが、その石材の産地が和田峠と推定され、どうもそのように単純に北方系の遺物ということはできない。石偶だとすれば石材の利用と製作過程、遺跡に残された背景の理解がかなり複雑ですし、東北北部のほかの石偶の類例に比べてかなり新しい時期のものということで、依然として謎の多い資料です。

４．弥生時代の鉄器と鉄器化

ここから今日のテーマということで、最後ちょっと駆け足になるかもしれませんが、新潟の鉄器・鉄製品のはじまり、それからどういう製品があるのか、砥石からみた鉄器化についてお話ししてみたいと思います。

（スライド 23）このスライドは準備の過程で新たに追加したもので、パンフレットから引用させてもらいました。弥生時代のいつ頃から鉄器があるのかというのも、この 10 年ほどで研究が様変わりしているところです。最も古い鉄器として確実なものは、愛媛県西条市の大久保（おおくぼ）遺跡のものなどで、弥生時代の前期の終わり頃というのが、今の定説かと思います。弥生時代の中期中頃ぐらいになると、今日最初のほうでお話しした小松市の八日市地方遺跡とか、そうした遺跡で木製の鉄斧柄であったり、鉄製のヤリガンナなどが出ています。

中期後半ぐらいになると北部九州、それから瀬戸内、山陰で、鉄製品の利用というのが活発になっていく。量的に爆発的に増えてくるというのは、弥生時代の後期中頃、２世紀頃になって増えてきます。北陸のほうでもかなりまとまった量が見つかってきます。この地図では、新潟が一応鉄器の最北の地ということになっています。弥生時代で鉄器がまとまった量見つかっている地域としては、新潟が日本の最北の地になります。

（スライド 24）ちょっと数字が小さくて申し訳ないのですが、暫定で 14 遺跡ですね。最近、新潟大学で発掘調査している長岡市の赤坂（あかさか）遺跡、15 遺跡目は鉄製品として今年報告したのですが、鉄製品かの判断が大変難しい点があり、現在分析中なので外して、14 遺跡としました。古津八幡山を枠で囲みましたが、鉄の矢じりが２点と、鉄剣が１点。鉄鏃１点と鉄剣が方形周溝墓から見つかっています。そして不明１点となっているのはヤリガンナと考えていますが、計４点見つかっています。

新潟では計 50 点ほどです。現在調査中の内容ですので、これもちょっとずつ増えていくのではないかと。なぜ増えるのかというと、これは小形の鉄器になればなるほど、判断が難しいためです。矢じりの破片、あるいは鉄製品を作ろうとしたときに出る破片は、徹底的にふるいをかければ回収される可能性もあるわけです。それから土の中の鉄分と鉄製品の区別というのが、肉眼、あるいは理化学的な分析を踏まえても判断が難しい部分があって、なのでこの点数というのは流動的です。確実に判断できるものだけで 50 点ほどということになります。

この 50 点の中にはどういうものがあるのか、代表例をいくつか示しますと、例えば三条市の経塚山（きょうづかやま）遺跡では、竪穴建物から板状鉄斧が１点見つかっています。現在の研究状況では、厚さが１センチ以上という非常に分厚い鉄斧ということで、新潟や北陸で作られたものではなく、朝鮮半島で作られたものが新潟に渡ってきた舶載品（はくさいひん）と考えるのが通説のようです。

そして、上越の裏山遺跡では鉄製のすき先が計６点見つかっています。スコップの先端に取り付ける、すきかくわか、わから

ない部分もありますが、木製の農耕具の先端に取り付けるものが６点。５点以上というのは、九州や山陰ではあると思いますが、北陸以東ですき先が出ている遺跡としては、最も多い遺跡だと思います。こうしたものがどこで作られたのかということもまだ研究が詳しく進んでいないところもありますが、北部九州あるいは山陰で作られたものが、新潟に渡ってきているのかもしれません。

ということで、この 50 点というのは、製作地とか、内容がわかるものというのはいくつかに限られるのですけれども、中には、半島産の舶載品であったりとか、西日本にそのルーツが求められそうなものもあるというのが特徴です。

古津八幡山の鉄器については、私自身明確な意見をもっておりません。皆さん展示の解説やパンフレットをよくご覧になると、いろいろな議論があることがわかると思います。特に鉄剣に関しては、鹿角、鹿の角を柄の部分に取り付けたような痕跡というのが観察されておりまして、このような特徴的な柄をもつ鉄剣の分布から、東日本の中でも非常に重要な鉄器というふうに言われています。どこで作られたのか、どのようなルートで古津八幡山にもたらされたかはわからないですけれども、東日本の鉄器の内容を考える上で非常に貴重なものであると思います。

それから鉄鏃２点についても、最近見つかった１点と、これまでの調査で見つかっていたもの。４つの孔があけられている鉄鏃というのがございまして、これも特徴的なものかと思います。そのほかヤリガンナが１点ありますが、ヤリガンナの今のところ最北の事例かと思います。パンフレットに、Ｘ線の画像などもありますので、あとで見ていただきたいと思います。

（**スライド 25**）詳しい内容は専門的なのでかいつまんで説明しますと、鉄器の普及というのがいつから、どのように段階的に進んだのかというのは、1993 年頃の認識と、現在の認識とで、かなり変化しています。かつては、東海・北陸というような地域のくくりで、鉄器がより使われるようになるのが、この赤とか黒の段階なのですけれども、かなり段階的にあとの時代になって、ようやく使われはじめ、普及していくというふうに見られていた。しかし最近は後期の中頃から後半にかけて、かなり急速的に鉄器が普及した、使用が広がったというふうに考えられるようになってきています。工具であったりとか、農具や収穫具といった主要な道具が鉄器に移り変わるというのが、この赤の段階ですが、後期の段階で石器から鉄器へと移り変わったということです。この川越哲志（かわごえてつし）さんがまとめられた 90 年代から現在にかけて、弥生時代の年代観自体の考え方も変わってきていますし、各地での発掘調査の進展によって大きく、鉄器の普及に関して考え方が変わってきているかと思います。

（**スライド 26**）新潟での鉄器の使用はいつからなのかというのは、弥生時代の中期の遺跡というのが鍵になります。弥生時代中期の遺跡で鉄製品自体は現在のところ見つかっていないのですけれども、かといってまったくなかったのかというと、そうではなさそうで、１つ事例としてあげられるのが、佐渡の平田（ひらた）遺跡の木製品です。アカガシ亜属のものなのですけれども、この木でできた組み合わせ式の鉄斧の柄の斧台の部分というのが見つかっています。柄といっても、これをじかに持って使うというのではなくて、組み合わせというのが特徴的でして、これは上から見た、写真も上から見た画像ですけれども、ここに孔があけられて、この孔に柄を差し込んで使うと。この先端の部分、両方向に少し段を持ってい

ます。この部分に袋状の鉄斧を取り付けるということになっている。意図的に両側から加工されているため、片刃石斧ではなく、袋状のものを取り付けるということで、これが鉄斧の柄であるということがわかるということです。

それで、「いつから」ということで、この遺跡というのは少し時期差もあるのですけど、溝 SD18 というところから出ていて、層位的に一緒に出ている土器を調べると、小松式とよばれる、弥生時代の中期の後葉のものが主です。弥生時代の中期という、鉄器が普及する後期後半より前の時期ですけれども、鉄器が使われはじめていたということをこの斧の柄は間接的に示しています。

（**スライド 27**）組み合わせでつくる斧の柄というのは、北陸地方に非常に多くて、例えば今日何回もお話ししている八日市地方遺跡では、こういう柄と鉄斧を取りつける斧台とよばれる部分を組み合わせる例、これは伐採用の斧ですけれども、先ほどの平田遺跡の例だと、横方向に取り付けるものですね。これと 90 度違うのですが、いずれにしてもこうした組み合わせ式の柄というのは、北陸地方で中期、後期を通じて非常に流行する斧柄の形です。なので、ちょっと想像をたくましくすると、八日市地方とか、北陸地方のいくつかの集落と関係を持ちながら、鉄斧を取り付けるような柄自体も北陸との関わりがあって、鉄斧自体もそちらの方面から佐渡に伝わったのではないかと考えることができます。

（**スライド 28**）特徴的な鉄器ということで、企画展に合わせて古津八幡山遺跡の事例をあげたかったのですけど、私自身の力量が足りないので、これまで実際に観察をしたり分析をしたことのある事例ということで、長岡市の姥ヶ入南（うばがいりみなみ）遺跡の鉄斧を紹介したいと思います。弥生時代の終わり頃、研究者によっては古墳時代に入るのではないかという意見もありますが、そうした時期の周溝墓から見つかっています。和島バイパス建設に伴う調査によって、いくつかの弥生時代の遺跡というのが発掘調査されていて、例えば大武遺跡であったり、奈良（なら）崎（さき）遺跡、そしてこの姥ヶ入南という遺跡が調査され、この遺跡ではお墓からこういう鉄斧が見つかっています。

鉄製品の研究の難しさを言ったらきりがないのですけれども、石器などと比べた時にやはりさびとか、鉄分というのが溶け出すというか、土と同化してしまったりとか、あとは表面がかなり劣化しぼろぼろになってしまって形がとらえにくいということがあります。報告でも、一応袋状鉄斧というふうに評価されてきましたが、一昨年、新潟県工業技術総合研究所下越技術支援センターで、この鉄斧自体をお借りして、Ｘ線 CT 装置を使って、内部構造について詳しく調べてみたことがあります。Ｘ線 CT は、イメージとしては病院でも用いられるレントゲン写真ですね、たくさんのレントゲン写真をコンピュータ上で組み合わせて三次元的な立体画像を得る、MRI のようなものだと思ってください。それを考古資料である鉄製品にも、最近応用しており、その研究事例になります。

さびが全体を覆っているのですけれども、Ｘ線 CT の画像を詳しく調べていくと、この筒の部分というのは鋳造（ちゅうぞう）、つまり鋳型（いがた）で作ったのではなくて、鉄板を断面円形に折り曲げて袋状に作っているということがわかりました。ここにちょっと、折り曲げて両端を合わせた時にできたすき間があります。これは横の断面です。わずかにすき間があるのですが、かなりとじ合わせがぴたっとくっついているというのが、このＸ線 CT の画像でわかります。この縦の断面というのも面白くて、筒状になっている袋部から中央にかけてかなり急激に厚みを増してい

ることがわかります。刃部の厚い部分は２センチ以上の分厚い板状、袋の部分から板状なのですけど、刃部にかけて分厚くなっています。この袋状の部分というのは両側から上手く、丸くとじ合わせて作られているというようなことがわかりました。

（**スライド 29**）こういう形の鉄斧のルーツ、製作地はどこかというところで、まずは石川とか新潟に近い地域に似たような事例がないのか探す、そして山陰とか事例を探す作業というのを、どんどん進めていきますと、福岡のほうで似た事例、御床松原（みとこまつばら）遺跡、古墳時代の始まりぐらいの遺跡で見つかっています。それから長崎県の壱岐ですね。壱岐島の遺跡で、『魏志』倭人伝に出てくる一支国の王都と言われる遺跡で、原（はる）の辻（つじ）遺跡という遺跡があるのですが、この遺跡でも類似したものが見つかっています。とじ合わせがしっかりしており、袋部から刃の部分にかけて非常に身厚になる、そういう形の特徴は姥ヶ入南遺跡のものとよく似ています。

（**スライド 30**）これよりさらに袋部のとじ合わせがしっかりしているものとして、朝鮮半島東南部の嶺南地域という地域、これは現在の慶尚道の地域、釜山とか金海、蔚山など朝鮮半島の原三国時代の弁韓・辰韓の遺跡、墓でも集落でも見つかっています。こういう袋状鉄斧で鍛造、板をたたいて鍛えて作る、そういうようなものが、朝鮮半島東南部で見つかっています。かなり計算され、とじ合わせがぴたっとくっつくような、袋部にすき間があまりないようなものがあります。姥ヶ入南遺跡で出た鉄斧のルーツというのは、こういうところで作られたものではないかというふうに考えています。

（**スライド 31**）どういうふうに作ったのかというと、村上恭通（むらかみやすゆき）さんの研究によれば、こういう厚みの異なる鉄板を素材として、柄張りを内型のようにして巻きつける、そういうような鉄器の製作技術ではないかと考えられております。非常に高度な技術で作られたもので、弥生時代では朝鮮半島で作られたものであると考えられ、姥ヶ入南遺跡で見つかった鉄斧も朝鮮半島産だと思います。

最後駆け足になりそうですが、最後の話題ということで、石器から鉄器への変化について、砥石に注目してみてみたいと思います。新潟で見つかっている鉄器というのは 50 点ほどです。まとまった数量、数十点出る地域というのは、日本海側でも新潟が最北の地であるのですけど、この 50 点を多いと見るのか少ないと見るのかというのは少し議論があると思います。ただ、石器自体も数が減り、打製石器の比率も、非常に少なくなっているということで、弥生時代の終わり頃になると、鉄器に移り変わったと考えられます。

（**スライド 32**）砥石の研究でどうやって石器から鉄器への変化を読み解くかというところを疑問に思われる方もいらっしゃるかもしれません。金属の刃物、特に鉄器の刃先を研ぐ場合には、砥石の目の細かさでいうと、ごつごつした目の粗いもので研いでしまったら、傷だらけというか、刃がぼろぼろになってしまいます。そのため、より繊細に研ぐことができるような砥石、非常に緻密な表面を持つような目の細かい砥石の必要性が高くなったのだろうと考えられます。刃先を研いだり、メンテナンスするときです。大きく形を変えたりする場合には、逆に粗砥石、非常に粗いものも重要になる場合がありますが、鉄器の日常的な研磨という意味では、細かいものの重要性というのが高まったと思います。それを客観化するために、私はサンドペーパーというのを活用して、その目の細かさというのを評価しようとしています。企画展の展示

でもサンドペーパーの実物を貼りつけて「触ってみよう」というコーナーがあって面白いなと思いました。現在市販されているサンドペーパーは目の細かさによって15種類ありまして、数字の小さいものから粗砥、40番からあって、大きいものほど目が細かい仕上砥というふうになっています。この15種類をもとに、遺跡で見つかっている砥石の顕微鏡の画像とサンドペーパーの画像というのを比較しながら、その砥石というのはサンドペーパーでいえば何番の目の細かさに該当するだろうかというような調査をしています。粗いものほど大きく削れるわけです。表面がより繊細な仕上げの研磨というのは、細かくなるわけです。削れる範囲というのもミクロンのレベルで小さくなっていく。粗砥、中砥、仕上砥というような分類がされていて、それに対応するようなサンドペーパーの目の細かさというのがあるわけです。いくつかの新潟の弥生時代の遺跡を、どういう砥石が出ているのかというのを調べました。

（**スライド33**）グラフの見方ですが、左に行くほど目の粗い砥石、右側に行くほど細かい砥石ということです。この数字というのは何点出ているということです。例えば柏崎市の箕輪遺跡、弥生時代の中期の遺跡では、13点の中の割合なのですけど、粗い砥石であったりとか、100番とか、そういうようなものが割と多い。一方で、古津八幡山遺跡をみてみると、裏山でもそうなのですが、この赤いところ、600番、800番、2000番という、触ったときに非常に滑らかなつるつるしているようなものが多いです。一方で箕輪遺跡の砥石の表面というのは、ザラザラというか、ちょっと皮膚が痛いような感じです。古津八幡山では非常に細かな仕上げ用の研磨が主体になっているといえます。一方で、非常に粗い砥石というのが少ない特徴があります。このように遺跡間の違いというのを調べていきますと、古津八幡山遺跡は弥生時代後期の遺跡ですので、後期になるとこういう仕上砥というのが役割を担う、メインの研ぎであるということで、これは対象物が鉄器に移り変わったからではないかと考えることができます。

（**スライド34**）興味深い事例として、古津八幡山遺跡の溝と包含層出土の砥石があります。実は私が5年ほど前に、ここのセンターで資料の調査をさせてもらったときに、別々に袋に入っていたものです。調査しているときに接合することに気付いて、大変驚いたというか、数メートル離れている場所のものでしたけれども、幸運にも約1,800年ぶりにくっついたという事例です。

面白いのは、この図でもわかると思うのですけれども、先端が直線的で平面形が長方形状の痕跡というのが、いくつも隣同士重なり合いながら、表面を多数覆っていることです。一部砥石としても使われているのですけれども、こういう表面の加工の痕跡というのは石器ではないというふうに考えています。おそらくこれは鉄のノミで表面が加工された、つまり研ぐための加工具である砥石を成形するのにも鉄が使われはじめたということです。こうしたことも間接的に鉄器の利用のはじまり、普及を示していると思います。

（**スライド35**）実際に新潟でも村上市の堂の前遺跡という遺跡で、ノミではないかというもの、棒状で先端がすぼまりながら尖る、こういうものが見つかっていますし、北陸のほかの遺跡で弥生時代の終末、古墳時代の始まり頃になると、こういうかなり立派なノミのようなものも見つかっていますので、砥石などの石製品もこういうものによって作られたと考えられます。

（**スライド36**）これは裏山遺跡の例ですが、ここのトーンがかかっている部分とい

うのは砥石として使われている部分で、真ん中の部分というのは砥面ではなくて、表面の打ち割ったあとがそのまま残っている部分です。注目されるのはこの赤い四角で囲った部分、この部分なのですけど、左右の方向から擦切（すりきり）を入れて、真ん中をばきっと折りとって作っていることが分かります。側辺に擦切を加えて、切断して、この平担面を利用して砥石としているという、そういう事例です。擦切の痕跡は、１ミリないぐらいのものです。この擦切が石によるものとは考えにくいということと、弥生時代の後期、終末期の砥石は、平担面を利用するものが多いです。薄く平担な鉄器の表面、あるいは刃先の仕上げは、こういう平担面の利用が適していると考えられます。砥石の形態的にも断面が真四角に近い柱状の現在の砥石にかなり類似したものが増えてきます。現在の砥石のルーツは弥生時代にさかのぼるというふうに言えると思います。砥石の利用として、そうした大きな変化が、弥生時代の終わり頃にあるということです。

５．おわりに

（**スライド 37**）今日の話をまとめますと、弥生時代の中期の中頃から後半に、おそらく北陸地方の八日市地方遺跡を中心とした地域からの影響関係によって、新潟のいくつかの拠点的な遺跡が出現し発展します。上越をはじめとして、青銅製の武器を模倣したような石製品もありますし、あとは石でできたはかり、石権、そうしたものを用いた交易活動もあったと考えています。

金属器の普及という意味では、新潟では弥生時代の後期の後半ですね、古津八幡山遺跡の時代というのが重要で、これは高地性集落の広がりとも関わっています。高地性集落の性格は単純化できませんが、社会的な緊張関係を背景とした防御性を持つ集落だと思います。しかし遺跡の中に閉じこもっていたのかというとそうではなくて、高地性集落を拠点としてさまざまな地域とやり取りはあったと思います。西日本であったりとか、朝鮮半島南部からもたらされた鉄器というのは、そうした交易や文化の広がりというのを示していると思います。

時間になりましたけれども、これからもいろいろと調べていく中で、今日お話した内容も少しずつ変わっていくかもしれません。古津八幡山遺跡の調査・研究の成果も期待しているところです。ありがとうございました。

令和５年度 史跡古津八幡山 弥生の丘展示館企画展2

「古津八幡山遺跡の石器と鉄器」 関連講演会　2023/11/26

石器・鉄器から探る新潟の弥生文化

新潟大学人文学部
森　　貴 教

スライド1

本発表の構成

1　はじめに

2　弥生時代とは

3　弥生時代の石器・石製品

4　弥生時代の鉄器と鉄器化

5　おわりに

スライド2

はじめに｜本発表のあらまし

- 日本海沿岸の**石器や鉄器**について,「**交易**」の観点から注目
- 新潟県域｜北陸西部や信州との関連はもちろん,**朝鮮半島南部や西日本，北海道に系譜を辿れるとみられる資料**も散見

- 石器・鉄器の内容を検討することで日本海沿岸，東日本に展開した**広域的な交流・交易の実態や地域間の関係**について考察することにつながる

北口聡人 2012「鉄の道の終着駅」『みずほ』第43号、大和弥生文化の会

スライド3

はじめに

八日市地方遺跡
柄付き鉄製ヤリガンナ

石斧柄と鉄斧柄

中屋克彦ほか（編） 2019『小松市八日市地方遺跡』

西暦	時代区分	八日市地方遺跡			日本列島	中国大陸・朝鮮半島
	縄文後期	遺構を伴う土器群	(集落)	(土器)		
BC.550					西日本に水稲耕作が拡散	
	弥生前期			1		BC.479 孔子死去
BC.400		川跡に遺物散見		2		BC.403 三晋の成立（趙、魏、韓）
BC.350		柳描文系土器の波及		3	金属器使用の開始	
		環濠集落の成立		4		
	弥生中期前葉		Ⅰ期	5		
		環濠再掘削 居住域拡大				
BC.300		小松式土器の成立		6		BC.312～279 燕の東方進出
BC.283+						
		環濠再掘削				
BC.250+ BC.250+	弥生中期中葉	鉢の使用		7	東日本で広域な社会変動	BC.246 秦王政即位
BC.220+		八日市地方遺跡の最盛期	Ⅱ期			BC.221 秦の始皇帝が中国統一
BC.200				8		BC.202 高祖（劉邦）が漢王朝を興す BC.195 衛氏朝鮮の成立
		凹線文系土器の波及				
		居住域縮小		9		
BC.139+ BC.136						
BC.107+ BC.100 BC. 97+ BC. 40	弥生中期後葉		Ⅲ期	10	『漢書地理志』に「分島百餘國」の記述 鉄器生産の開始	BC.108 前漢が朝鮮半島に四郡を設置 BC.37 高句麗の成立
		集落衰退				
AD. 80	弥生後期				AD.57 奴国王が後漢に使い（金印賜与）	AD.25 光武帝即位（後漢のはじまり）

スライド4

弥生時代とは｜企画展によせて

- 紀元前９世紀頃から紀元後３世紀なかばまでの時代
  縄文時代　／　**弥生時代**　／　古墳時代

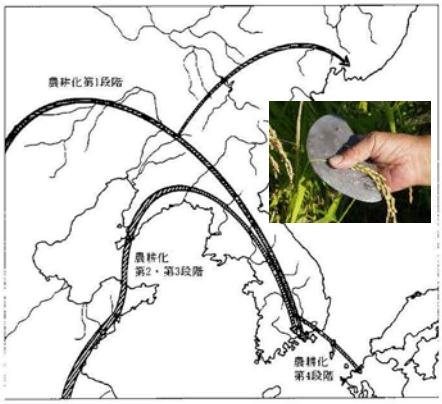
【弥生時代になってあらわれた内容】

- 本格的に水田稲作がはじまった　・・・　**米づくり**
- 溝をめぐらすムラ　・・・　**環濠（かんごう）**集落
- 集団間の争いが増えた　・・・　武器が発達
- 金属器の使用　・・・　**石から鉄の刃物へ**
- 社会的な階層関係が生じはじめた　・・・　首長
- 政治的社会への傾斜　・・・　より広い社会秩序，交易

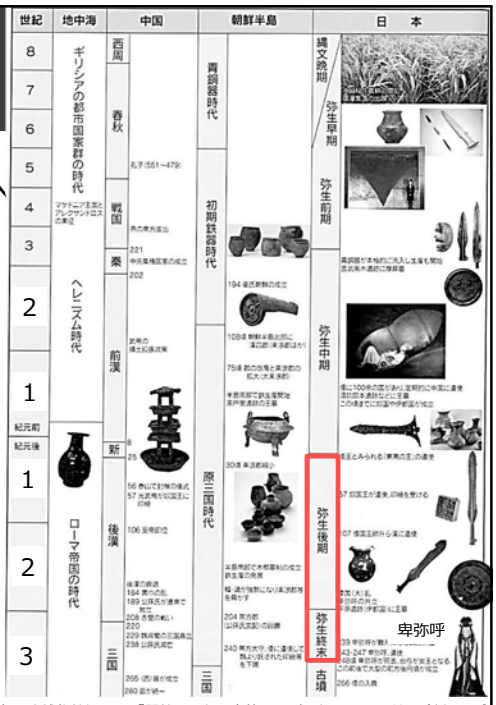
スライド5

弥生時代とは

- 狩猟採集から水田稲作へ
- **技術と道具**の伝来・定着



宮本一夫　2009『農耕の起源を探る　イネの来た道』（歴史文化ライブラリー276）、吉川弘文館



福岡市博物館編　2015『開館25周年記念特別展　新・奴国展－ふくおか創世記－』

スライド6

弥生文化のはじまりと時代の区分

- 福岡市板付（いたづけ）遺跡
  縄文時代終末期の土器
  と**最初期の水田跡**が一
  緒にみつかる → **弥生早期**

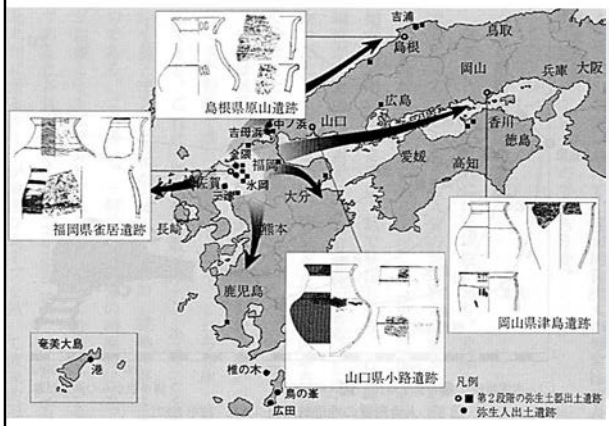
山崎純男　2008『最古の農村　板付遺跡』（シリーズ「遺跡を学ぶ」48）、新泉社

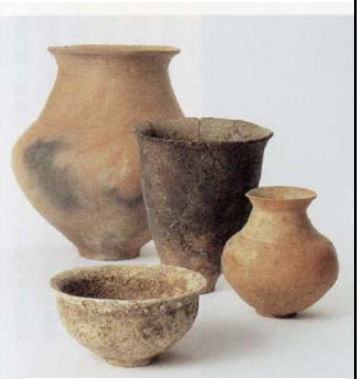
板付遺跡の弥生早期水田の復元図

スライド7

弥生文化の広がり

- 板付土器様式（**遠賀川（おんががわ）系土器**）｜深鉢・浅鉢＋**壺**（つぼ）
  弥生文化の広がり・影響を反映　→　東北地方北部まで





福岡市板付遺跡の板付Ⅰ式土器

田中良之　2014「いわゆる渡来説の成立過程と渡来の実像」『列島初期稲作の担い手は誰か』すいれん舎

スライド8

弥生時代のさまざまな道具

- **水田稲作**に関わるさまざまな道具
  収穫具（石庖丁・石鎌），脱穀具（うす・きね）
  農具（くわ・すきなど），水田施設の構築材（杭・板）
  木工具（柱状片刃石斧・扁平片刃石斧・ノミ形石斧）

福岡市雀居（ささい）遺跡出土品　三木弘（編）2003『平成15年春季特別展 弥生創世記』大阪府立弥生文化博物館

スライド9

弥生文化を構成する３つの要素

A 大陸から伝来した要素

A1	舶来品（中国系）	金印,漢鏡,銭貨,ガラス製璧など
A2	舶来品（朝鮮系）	青銅器,**鉄器**,**磨製石器の一部**など
A3	技術・知識	稲作をはじめとする農業技術 青銅器・鉄器の生産技術，紡織技術

B 縄文文化からの伝統として受け継いだ要素

B1	品物・技術・知識	**打製石器**,土器文様,竪穴住居の構造
B2	思想・習俗	抜歯の風習

C 弥生文化で固有の発達をとげたもの

銅鐸,**石戈**,甕棺墓,ガラス製勾玉,分銅形土製品など

佐原真 1975「農業の開始と階級社会の形成」『岩波講座日本歴史1』（原始および古代1）、岩波書店

スライド10

弥生時代の石器の種類とそのルーツ

- **弥生時代の石器にはどのようなものがあるか**

韓国

3-3.
韓国慶州付近出土　石器　無文土器時代
抉入柱状片刃石斧（1点）長17.5cm、磨製石庖丁（3点）長9.9～13.3cm、
磨製石斧（1点）長13.5cm、扁平片刃石斧（1点）長10.7cm、
磨製石鏃（5点）長5.1～9.1cm　東京国立博物館

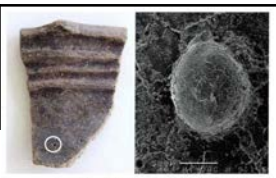
北部九州

福岡県糸島市曲り田遺跡出土品

奈良文化財研究所（監修）2005『日本の考古学』小学館

スライド11

イネ・アワ・キビはいつから？



アワ（?）の圧痕のある縄文時代晩期の土器
上谷市藤棚遺跡圧痕レプリカ電子顕微鏡写真　15kV　中沢道彦氏提供

- **弥生土器に残る圧痕（くぼみ）の分析**

推定BP	九州	山陰	山陽・四国	近畿	北陸	東海	中部高地	新潟（上越）	新潟（中下越）	関東	東北
2900～2800	黒川式（中）	（原田）	船津原式	篠原式（中）	中屋2式	桜井式・稲荷山式	佐野Ⅰb式	佐野Ⅰb式	朝日式	安行3c式	大洞C1式
	黒川式（新）	（神原Ⅱ）	谷尻式	篠原式（新）							
2800～2700	「江辻SX1」（アワ 江辻）（イネ 小迫？）	桂見Ⅰ式（イネ 板屋Ⅲ）	前池式	滋賀里Ⅳ式	中屋3式・下野式（古）	西之山式	佐野Ⅱ式（古中）	佐野Ⅱ式（古中）		安行3d式・新崎式	大洞C2式（古）
	山の寺式／夜臼Ⅰ式（キビ 橋本一丁田）	桂見Ⅱ式（キビ 三田谷Ⅰ）（アワ青木・西川津）	津島岡大式（イネ 上東中嶋・上郷）	口酒井式（イネ 口酒井）	下野式（新）	五貫森式（古）	佐野Ⅱ式（新）	佐野Ⅱ式（新）	上野原式		大洞C2式（新）
2700～2500	夜臼Ⅱa式	古市河原田式	沢田式（アワ 叶浦B）	船橋式（キビ 宮ノ下）	長竹式（古）	五貫森式（新）（キビ 大西）（アワ 山王）	女鳥羽川式（イネ 石行）（キビ 御社宮司）	女鳥羽川式	鳥屋1式	桂台式・向台Ⅱ式（キビ 田原）	大洞A式（古）
2600～2500	板付Ⅰ式／夜臼Ⅱb式	古海式	沢田式／津島式（キビ 三谷）	長原式／第Ⅰ様式（古）（アワ 船橋）	長竹式（新）（イネ 御経塚）	馬見塚式	離山式 氷Ⅰ式（古）（アワ 中道）	離山式 氷Ⅰ式（古）（アワ 松葉A）	鳥屋2a式	新田Ⅱ式・千網式	大洞A式（新）
2500～2400	板付Ⅱa・b式	「前期2式」	高尾式	第Ⅰ様式（中）	柴山出村式（古）	樫王式（イネ 大西）	氷Ⅰ式（中新）	氷Ⅰ式（中新）	鳥屋2b式	新田Ⅱ式・千網式／荒海式（アワ 平沢遺跡）	大洞A'式
2400～2300	板付Ⅱc式	「前期3式」	門田式	第Ⅰ様式（新）	柴山出村式（新）	水神平式	氷Ⅱ式	氷Ⅱ式（キビ 松葉A）（イネ？ 松葉A）	緒立式（雑穀？ 緒立）	（雑穀・荒海式・水Ⅱ式）（イネ 中屋敷）	砂沢式（イネ 生石Ⅱ）（アワ 大平・後関）

＊現時点において各地域で最古のイネ、アワ、キビデータを土器編年上に示した　2019年5月現在

中沢道彦　2019「レプリカ法による土器圧痕分析からみた弥生開始期の大陸系穀物」『月刊考古学ジャーナル』No.729、ニューサイエンス社

スライド12

新潟における石製農具の種類

石庖丁

県内出土の石包丁　1　上越市夜上遺跡　2　長岡市横山遺跡　3, 5, 6　○柏崎市下谷地遺跡
4　南魚沼市東溝西遺跡

大形石庖丁

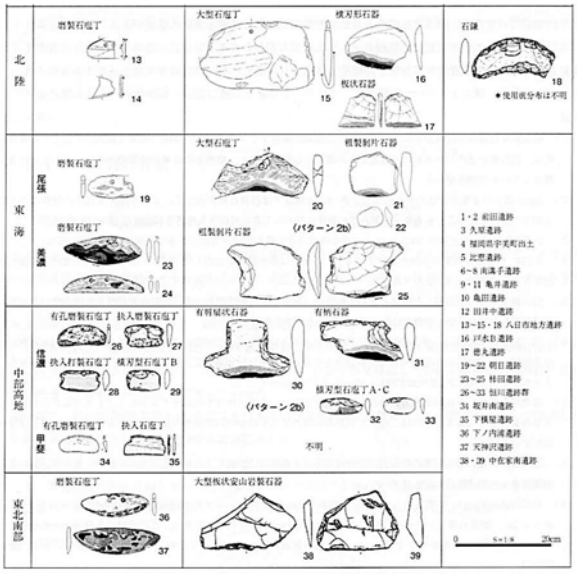
◎大型石包丁　小松市八日市地方遺跡

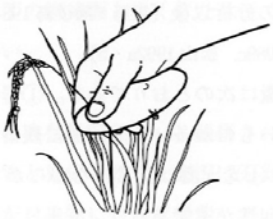
大型石包丁　左　長岡市水上遺跡、　右　村上市道端遺跡

西田泰民・宮尾亨（編）2013『弥生時代のにいがた　時代がかわるとき』新潟県立歴史博物館

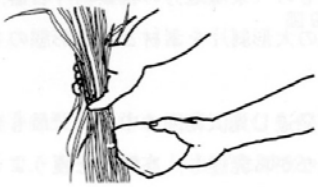
スライド13

石製農具の組み合わせ





石庖丁→穂摘み

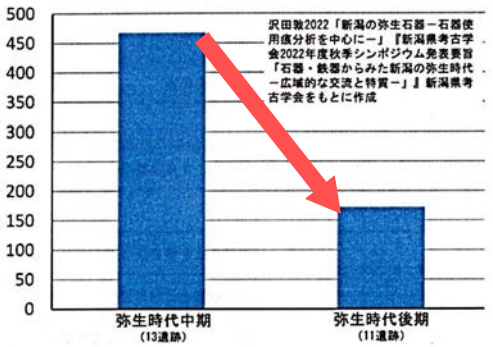


大形石庖丁→残稈・わらの切断,除草

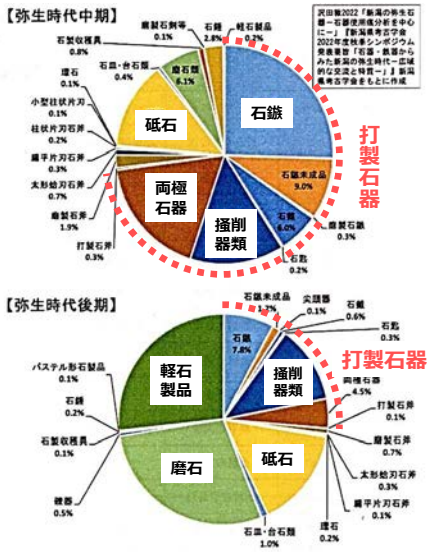
原田幹　2017『東アジアにおける石製農具の使用痕研究』六一書房

スライド14

新潟の弥生時代石器の概要



新潟県の主な弥生時代中期・後期遺跡における
１遺跡あたりの石器の平均出土点数



新潟県の主な弥生時代中期・後期遺跡の石器組成

令和5年度　古津八幡山遺跡弥生の丘展示館企画展2　パンフレット

スライド15

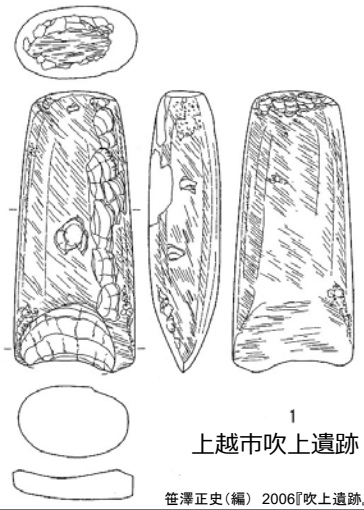
新潟の太形蛤刃石斧の特徴

- **太形蛤刃石斧**（ふとがたはまぐりば）｜**榎田型石斧**（えのきだ）とよばれる**長野盆地産の緑色岩（閃緑岩）製**のものが比較的多くみられる
- 吹上遺跡17点，大武（だいぶ）遺跡5点
- 石斧の形態的な特徴

  器面全体を研磨，基端部が平坦

  中央部から基部まで厚さ一定（円筒）

春日真実ほか（編）2014『大武遺跡Ⅱ（古代～縄文時代編）』　大武遺跡



上越市吹上遺跡

笹澤正史（編）2006『吹上遺跡』

スライド16

榎田型石斧のひろがり

- 弥生中期前葉｜北陸西部―信州が連繋　→　型式の類似品
- 弥生中期後葉（栗林2式期，吹上Ⅱ期）

「**交易**」活動が指摘

佐渡産管玉（細形）

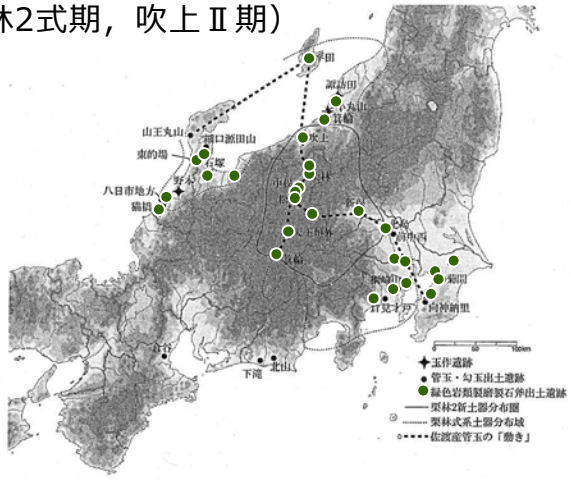
北へ ↑↓ 南へ

榎田型石斧

上越の高田平野から

長野盆地へ向かうルート

（北陸新幹線ルート）

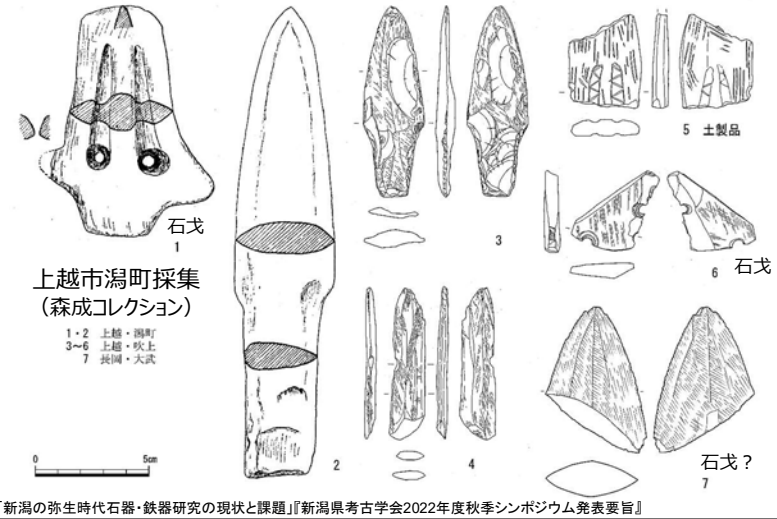


馬場伸一郎　2011「栗林式土器分布圏の石器・石製品と弥生中期社会」『長野県考古学会誌』138・139合併号

スライド17

金属製の武器をまねて作られた石製品

- 武器形石製品・土製品→**金属器文化**の東方への広がり



森　貴教　2022「新潟の弥生時代石器・鉄器研究の現状と課題」『新潟県考古学会2022年度秋季シンポジウム発表要旨』

スライド18

計量に用いるおもり

- 石権（石製のさおばかり権＝秤量用の錘）の確認

  吹上遺跡出土品　→　**列島の東限，計量技術を運用した交易**

  長距離交易における**統一化された尺度の存在を示唆する**

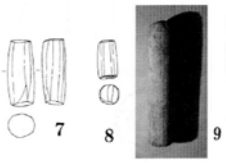
上越市吹上遺跡
１号方形周溝墓下層
重量 **7.9**グラム

笹澤正史（編） 2006『吹上遺跡』上越市教育委員会

スライド19

計量に用いるおもり

- 石権（石製天秤権・棹秤権）の分布｜**沿岸部の拠点的集落**



1古八幡付近(環濠) 2～4青谷上寺地
5曽川1号(SB1) 6文京14次
7・8吉崎・次場 9八日市地方 10吹上
11八王子(旧河道) 12朝日

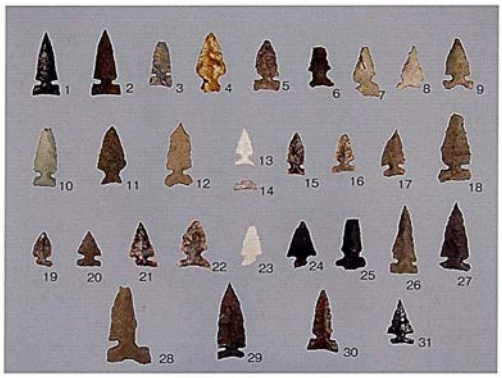
羽咋市吉崎・次場，
小松市八日市地方
→　天秤権（円筒形）

武末純一　2020「日韓の権」『新・日韓交渉の考古学－弥生時代－（最終報告書　論考編）』
林大智　2020「工具の鉄器化と地域社会の変化」『大規模環濠集落 八日市地方遺跡の存在意義とは』小松市埋蔵文化財センター

スライド20

アメリカ式石鏃のひろがり

- **古津八幡山遺跡**でも出土



新潟県内出土のアメリカ式石鏃

県内各地出土のアメリカ式石鏃　1～3　上越市吹上遺跡、4　十日町市柳木田遺跡、5・6　柏崎市荒輪遺跡、7～9　長岡市原山遺跡、10・11　見附市高稲場遺跡、12　見附市峠A遺跡、13・14　新潟市六地山遺跡、15　新潟市山谷遺跡、16～18　村上市八幡山遺跡、19～27　村上市山元遺跡、28・29　村上市長松遺跡、30・31　村上市砂山遺跡

アメリカ式石鏃出土遺跡分布図

笠井崇吉・白河市建設部文化財課（編）2018『白河市天王山遺跡の時代』福島県文化財センター白河館
西田泰民・宮尾亨（編）2013『弥生時代のにいがた　時代がかわるとき』新潟県立歴史博物館

スライド21

下馬場遺跡の「打製石偶」はどこからきたか？

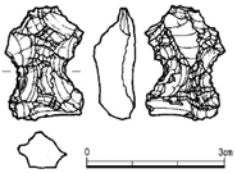
- **黒曜石製の打製石偶（せきぐう）？**

上越市下馬場遺跡出土

（弥生後期後半～終末期）

石偶と断定することは難しいが，

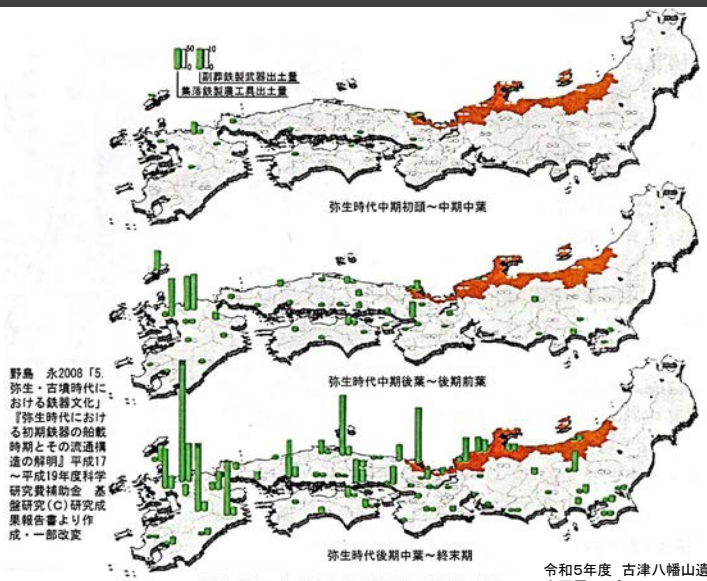
蛍光X線分析により**長野県の和田峠産黒曜石製**と推定



森　貴教・青木要祐・佐々木繁喜　2023「上越市下馬場遺跡出土黒曜石製「石偶」の石材原産地推定」『環日本海研究年報』第28号

スライド22

新潟における弥生時代鉄器の概要



野島　永2008「5.弥生・古墳時代における鉄器文化」『弥生時代における初期鉄器の舶載時期とその流通構造の解明』平成17～平成19年度科学研究費補助金　基盤研究(C)研究成果報告書より作成・一部改変

弥生時代における日本列島各地の鉄器出土量

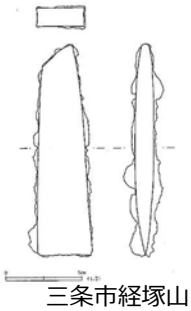
令和5年度　古津八幡山遺跡弥生の丘展示館
企画展2　パンフレット

スライド23

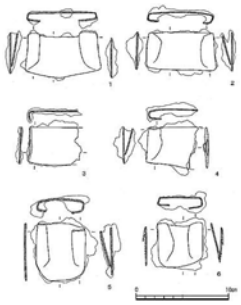
新潟における弥生時代鉄器の概要

No.	遺跡名	所在地	時期	器種・数量						
				鏃	鋤先	針状	斧	剣	刀子	不明・他
1	堂の前	村上市下新保	中期後葉～後期前葉							1
2	山元	村上市下助渕	中期後葉～後期後葉					1		
3	砂山	村上市岩船町	中期後葉～後期後葉							2
4	古津八幡山	新潟市秋葉区古津	後期前葉～終末期	2				1		1
5	経塚山	三条市妙法寺	後期後葉				1			
6	奈良崎	長岡市島崎	後期後葉						1	4
7	姥ヶ入南	長岡市島崎	後期後葉				1	1		
8	横山	長岡市横山	後期後葉							1
9	西谷	刈羽村大塚	後期前葉～後期後葉							1
10	裏山	上越市岩木	後期後葉	3	6					2
11	下馬場	上越市下馬場	後期後葉	1		9				4
12	斐太	妙高市宮内	後期後葉	2					1	4
13	後生山	糸魚川市一の宮	後期前葉～後期後葉						1	
14	千種	佐渡市金井町	後期後葉					1		

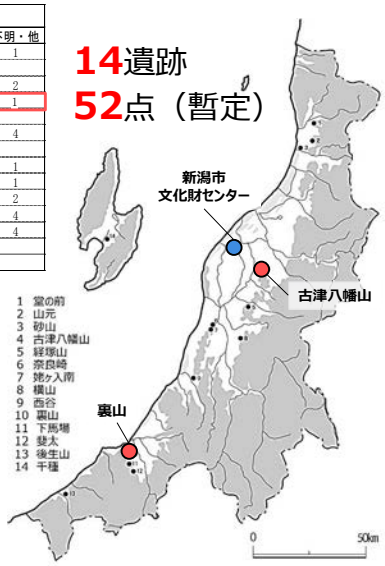
14遺跡
52点（暫定）



三条市経塚山



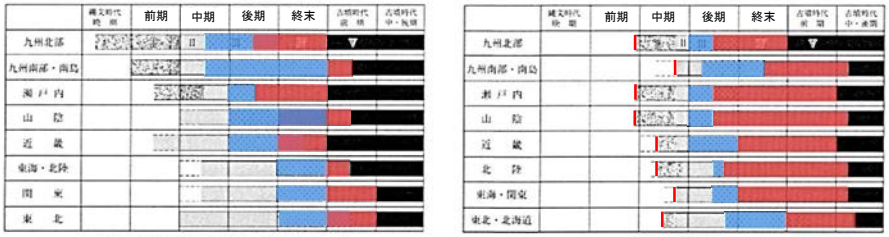
上越市
裏山



森　貴教　2019「鉄器の受容と系譜」『新潟県の考古学Ⅲ』

スライド24

鉄器の普及に対する理解の変化



20 世紀後半段階の認識（川越 1993）　　現在の認識

図　地域別の鉄器普及に対する認識の変化

Ⅰ：大陸系磨製石斧群（木工具）＋木製農具＋石製収穫具（石庖丁，石鎌）＋少量の 輸入鉄製工具（刀子，鋳造斧）
＝縄文時代晩期～弥生時代初頭の北部九州が中心で，鉄製工具が補助的な役割を担う。

Ⅱ：磨製石斧群＋国産鉄製工具（板状鉄斧，袋状鉄斧，鉋，刀子）＋木製農具＋輸入鍛造鉄刃装着農耕具（北九州のみで少量）＋石製収穫具
＝弥生時代前期末～中期前半の北部九州が中心で，瀬戸内以東はおくれ，鉄製工具も出土例は少ない。

Ⅲ：磨製石斧（減少）＋国産鉄製工具（器種が増加）＋国産もしくは輸入の鉄製収穫具（鎌，北部九州のみで少量）＋石製収穫具（石庖丁）
＝弥生時代中期後半以降で，全国的に木工具の鉄器化が進展。

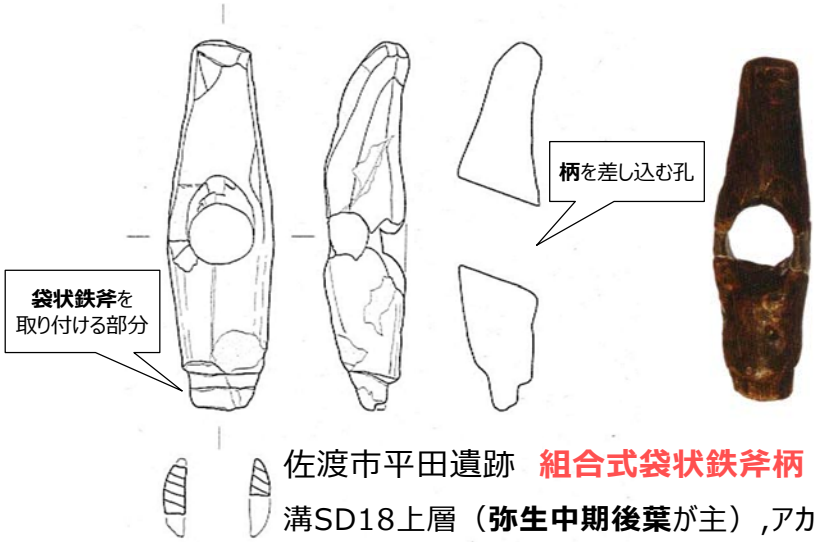
Ⅳ：鉄製工具＋木製農具＋鉄刃・青銅刃装着農耕具＋鉄製収穫具（摘鎌，鎌）＋石製収穫具（石庖丁）
＝弥生時代後半以降，北部九州で農工具の鉄器化，他地域は鉄製工具＋木製農具のⅢ段階のままで，稀に 鉄刃農具あり。

Ⅴ：鉄製工具（鋸，鑿など器種拡大）＋鉄刃装着木製農具＋鉄製収穫具
＝古墳時代前期以降。

林大智　2022「総論　新たな「見えざる鉄器」探求と鉄の広域交流」『月刊考古学ジャーナル』No.766、ニューサイエンス社

スライド25

新潟での鉄器使用はいつから？



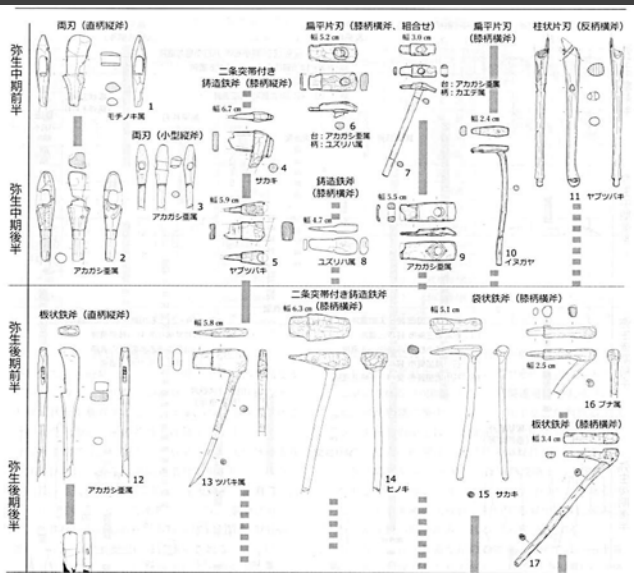
佐渡市平田遺跡　**組合式袋状鉄斧柄（斧台）**

溝SD18上層（**弥生中期後葉**が主），アカガシ亜属

坂上有紀ほか（編）2000『平田遺跡』（新潟県埋蔵文化財調査報告書第98集）、新潟県教育委員会
西田泰民・宮尾亨（編）2013『弥生時代のにいがた　時代がかわるとき』新潟県立歴史博物館

スライド26

参考　斧柄のバリエーション



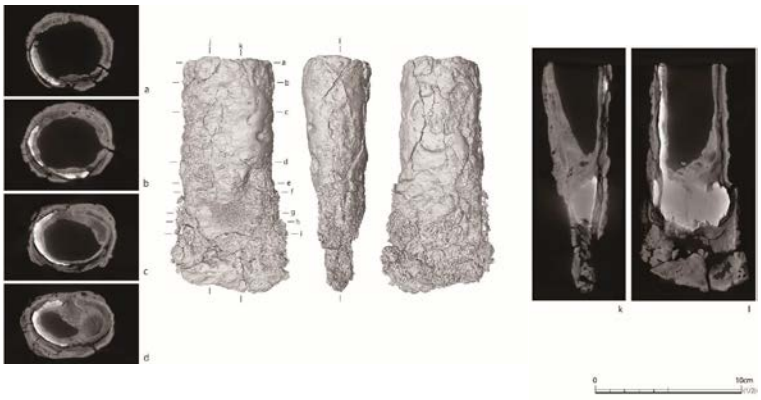
林大智　2019「木工具から読み解く木製品生産の動態」『古代学研究』第222号、古代学研究会

スライド27

長岡市姥ヶ入南遺跡出土の袋状鉄斧

弥生後期後葉～終末期の周溝墓の主体部出土

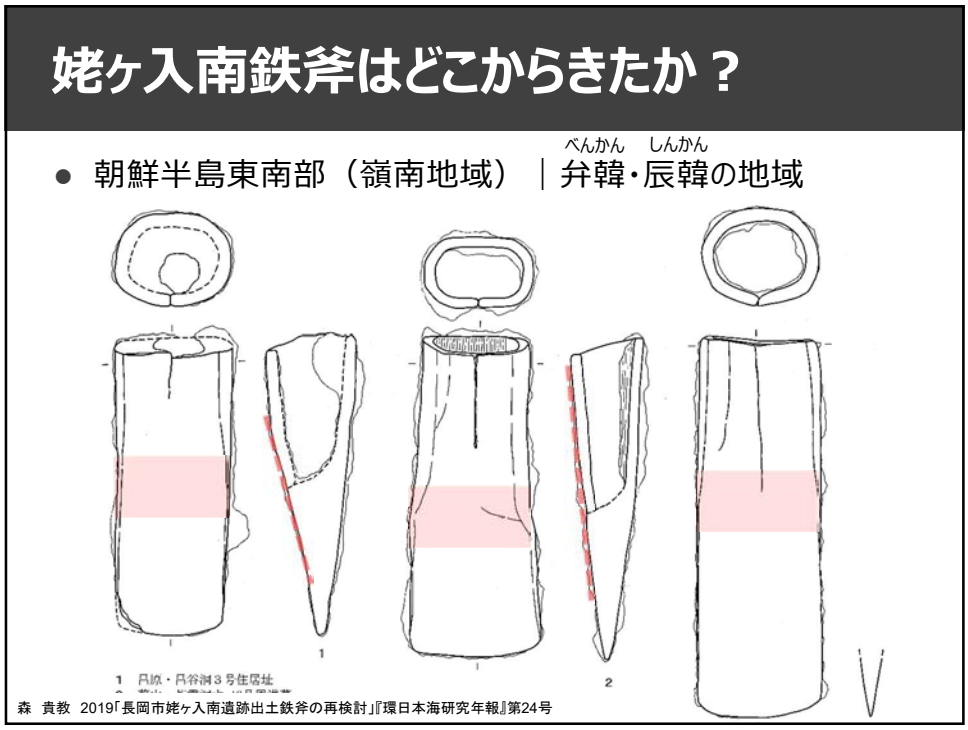
X線CT装置によるコンピュータ断層撮影を実施



森　貴教・村田友輝・古川　貢　2022「姥ヶ入南遺跡出土鉄斧のX線CT調査」『長岡市立科学博物館研究報告』第57号

スライド28

スライド29



スライド30

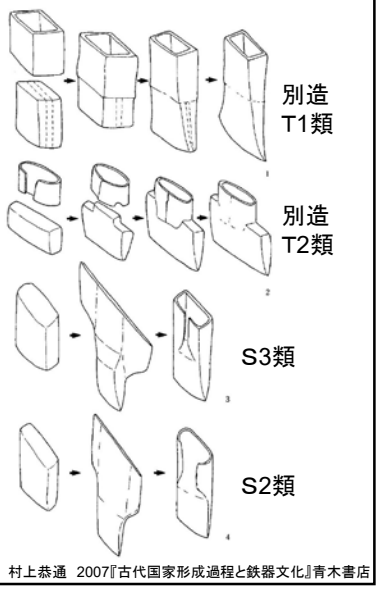
姥ヶ入南鉄斧はどこからきたか？

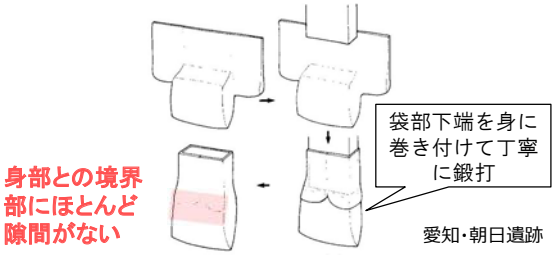
【鉄斧の製作技術について】

- 袋部と身部をたたき分ける技術

→ 柄張り（矢・内型）を使用

- 村上は，その製作地は「**朝鮮半島を想定**しなければならない」と指摘



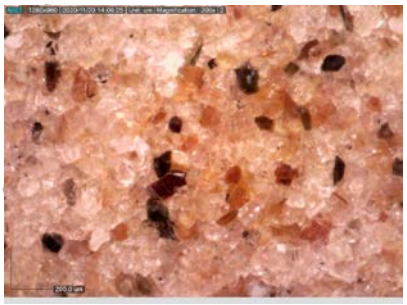


スライド31

砥石から鉄器化を読みとる

・**砥石の目の細かさ（砥石目）**をどのように評価するか？

・サンドペーパーと比較



＃40　120　400　600　2000

粗　中　細

１インチ（25.4㎜）四方の枠を分割したふるい目

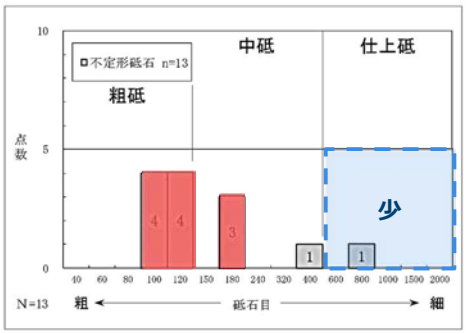
例：＃100　１インチ四方の枠を100分割した目を通過できる大きさの砥粒（2.54㎜四方）

スライド32

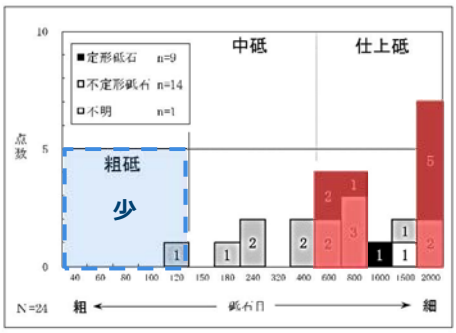
砥石から鉄器化を読みとる

弥生中期中葉～後葉の箕輪（みのわ）遺跡では不定形の粗砥・中砥が多い

弥生後期の裏山遺跡，**古津八幡山遺跡では砥石目の細かい仕上砥**が多く，定型化（**定形砥石**増加）が進む→ **鉄器化を示す**



柏崎市箕輪遺跡（中期中葉～中期後葉）



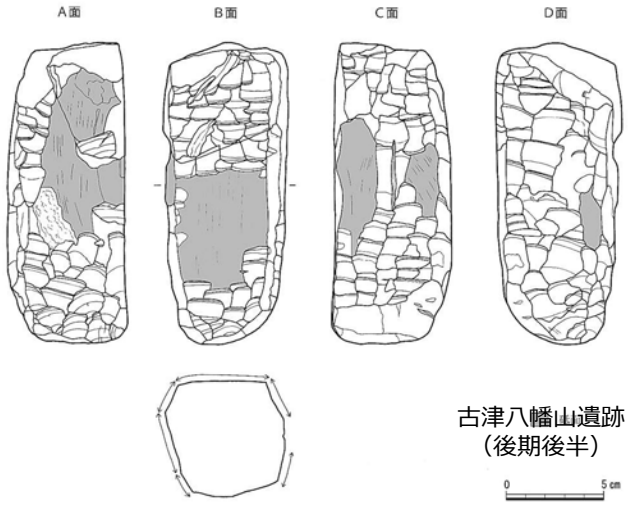
古津八幡山遺跡（後期前葉～終末期）

森　貴教　2020「越後における弥生時代の鉄器化―砥石の分析から―」『新潟考古』第31号

スライド33

砥石から鉄器化を読みとる

・**砥石自体も鉄のノミで加工されるように**



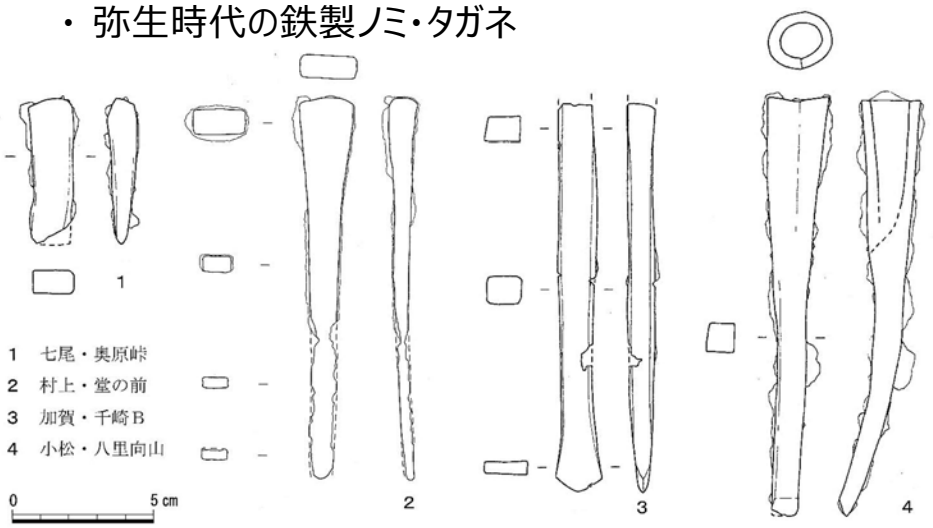
古津八幡山遺跡
（後期後半）

森　貴教　2020「越後における弥生時代の鉄器化―砥石の分析から―」『新潟考古』第31号

スライド34

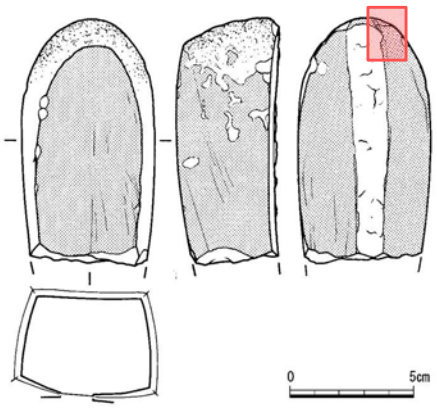
砥石から鉄器化を読みとる

・ 弥生時代の鉄製ノミ・タガネ



森 貴教 2020「越後における弥生時代の鉄器化―砥石の分析から―」『新潟考古』第31号

スライド35



上越市裏山遺跡（後期後半）

・ 側辺に**擦切**を加えて切断し，**平坦面**からなる砥石を製作 → **鉄器の研磨**用

森 貴教 2020「越後における弥生時代の鉄器化―砥石の分析から―」『新潟考古』第31号

スライド36

おわりに｜石器・鉄器から探る新潟の弥生文化

- 弥生時代中期中葉～中期後葉｜石川県小松市の**八日市地方遺跡を発信源**とした北陸西部・西日本からの文化的影響
  → 上越市吹上遺跡，長岡市大武遺跡，新潟市西郷遺跡・・・
  → 青銅器模倣遺物（石戈）＋石権を用いた計量技術の存在
  → **初期鉄器文化**（**粘土帯土器文化**）の拡散・交流
- 弥生後期中葉～終末期｜**高地性集落**が広がることと関連
  → 「社会的緊張関係」を背景とした防御性をもつ集落形態
  → 西日本や朝鮮半島南部からもたらされた**鉄器**も流入
- 日本海沿岸における**列島東西・南北の文化接触／交流の場**

スライド37

第２章　企画展の概要と
企画展関連講演会アンケート結果

令和５年度は、弥生の丘展示館で企画展を２回開催した。なお、各企画展のパンフレットを巻末に付録として掲載した。

企画展２の会期中、新潟大学の森貴教准教授からご講演頂いた（第１章に収録）。講演会は市文化財センターの研修室を会場に開催し、オンラインでの配信も行った。また、講演会では会場の参加者を対象にアンケートを実施した。

以下では企画展及び関連講演会の概要と、関連講演会のアンケート結果（図１・表１）などについて記す。

（１）令和５年度弥生の丘展示館企画展の概要

企画展１　「古津八幡山遺跡発掘調査速報展
－令和４年度の発掘調査成果について－」

開催期間　令和５年４月 25 日(火)～９月３日(日)
会場　弥生の丘展示館
来館者数　8,094 人
概要　史跡古津八幡山遺跡では、史跡をより適切に保存・活用していくため、平成 29 年度から史跡外における遺跡のさらなる状況把握を目的とした発掘調査を行っている。

令和４年度は、令和３年度に見つかった方形周溝墓（SZ743）の形や規模の確定、３基の埋葬施設（埋葬部１～３）の規模・構造の確認、方形周溝墓（SZ743）周辺の遺構の分布状況の把握を主な目的として発掘調査を実施した。

調査の結果、方形周溝墓（SZ743）の内部で埋葬施設がさらに１基見つかり、合計４基の埋葬施設をもつことが確認された。また、そのうちの中心的な埋葬施設については「木槨」構造であることが推定された。さらに、周辺において方形周溝墓１基や竪穴建物２棟などが新たに見つかり、調査地周辺が墓域としても利用されていたことが判明した。

企画展では、複数埋葬施設をもつ方形周溝墓をはじめ、令和４年度に実施した発掘調査の成果を中心に速報展示を行った。

展示解説　令和５年７月 30 日（日）14:00～
市文化財センター職員
参加者数　16 人

企画展１ポスター

企画展２　「古津八幡山遺跡の石器と鉄器」

開催期間　令和５年９月 12 日（火）～
令和６年３月 24 日（日）
会　　場　弥生の丘展示館
来館者数　10,170 人
概　　要　弥生時代は日本列島において鉄の利用が始まる時代で、古津八幡山遺跡の主要な時期である弥生時代の後半（約 2000 年前）以降、新潟県内でも鉄製品が確認できるようになる。

古津八幡山遺跡でも鉄剣や鉄鏃、ヤリガンナな

どの鉄器が出土しており、当時の日本海側における鉄器分布の北限域となっている。一方、鉄器の流入によって、集落における石器の種類や量、利用方法などに変化が生じたことが推測されている。企画展では、古津八幡山遺跡においてこれまでの発掘調査で出土した石器や鉄器などを展示し、それらの変化や動向などについて探った。

鉄器に加え、砥石の情報や石器組成の変化、データなどから、古津八幡山遺跡では弥生時代後期・終末期を通じてある程度の量の鉄器を保有していた状況を推察することができた。また、鉄器と石器とを併用していた実態についても確認することができた。

新潟県は日本海から内陸への物資の流通経路にあたるとともに、朝鮮半島南部や北部九州など遠隔地との関連を示唆する鉄器の出土が目立つ地域との指摘もあり、その系譜や流入の実態・背景など、石器の分析と併せて今後の研究が注目される。

企画展２ポスター

展示解説　令和５年 12 月３日（日）14:00～
市文化財センター職員

参加者数　15 人

（２）企画展関連講演会

企画展２の会期中、関連講演会を１回開催した。関連講演会は、これまでに古津八幡山遺跡の石器、鉄器についても分析・研究をされている森貴教氏（新潟大学准教授）からご講演頂いた。

企画展２関連講演会（第１回）

演題　**石器・鉄器から探る新潟の弥生文化**

演者　森　貴教（新潟大学准教授）

日時　令和５年 11 月 26 日（日）13:30～15:30

会場　市文化財センター研修室

人数　46 人（会場 25 人・オンライン配信 21 人）

（３）企画展関連講演会アンケート結果

講演会では会場参加者にアンケート調査を実施しており、20 人の方からご回答頂いた（図１・表１）。なお、講演会は会場のほかにオンライン配信も行ったが、オンライン配信の聴講者にはアンケート調査を実施していない。そのため、オンライン配信聴講者については本結果に含まれていない。

以下ではアンケート結果について、おもな項目やご意見について概観する。

年齢　講演会参加者の年齢構成は、これまでと同様に 70 代が最も多く、次いで 60 代、50 代と続く。若年層の参加は依然として少ない傾向にある。

住まい　新型コロナウイルスの感染症法上の位置づけが５類へ移行されたこともあり、市外・県外からの参加者が一定数いた。なお、オンライン配信では市外・県外の聴講者数は約４割であった。

交通手段　交通手段はこれまで同様、圧倒的に自家用車が多い。

情報入手先　ポスター・チラシが最も多く、まいぶんナビ、インターネット、市報、市のホームページと続いた。

講演会について　講演会については概ね好評であ

った。当日配布資料については、図や写真がカラーで多く掲載されており、現物をイメージし易く良かったとのご意見があった一方、文字が細かく見づらいとのご指摘もあった。今回、当日配布資料はＡ４判の大きさで印刷したが、Ａ３判の大きさの方が良かったと思った。

以下、頂戴したおもなご意見などを箇条書きで提示し、今後の検討・改善などに活かしたい。

【アンケートでの主なご意見】

・大変勉強になった。

・他地域に由来をもつ土器や石器・鉄器が古津八幡山遺跡（新潟）に来ていることは分かりましたが、こちらからは、何が出たのでしょうか。物々交換を前提とすると古津八幡山遺跡（新潟）の何と交易したと考えられるのか、見解をうかがいたかった。

・鉄器の伝来について興味深く聴講させて頂いた。

・製鉄（古代）についても知りたいと思った。

・当日資料がカラーで、文字も見やすい画質でよかった。

・当日資料がＡ４判で、字が細かすぎて読みづらかった。内容的には良いと思う。

・当日資料に写真や図などが多く掲載されており、カラー版だったので、現物をイメージし易く良かった。

・目が悪いので、スクリーンの図や文字はもう少し大きい方が良いと思った。

・時期にもよるが発掘調査の実習を希望する。

・古代北陸道に関する企画を希望する。

・今回の会場（市文化財センター）や弥生の丘展示館などでの講演会も良いが、時々は、新潟市の中心部、中央区内での実施も希望する。

令和５年度　史跡古津八幡山 弥生の丘展示館

企画展関連講演会　アンケート

お越しの皆様へ

本日は史跡古津八幡山弥生の丘展示館 企画展関連講演会「石器・鉄器から探る新潟の弥生文化」にお越しいただき、誠にありがとうございます。

弥生の丘展示館の活動について、今後の参考とさせていただくために皆様のご意見をお聞かせ下さい。ご協力をお願いします。　★講演会開催日：令和５年11月26日（日）　新潟市文化財センター研修室

1　あなたのこと（お客様のプロフィール）を教えてください。

次のそれぞれの質問で、あてはまる項目を１つだけ選び、○で囲んでください。

①年齢は	20歳未満　20代　30代　40代　50代　60代　70代　80代以上
②性別は	男性　女性
③職業は	小学生　中学生　高校生　大学生（短大・専門学生含む）　会社員　公務員　自営業 教職員　主婦　無職　その他
④お住まいは	北区　東区　中央区　江南区　秋葉区　南区　西区　西蒲区 市外（　　市・町・村）　県外（　　都・道・府・県　　市・町・村）
⑤こちらへの主な交通手段は	自家用車　自転車・バイク　徒歩　タクシー　路線バス・区バス ＪＲ　その他（　　）
⑥弥生の丘展示館へ行かれたことはありますか	ない　1回　2~5回　6~9回　10回以上
⑦弥生の丘展示館で開催中の企画展「古津八幡山遺跡の石器と鉄器」はご覧になりましたか	はい　いいえ ※いいえの方に質問です。これからご覧になる予定はありますか。 ある　ない
⑧今回の講演会情報の入手先 ※複数回答可	ポスター・チラシ　市報　その他広報誌　テレビ・ラジオ 新聞　雑誌・情報誌　インターネット　市ホームページ　まいぶんナビ 人から聞いて　弥生の丘展示館を利用して その他（　　）

※質問は表・裏の両面にあります。　【ウラ面に続きます】

2　講演会について

次のそれぞれの質問で、あてはまるものを１つだけ選び、○で囲んでください。

※答えられない質問は、記入する必要はありません。

①講演会：時期	大変満足	満足	普通	不満	大変不満
②講演会：場所	大変満足	満足	普通	不満	大変不満
③講演会：内容のわかりやすさ	大変満足	満足	普通	不満	大変不満
④施設全般：映像、照明、空調、バリアフリー	大変満足	満足	普通	不満	大変不満
⑤職員の対応：言葉づかい、マナー、対応、説明	大変満足	満足	普通	不満	大変不満
⑥印刷物：わかりやすさ	大変満足	満足	普通	不満	大変不満
⑦全体の満足度	大変満足	満足	普通	不満	大変不満

⑧右記の施設のうち今までに利用したことのある施設 ※複数回答可	弥生の丘展示館　古津八幡山遺跡歴史の広場　新津フラワーランド 県立植物園　県埋蔵文化財センター　石油の世界館（石油遺産関係） 中野邸記念館　里山ビジターセンター その他（　　）

※講演会についての感想などご自由にお書きください。

※ご希望のイベントや講演などございましたらお書きください。

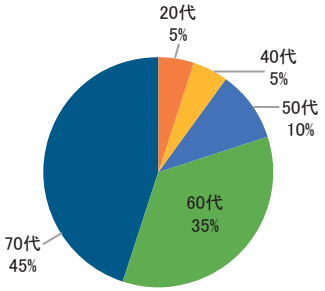
※弥生の丘展示館へのご意見・ご要望などございましたらお書きください。

ご協力ありがとうございました。

アンケート用紙（表・裏）

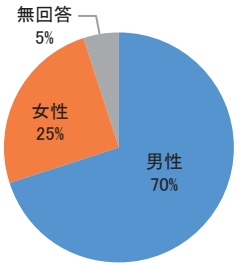
1.年齢

20歳未満	0
20代	1
30代	0
40代	1
50代	2
60代	7
70代	9
80代以上	0
無回答	0
計	20



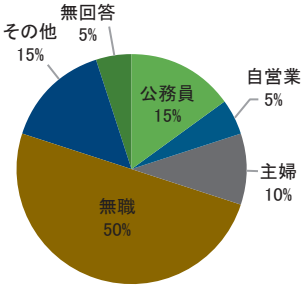
2.性別

男	14
女	5
無回答	1
計	20



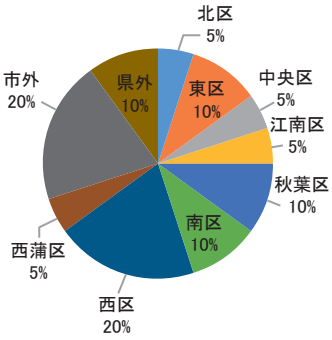
3.職業

小学生	0
中学生	0
高校生	0
大学生	0
会社員	0
公務員	3
自営業	1
教職員	0
主婦	2
無職	10
その他	3
無回答	1
計	20



4.住まい

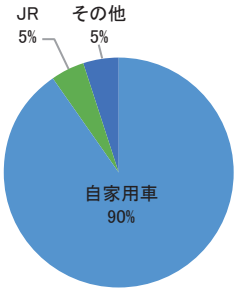
北区	1
東区	2
中央区	1
江南区	1
秋葉区	2
南区	2
西区	4
西蒲区	1
市外	4
県外	2
無回答	0
計	20



5.交通手段

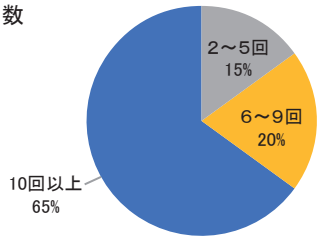
自家用車	19
自転車・バイク	0
徒歩	0
タクシー	0
バス	0
JR	1
その他	1
無回答	0
計	21

※複数回答あり



6.弥生の丘展示館来館回数

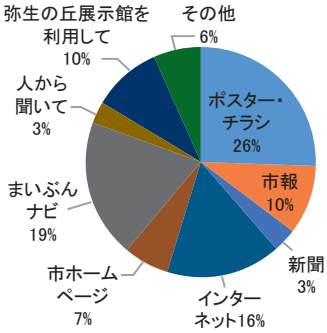
ない	0
1回	0
2～5回	3
6～9回	4
10回以上	13
無回答	0
計	20



7.講演会情報入手先

ポスター・チラシ	8
市報	3
その他広報誌	0
テレビ・ラジオ	0
新聞	1
雑誌・情報誌	0
インターネット	5
市ホームページ	2
まいぶんナビ	6
人から聞いて	1
弥生の丘展示館を利用して	3
その他	2
計	31

※複数回答あり



8.弥生の丘展示館周辺施設の利用

弥生の丘展示館	19
古津八幡山遺跡歴史の広場	20
フラワーランド	13
県立植物園	15
県埋蔵文化財センター	19
石油の世界館	13
中野邸記念館	12
ビジターセンター	8
その他	3
無回答	1
計	123

※複数回答あり

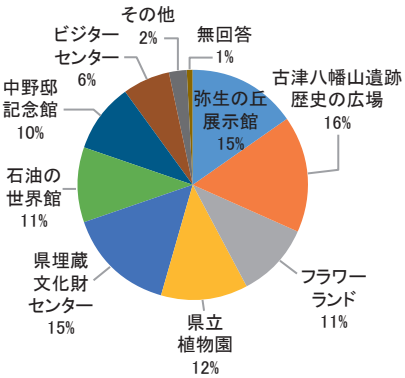


図１　　アンケート主要結果

表１　アンケート結果一覧

	項目		第1回	備考
プロフィール	年 齢	20歳未満	0	
		20代	1	
		30代	0	
		40代	1	
		50代	2	
		60代	7	
		70代	9	
		80代以上	0	
		計	20	
	性 別	男	14	
		女	5	
		無回答	1	
		計	20	
	職 業	小学生	0	
		中学生	0	
		高校生	0	
		大学生	0	
		会社員	0	
		公務員	3	
		自営業	1	
		教職員	0	
		主婦	2	
		無職	10	
		その他	3	会社役員
		無回答	1	
		計	20	
	住まい	北区	1	
		東区	2	
		中央区	1	
		江南区	1	
		秋葉区	2	
		南区	2	
		西区	4	
		西蒲区	1	
		市外	4	長岡・加茂
		県外	2	東 京 都
		計	20	
	交通手段（複数回答あり）	自家用車	19	
		自転車・バイク	0	
		徒歩	0	
		タクシー	0	
		路線バス・区バス	0	
		JR	1	
		その他	1	レンタカー
		計	21	
	講演会情報入手先（複数回答あり）	ポスター・チラシ	8	
		市報	3	
		その他広報誌	0	
		テレビ・ラジオ	0	
		新聞	1	
		雑誌・情報誌	0	
		インターネット	5	
		市ホームページ	2	
		まいぶんナビ	6	
		人から聞いて	1	
		弥生の丘展示館を利用して	3	
		そ の 他	2	
		計	31	

	項目		第1回	備考
講演会・講演会場（新潟市文化財センター）などについて	時期（無回答あり）	大変満足	3	
		満足	12	
		普通	4	
		不満	0	
		大変不満	0	
		無回答	1	
		計	20	
	場所（無回答あり）	大変満足	3	
		満足	12	
		普通	3	
		不満	1	
		大変不満	0	
		無回答	1	
		計	20	
	内容のわかりやすさ（無回答あり）	大変満足	4	
		満足	10	
		普通	3	
		不満	0	
		大変不満	0	
		無回答	3	
		計	20	
	施設全体：映像、照明、空調、バリアフリー（無回答あり）	大変満足	2	
		満足	13	
		普通	2	
		不満	0	
		大変不満	0	
		無回答	3	
		計	20	
	職員の対応：言葉遣い、マナー対応、説明（無回答あり）	大変満足	6	
		満足	11	
		普通	1	
		不満	0	
		大変不満	0	
		無回答	2	
		計	20	
	印刷物のわかりやすさ（無回答あり）	大変満足	3	
		満足	9	
		普通	3	
		不満	2	
		大変不満	0	
		無回答	3	
		計	20	
	全体の満足度（無回答あり）	大変満足	2	
		満足	14	
		普通	2	
		不満	0	
		大変不満	0	
		無回答	2	
		計	20	

	項目		第1回	備考
企画展会場（弥生の丘展示館）などについて	来館回数	ない	0	
		1回	0	
		2～5回	3	
		6～9回	4	
		10回以上	13	
		計	20	
	開催中の企画展を見た（無回答あり）	はい	14	
		いいえ	6	
		計	20	
	開催中の企画展を見る予定（無回答あり）	ある	4	
		ない	1	
		無回答	1	
		計	6	
	弥生の丘展示館周辺施設の利用（無回答・複数回答あり）	弥生の丘展示館	19	
		古津八幡山遺跡　歴史の広場	20	
		フラワーランド	13	
		県立植物園	15	
		県埋蔵文化財センター	19	
		石油の世界館	13	
		中野邸記念館	12	
		ビジターセンター	8	
		その他	3	さつき山・秋葉湖・新津鉄道資料館
		無回答	1	
		計	123	

表２　新潟市古津八幡山遺跡歴史の広場年表

年度・所長	年月	新潟市古津八幡山遺跡歴史の広場関係の主な出来事
2012（平成24）年度 （所長　高橋保：県より派遣）	2012年4月	史跡古津八幡山弥生の丘展示館開館
		新潟市古津八幡山遺跡歴史の広場暫定公開
2013（平成25）年度 （所長　中野俊一）		
2014（平成26）年度 （所長　中野俊一）		
2015（平成27）年度 （所長　中野俊一）	2015年4月	企画展1『古津八幡山古墳の築造と復元整備』開催（4/7～6/28）
		新潟市古津八幡山遺跡歴史の広場全面公開
		特別企画展1『史跡古津八幡山遺跡の発掘調査と復元整備の歴史』開催〔会場：新潟市新津美術館市民ギャラリー 〕（4/21～5/6）
	2015年7月	企画展2『蒲原の王墓　古津八幡山古墳と豪族の屋敷』開催（7/7～10/4）
	2015年9月	特別企画展2『絵で見るむかしの日本ー早川和子原画展ー』開催〔会場：新潟市新津美術館市民ギャラリー〕（9/15～9/27）
	2015年10月	企画展3『邪馬台国の時代1　北陸と会津を結んだ古津八幡山ー東北南部（会津）の世界ー』開催（10/6～12/27）
	2016年1月	企画展4『邪馬台国の時代2　縄文のある弥生土器ー新潟県北部（阿賀北）の世界ー』開催（1/5～3/27）
2016（平成28）年度 （所長　松田賢一）	2016年4月	企画展1『舟戸遺跡を解明する』開催（4/12～7/3）
	2016年7月	企画展2『邪馬台国の時代3　古津八幡山の頃の信濃川右岸の世界』開催（7/12～9/25）
	2016年10月	企画展3『遺跡、古環境から見た古津八幡山古墳の時代』開催（10/4～12/18）
	2017年1月	企画展4『邪馬台国の時代4　古津八幡山の頃の信濃川左岸の世界ー六地山遺跡里帰り展ー』開催（1/4～3/26）
2017（平成29）年度 （所長　外山孝幸）	2017年4月	企画展1『古津八幡山遺跡の保存・活用』開催（4/4～6/25）
		第1回古津八幡山遺跡フォトコンテスト入賞作品展開催（4/29～6/4）
	2017年7月	企画展2『鐵（てつ）ー北陸における鉄生産ー』開催（7/4～9/24）
	2017年10月	企画展3『古墳時代のお祭りー石に籠めた祈りー』開催（10/3～12/17）
	2018年1月	企画展4『邪馬台国の時代5ー柏崎・上越・頸城の世界ー』開催（1/4～3/25）
2018（平成30）年度 （所長　渡邊朋和）	2018年4月	企画展1『古代の祭祀』開催（4/24～7/29）
		第2回古津八幡山遺跡フォトコンテスト展開催（4/24～6/3）
	2018年8月	企画展2『豪族居館ー王の暮らす屋敷ー』開催（8/7～12/2）
	2018年12月	企画展3『邪馬台国の時代6　鐵ー弥生・古墳時代の鉄器ー』開催（12/11～4/14）
2019（平成31・令和元）年度 （所長　渡邊朋和）	2019年4月	企画展1『古津八幡山遺跡発掘調査速報展』開催（4/23～6/2）
		第3回古津八幡山遺跡フォトコンテスト展開催（4/23～6/2）
	2019年6月	企画展2『弥生時代から古墳時代の大形建物ー古津八幡山遺跡の大形竪穴住居と掘立柱建物を考えるー』開催（6/11～10/27）
	2019年11月	企画展3『邪馬台国の時代7　弥生時代後期の北越と北陸・長野との交流ー天王山式土器から考えるー』開催（11/6～3/29）
2020（令和２）年度 （所長　渡邊朋和）	2020年4月	企画展1『古津八幡山遺跡発掘調査速報展2ー令和元年度の発掘調査成果ー』開催（4/14～9/6）
	2020年9月	企画展2『天王山式土器からみた東日本の弥生社会ー古津八幡山遺跡成立期の動向ー（第1会場）』開催（9/15～12/20）
	2021年1月	企画展3『大沢谷内遺跡展ーアスファルトを利用した縄文時代から中世の遺跡ー』開催（1/5～3/28）
2021（令和３）年度 （所長　板垣正人）	2021年4月	企画展1『古津八幡山遺跡発掘調査速報展ー令和2年度の発掘調査成果ー』開催（4/27～9/5）
	2021年9月	企画展2『倭国大乱～律令国家成立までの越後平野』開催（9/14～12/12）
	2022年1月	企画展3『新津丘陵の縄文遺跡ー文様と形のうつり変わりー』開催（1/5～3/27）
2022（令和４）年度 （所長　佐藤俊宏）	2022年4月	企画展1『古津八幡山遺跡発掘調査速報展ー令和３年度の発掘調査成果の速報ー』開催（4/22～9/4）
	2022年9月	企画展2『古津八幡山遺跡の過去・現在・未来』開催（9/13～3/12）
2023（令和５）年度 （所長　村山明）	2023年4月	企画展1『古津八幡山遺跡発掘調査速報展ー令和４年度の発掘調査成果についてー』開催（4/25～9/3）
	2023年9月	企画展2『古津八幡山遺跡の石器と鉄器』開催（9/12～3/24）

第３章　古津八幡山遺跡復元竪穴住居の災害復旧工事

（１）令和４年度実施の「新潟市古津八幡山遺跡歴史の広場」復元竪穴住居災害復旧工事について

「新潟市古津八幡山遺跡歴史の広場」の史跡公園では、平成20・21年度に竪穴住居を７棟（１～７号棟）復元整備しており、「弥生時代を彷彿とさせるような景観」との方針で整備された史跡公園の中心をなす工作物となっている（図１）。

復元竪穴住居は、燻蒸作業をしていない棟については入口を日中開放しており、建物内部についても見学ができる。また、小・中学校の校外学習を中心とする団体利用時には、遺跡への理解が深まるよう建物内部の見学や解説等で利用している。

令和３年１月の大雪と強風によって、史跡公園にある復元竪穴住居４棟（１・３～５号棟）が毀損したため、「古津八幡山遺跡保存活用計画等推進委員会」や県、文化庁などとその後の対応や復旧方針・方法などについて検討、調整を図り、令和４年度に災害復旧工事を実施・完了した。なお、積雪深

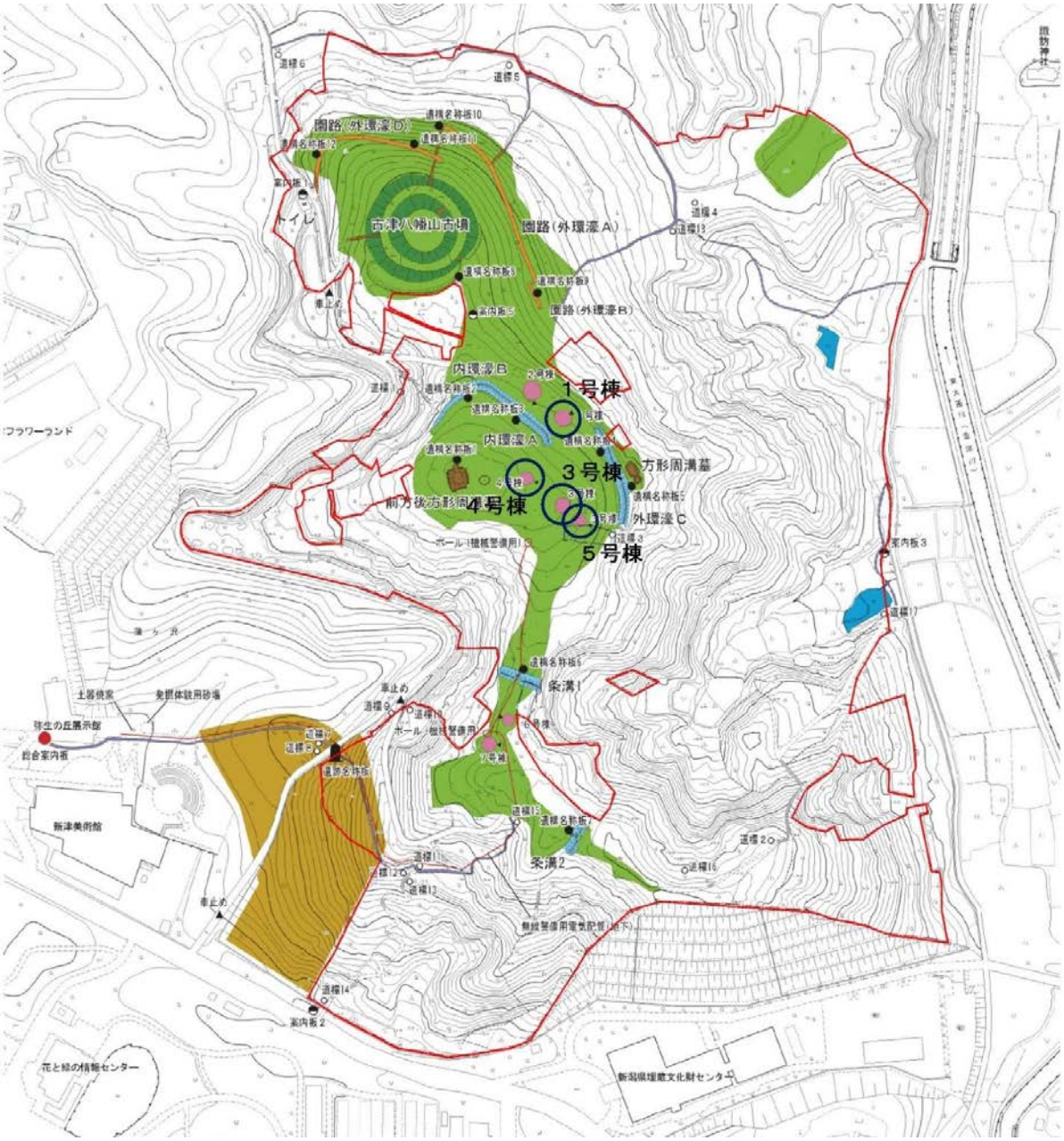


図１　災害復旧工事を行った復元竪穴住居（１・３・４・５号棟）位置図

や風速の観測データの値が国の災害復旧要件に該当していたため、復旧工事は災害復旧事業として事業費の７割を国の補助金を利用して実施した（表１・２）。

以下では復元竪穴住居の災害復旧工事の概要について記載する。なお、復元竪穴住居の毀損や、その後の復旧工事実施までの経過、復旧工事の内容などの詳細については、『新潟市文化財センター年報』第 11 号〔市文化財センター2024〕を参照されたい。

表１　日別積雪深（2020 年 12 月～2021 年２月）及び風速（2021 年１月）

※背景色は積雪深 100 cm・10 分間平均風速 15m/s 以上

積雪深（一般財団法人日本気象協会　観測地点：秋葉）	2020（令和２）年12月	2021（令和３）年１月			2021（令和３）年２月
	積雪深（cm）	積雪深（cm）	10分間平均風速（m/s　最大）一般財団法人日本気象協会（観測地点：秋葉）	10分間平均風速（m/s　最大）気象庁新潟地方気象台（観測地点：新津）	積雪深（cm）
1　日		13	7.0	6.0	41
2　日		41	5.6	5.2	37
3　日		58	4.6	4.0	49
4　日		54	4.6	4.3	47
5　日		38	7.2	6.9	44
6　日		30	6.8	6.8	39
7　日		28	20.5	18.2	34
8　日		73	8.7	8.1	30
9　日		94	4.3	4.0	30
10　日		112	4.9	4.2	29
11　日		116	7.7	7.7	24
12　日		103	8.6	7.5	19
13　日		81	6.9	6.8	16
14　日	3	61	6.0	6.0	12
15　日	11	54	5.7	4.1	5
16　日	8	51	5.8	5.8	
17　日	4	57	4.5	3.8	11
18　日		78	7.5	6.8	11
19　日		78	9.9	9.6	6
20　日		72	6.6	6.2	1
21　日		68	4.4	2.9	
22　日		65	5.3	4.5	
23　日		61	6.4	6.4	
24　日		59	10.4	10.0	
25　日		52	2.4	2.4	
26　日		49	10.7	10.5	
27　日		45	6.7	5.9	
28　日		41	10.1	10.0	
29　日		43	11.8	9.4	
30　日	1	47	11.0	11.0	
31　日	6	44	8.4	7.9	

※補足
・新潟市秋葉区において、2021年１月８日午前８時～１月11日午前８時までの72時間降雪量は観測史上最多。

表２　災害復旧事業内容と支出・収入内訳

支出	災害復旧工事委託費	31,350,000円
	文化庁指導旅費・需用費	74,000円
	事業費合計	31,424,000円
収入	国 補 助	21,996,000円
	起　　債	8,400,000円
	一般財源	1,028,000円
	合　　計	31,424,000円

小学校の校外学習のようす

歴史の広場のようす（令和３年１月８日）

３号棟（令和３年１月 14 日）

４号棟（令和３年２月 19 日）

（２）復元竪穴住居災害復旧工事の内容

復元竪穴住居の復旧方針や内容・工法については、建築の専門家から現地を見て貰い、毀損要因を把握したうえで、「古津八幡山遺跡保存活用計画等推進委員会」や県、文化庁などと検討し、決定した。

復旧方針としては、引き続き発掘調査成果に則しながらも、これまで以上の強度・耐久性をもたせる復旧を行うとともに、これまで通り近代的な工法が分からないような、また不自然な外観にならないような復旧を行うこととした。

工事内容については、今後、同規模の大雪や強風でも耐え得るよう、土間の床下および側柱のある周堤部分も含めて、地下をコンクリートのベタ基礎構造に変更することによって、毀損の要因となった柱脚部に加わる横方向の引抜力に全体の重量で耐え得ることが出来る設計とした。また、側柱については経年劣化や毀損が激しかったため、全て新規材に取り換えることとした（図２）。

工法については、傾斜した柱や上屋を正常な状態に戻し、上屋をジャッキアップして復旧工事を行った。基礎工事に伴う掘削は、原則、遺構面から20 ㎝以上の保護層を確保することとし、掘削時は市の埋蔵文化財専門職員が立会い、確認した。

（３）復元竪穴住居災害復旧工事の経過

復旧工事は、新潟市公共建築第１課（以下、公共建築）設計のもと災害復旧工事の「要求水準及び仕様書」を作成し、令和４年６月に指名競争入札を行った。入札の結果、新潟住宅開発㈱が落札した。なお、同社は平成20年に今回毀損した４棟の復元竪穴住居を建築した業者である。現地工事は令和４年７月から開始し、12 月に市文化財センターおよび公共建築の担当職員が現地検査を行い合格と

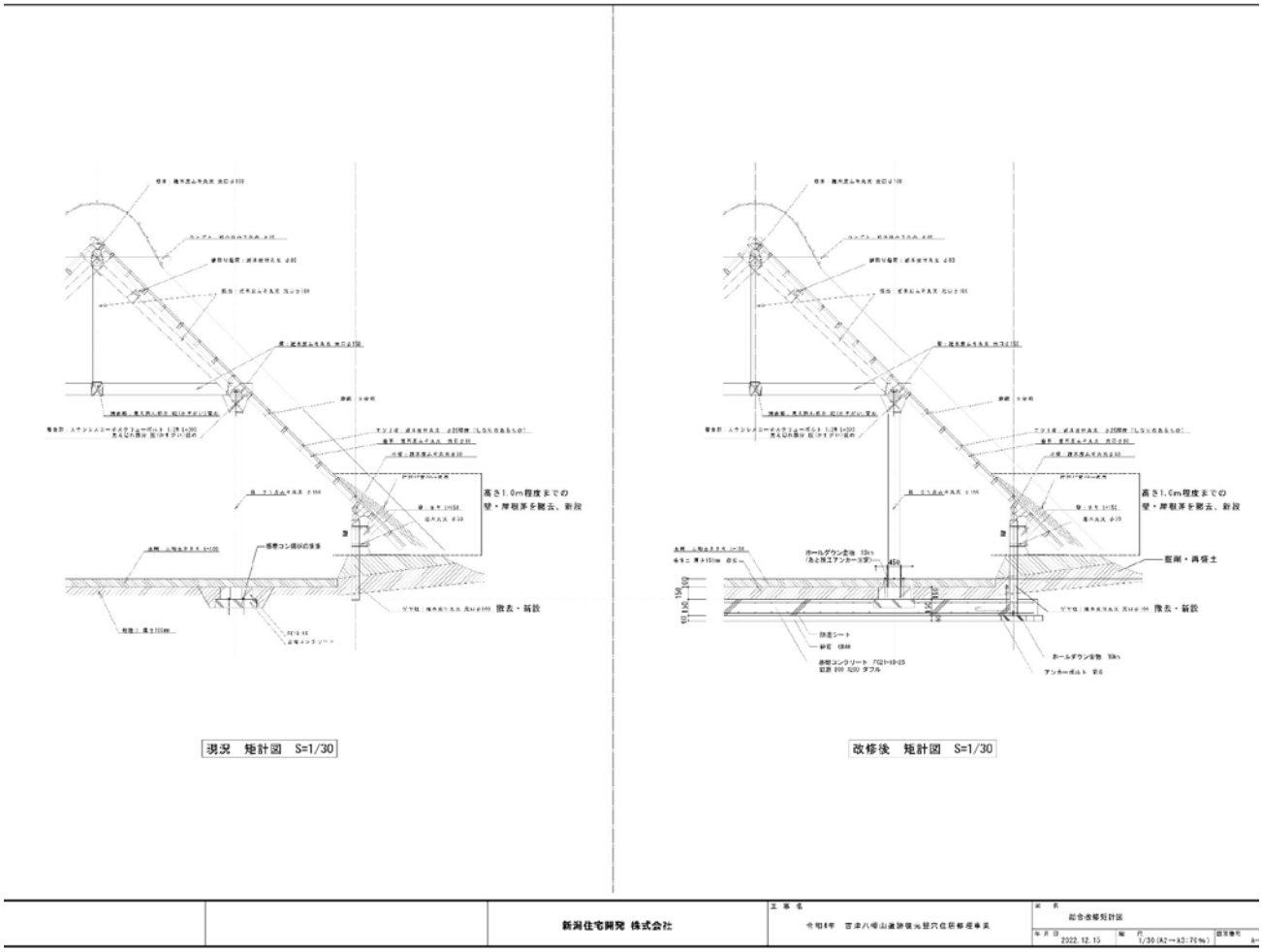


図２　標準矩形図

した。ただし、工事用通路部分や一部竪穴住居周辺において芝生の剥がれや生育不良の箇所が見られたため、雪解け後でかつ芝の生育期に入る令和５年４月に、新潟住宅開発㈱が芝張りなど芝の修繕を行うこととした。

なお、工事中に一般向けの現地見学会を開催したほか、令和５年６月に「花と遺跡のふるさと公園」にある周辺施設との連携イベント「花と遺跡のふるさとフェスタ」において、災害復旧工事完了後のお披露目も兼ねて「遺跡ガイドツアー」のイベントを実施し、市民向けに復元竪穴住居を含む古津八幡山遺跡の見学・解説会を行った。

着手前（１号棟）

屋根ジャッキアップ、茅葺下部撤去、土間・周堤掘削、
鉄筋設置、ゲヤ柱交換・防腐処理など（１号棟）

土間・周堤下コンクリートのベタ基礎新設（１号棟）

土間・周堤の復旧（１号棟）

茅葺の復旧（１号棟）

着手後（１号棟）

着手前（3号棟）

着手後（3号棟）

着手前（4号棟）

着手後（4号棟）

着手前（5号棟）

着手後（5号棟）

芝生修繕作業風景（令和5年4月）

芝生修繕後風景（令和5年4月）

付　録

令和５年度企画展１・２パンフレット

企画展の開催にあたって

古津八幡山遺跡は、昭和 62（1987）年に磐越自動車道の土取り工事に伴う試掘調査により発見された遺跡で、昨年で発見から 35 周年を迎えました。これまで 25 次にわたる発掘調査を行っており、県内最大の古墳（約 1600 年前）や弥生時代後期・終末期（約 1750 年～2000 年前）の大規模な高地性環濠集落などが確認されています。

古津八幡山遺跡遠景（平成 26 年）

重要な遺跡であることから、平成２（1990）年には遺跡の主要な範囲が保存されることとなり、平成 17（2005）年には国の史跡に指定されました。その後、弥生時代の集落や古墳などの復元整備、さらにはガイダンス施設である「史跡古津八幡山 弥生の丘展示館」の開館など、主要な整備が終わった平成 27（2015）年から「古津八幡山遺跡歴史の広場」として全面供用を行っています。

古津八幡山遺跡全面公開開場式
（平成 27 年４月 17 日）

また、平成 29（2017）年からは史跡をより適切に保存・活用していくため、遺跡北東域の史跡指定地外において発掘調査を実施しており、そこでも重要な発見が続いています。本企画展では、昨年の発掘調査の成果を中心に速報展示します。

令和４年の調査成果の概要

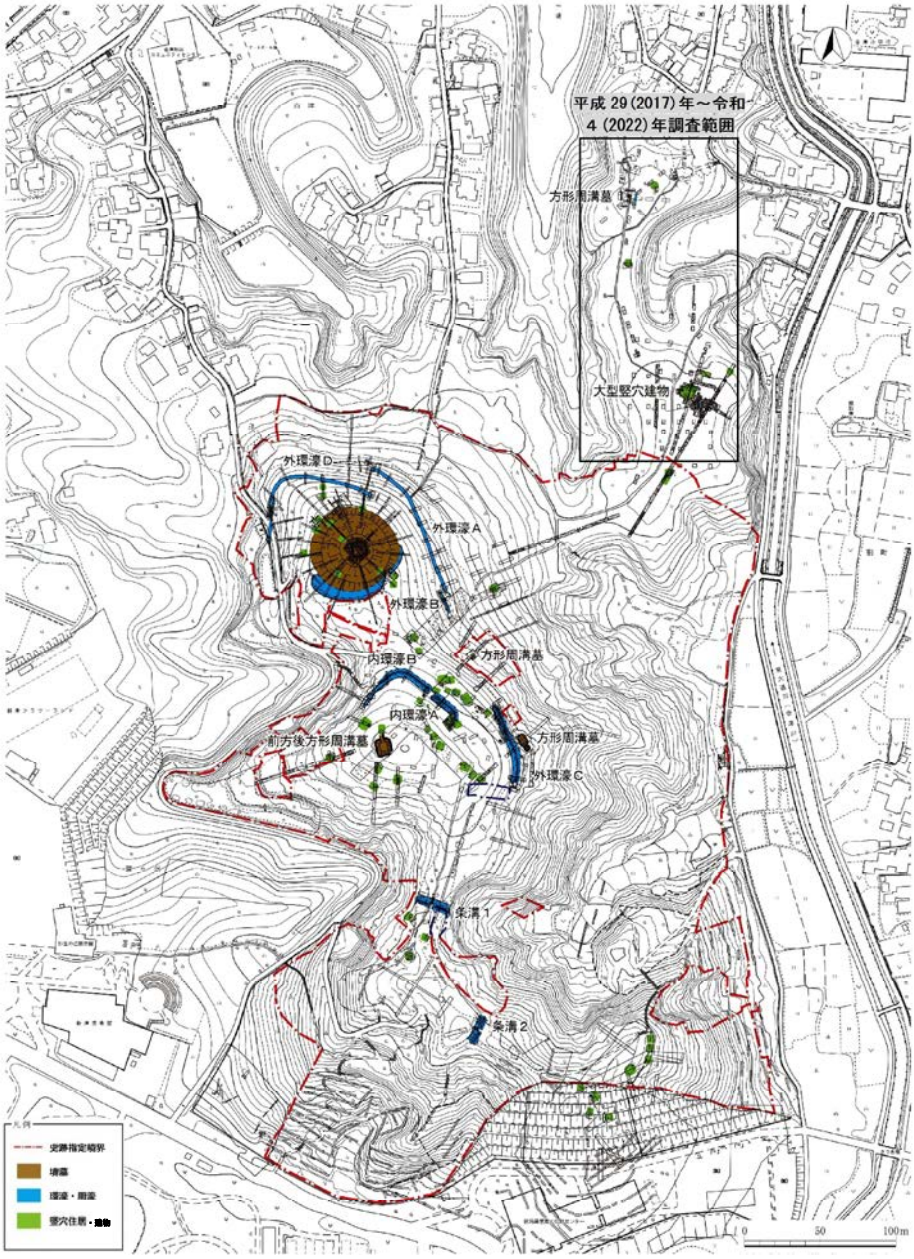
平成 29（2017）年から実施している調査地は、遺跡北東部の標高約 25mの丘陵中腹域に位置し、平坦面や緩い斜面域からなる南北方向にのびる尾根筋にあたります。かつて縄文時代の遺跡として「埋葬地遺跡」と呼ばれていた範囲と一部重複します。これまでに、古津八幡山遺跡で最大となる大型の竪穴建物（SI１）や方形周溝墓（SZ743）が発見されるなど、多くの重要な成果がありました。

令和４（2022）年の調査は、①令和３（2021）年の調査で確認された３つの埋葬施設を持つ方形周溝墓（SZ743）の形態・規模の確定、②方形周溝墓（SZ743）の各埋葬施設の規模や構造の把握、③周辺における遺構の有無の確認、を目的に調査を行いました。

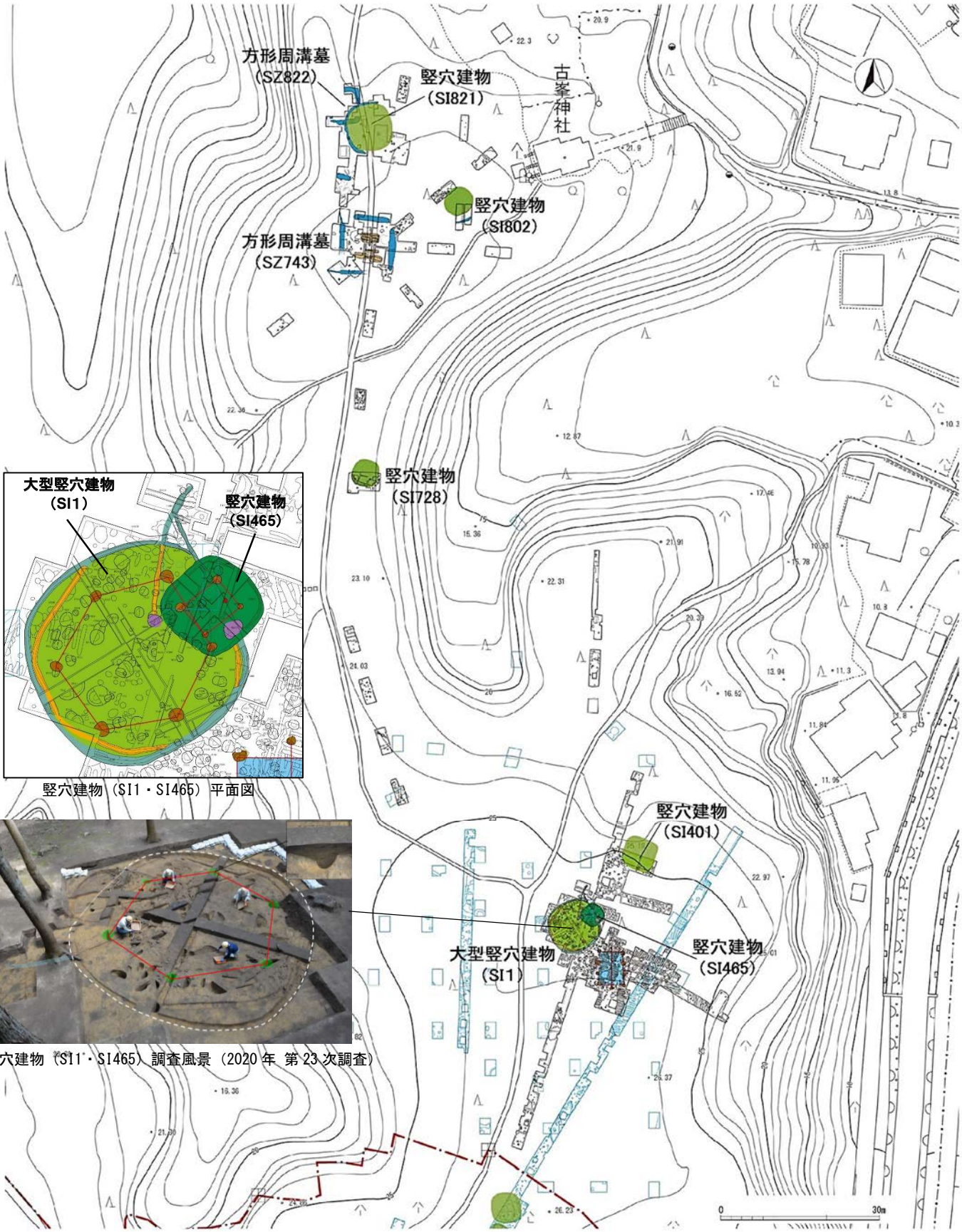
調査の結果、方形周溝墓（SZ743）の内部から新たに１つの埋葬施設が確認され、合計４つの埋葬施設を持つ墓であることが分かりました。

さらに、４つのうち最も大きい埋葬施設は、「木槨」という空間の中に木棺を置く西日本的な特徴を持った構造であることも分かりました。

また、周辺において、竪穴建物２棟（SI802・821）や方形周溝墓（SZ822）が新たに見つかりました。



古津八幡山遺跡遺構平面図および平成 29 年～令和４年調査範囲



竪穴建物（SI1・SI465）平面図

竪穴建物（SI1・SI465）調査風景（2020 年 第 23 次調査）

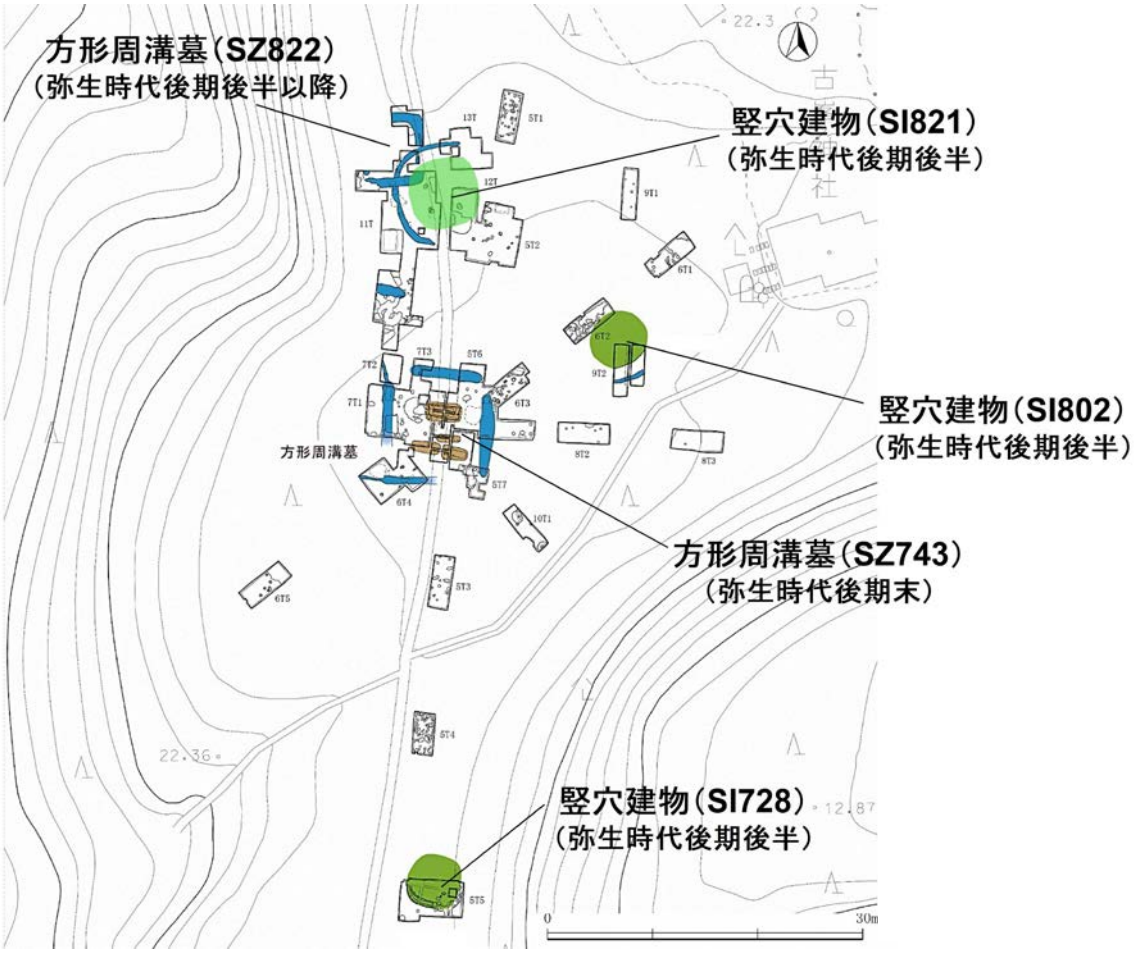
平成 29 年～令和４年調査地平面図

令和３・４年調査で見つかった竪穴建物

令和３（2021）・４（2022）年は、大型竪穴建物（SI1）から尾根筋に北西へ約 100～150ｍの範囲において発掘調査を行いました。その結果、方形周溝墓２基（SZ743・822）、竪穴建物３棟（SI728・802・821）などが確認されました。３棟の竪穴建物は、出土土器からいずれも弥生時代後期後半（新潟シンポ編年２期）の建物と推測されます。この時期は環濠が機能している時期で、これまでに確認されている竪穴建物の分布や数から、集落の中心は環濠に囲まれた丘陵頂上部にあったと考えられます。

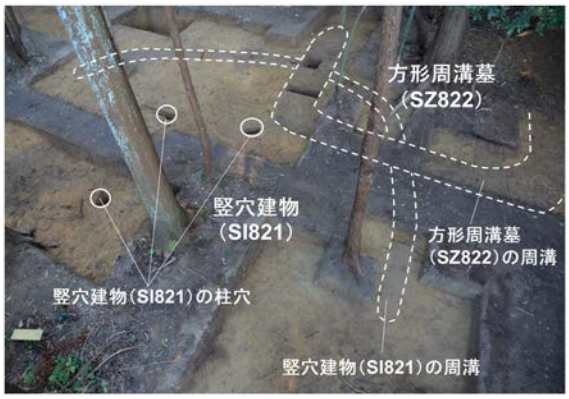
令和３・４年の調査で見つかった３棟の竪穴建物の発見によって、弥生時代後期後半に丘陵中腹域でも竪穴建物が点在していたことが分かりました。丘陵頂上部と中腹域とで空間利用のしかた、竪穴建物の性格にどのような違いがあったのかは今後の課題と言えます。

その後、弥生時代後期末（同３期）以降、尾根の北側は墓域としての利用へと変化します。他方、尾根の南側では引き続き建物がつくられ、弥生時代終末期（同４期）には、尾根の南側で大型竪穴建物（SI１）がつくられるなど、丘陵頂上部に代わって中腹域の利用が活発になります。



令和３・４年調査地平面図

竪穴建物（SI802　西から）



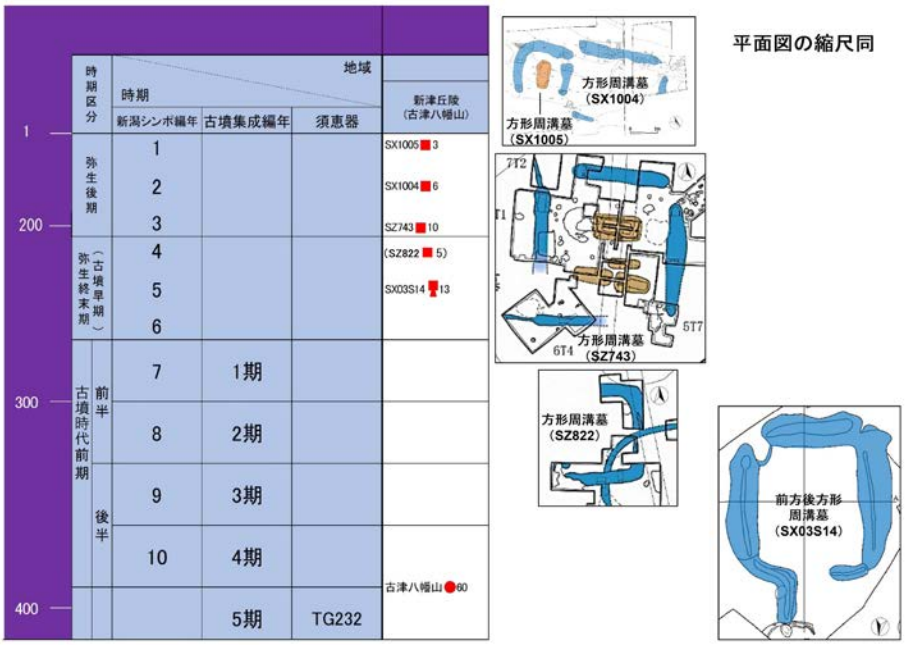
竪穴建物・方形周溝墓（SI821・SZ822　北東から）

古津八幡山遺跡における弥生時代のお墓

古津八幡山遺跡では、丘陵頂上部の調査で方形周溝墓３基（SX1005（方形周溝墓１）・SX1004（方形周溝墓２）・SX1303（方形周溝墓３））と、前方後方形周溝墓１基（SX03S14）、土器棺墓１基（SX1006）が見つかっています。さらに、令和３・４年度の丘陵中腹域の調査で、新たに方形周溝墓２基（SZ743・822）が見つかり、丘陵中腹域も墓域として利用されていたことが明らかになりました。

方形周溝墓の年代については、出土土器などから SX1005 が後期前半（新潟シンポ編年１期）、SX1004 が後期後半（同２期）、SZ743 が後期末（同３期）頃、前方後方形周溝墓（SX03S14）が終末期以降（４期以降）と推定しており、時期が新しくなるにつれてお墓の規模が大きくなっていくと推測されます。

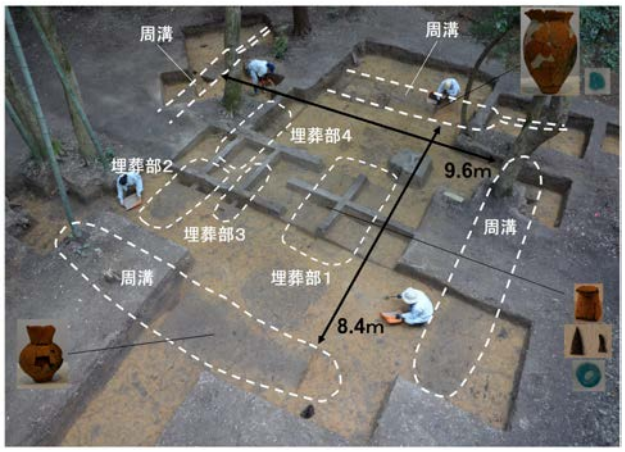
なお、比較的墳丘の規模が小さく、墓壙や木棺サイズもそれほど大きくない方形周溝墓 SX1005 において、当時の希少品である鹿角装鉄剣が副葬されていたことは、方形周溝墓に埋葬された人物が集落の上位有力者であったことを物語っています。



古津八幡山遺跡の弥生時代後期～終末期の墳墓

令和３・４年調査で見つかった方形周溝墓

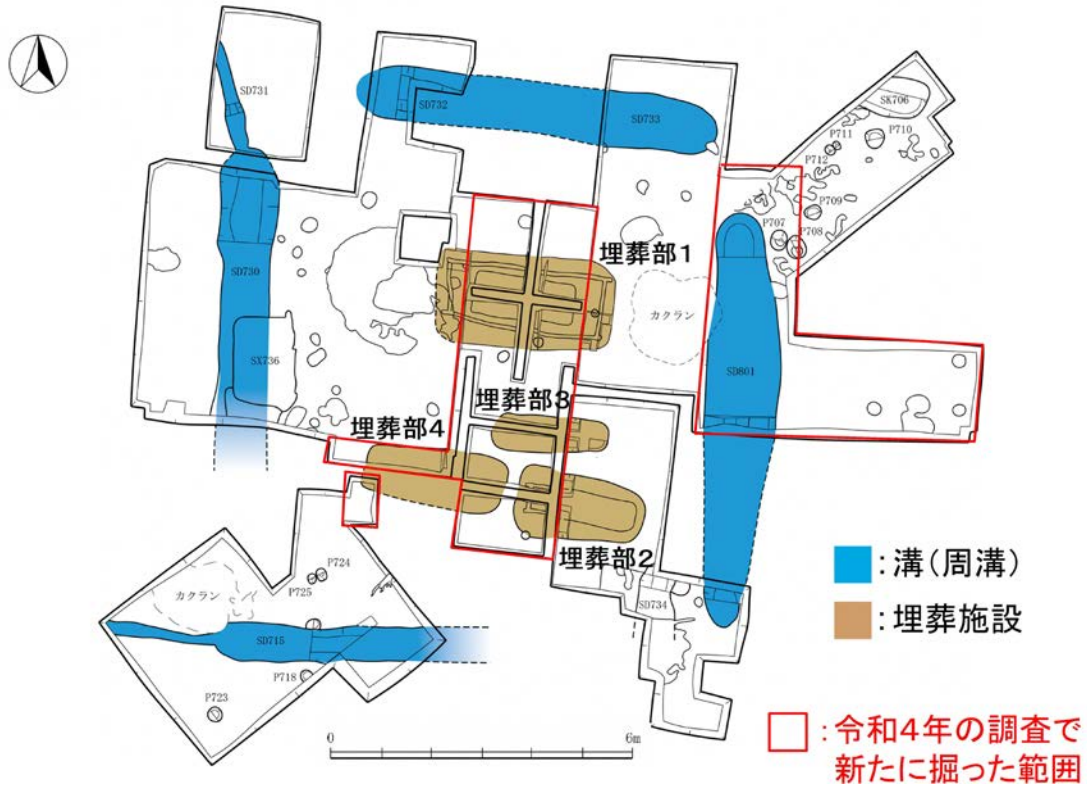
方形周溝墓（SZ743）は、令和４（2022）年の調査で東辺の周溝が確認され、形や大きさが確定しました。周溝の四隅が途切れる形態で、周溝の内側で計測すると、長軸（南北）9.6m、短軸（東西）8.4mを測り、古津八幡山遺跡の中で最大の方形周溝墓となります。



方形周溝墓（SZ743）調査風景（北東から）

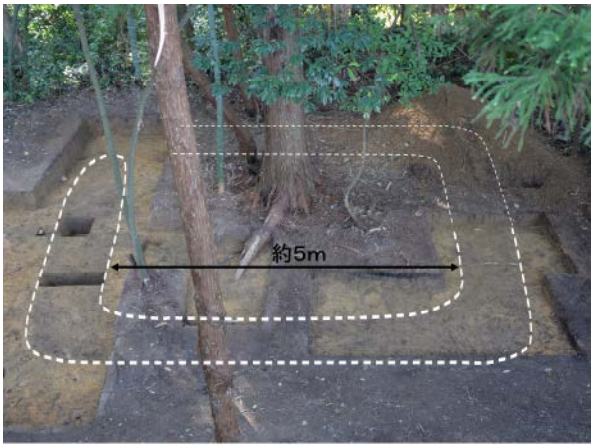
また、今年度の調査で埋葬部４が新たに見つかり、合計４基の埋葬施設をもつことが判明しました。さらに、埋葬部１は「木槨」構造の埋葬施設と考えられ、規模や構造から最も上位で中心的な埋葬施設であったと判断されます。

出土遺物は、周溝から壺、甕、破損したガラス玉１点などが、また、埋葬部１から高杯や完形のガラス玉１点、石鏃２点などが出土しました。弥生時代後期末（新潟シンポ編年３期）頃のお墓と推定しています。

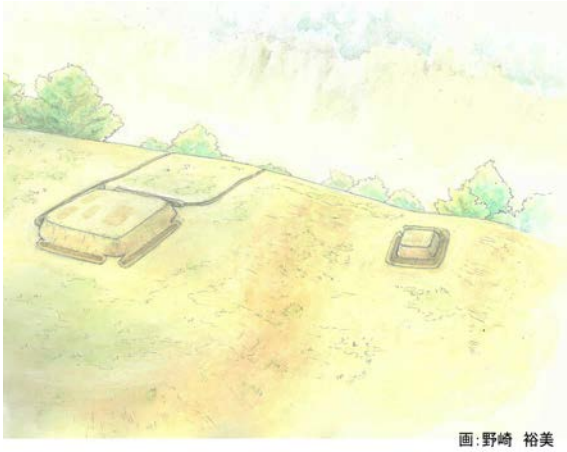


方形周溝墓（SZ743）平面図

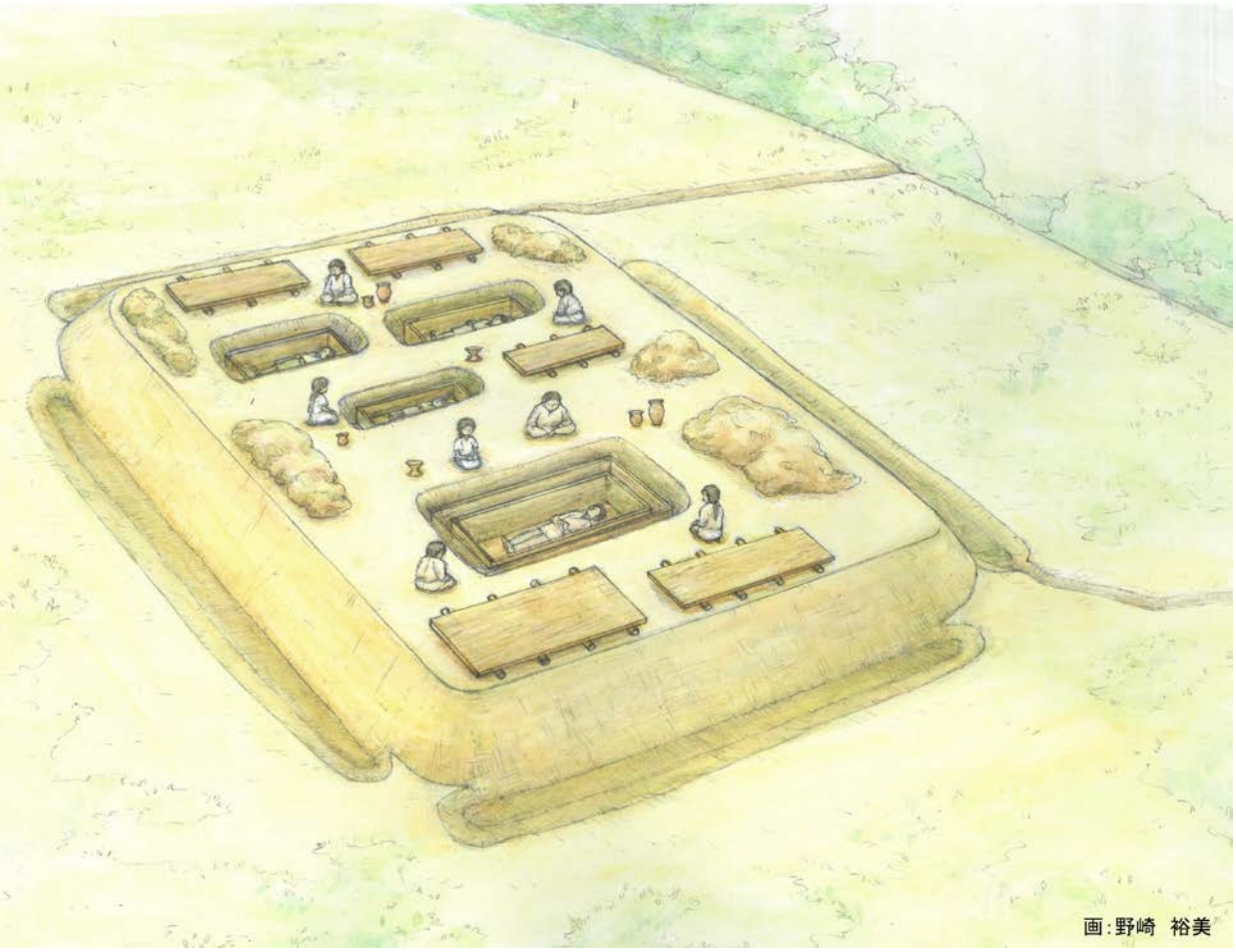
ほかにも、方形周溝墓（SZ743）から尾根筋に北西約 20ｍの場所で方形周溝墓（SZ822）が新たに発見されました。周溝の内側で南北約５ｍの規模となります。周溝は、南東隅と北東隅のコーナーは途切れない形態です。竪穴建物（SI821）の周溝を壊していることから、少なくとも弥生時代後期後半（同２期）以降のお墓といえます。



方形周溝墓（SZ822　東から）



方形周溝墓（SZ743・SZ822）推定復元イメージ画



方形周溝墓（SZ743）推定復元イメージ画

方形周溝墓（SZ743）埋葬部１の推定復元模型

方形周溝墓（SZ743）の埋葬部１について、縮尺 1/2 で推定復元した模型を制作し、展示しています。発掘調査の所見から、木槨は外寸で長軸約 3.0m・短軸約 1.2m、木棺は外寸で長軸約 1.9m・短軸約 0.8mとし、その 1/2 サイズで制作しました。

方形周溝墓（SZ743）埋葬部１の推定復元模型

ただし、木槨・木棺とも高さは後世の削平により不明のため、木棺は現在の棺を参考に高さ約 40 ㎝としました。木槨は棺の高さよりも高くなるため、約 60 ㎝として制作しました。

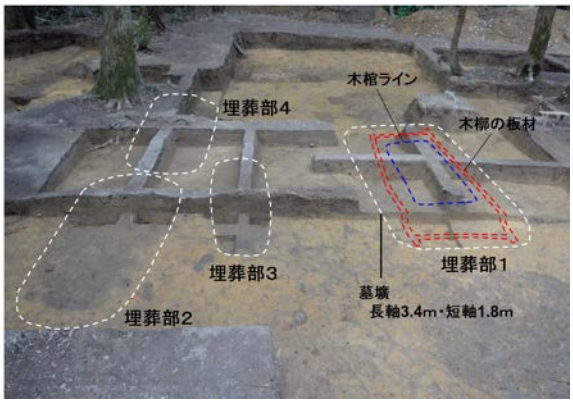
なお、埋葬部１のつくり方は以下①～④のような工程・工法と推定しています。

①棺を入れるための穴（墓壙）を掘ります。平面は長方形状で、広めに掘ります。

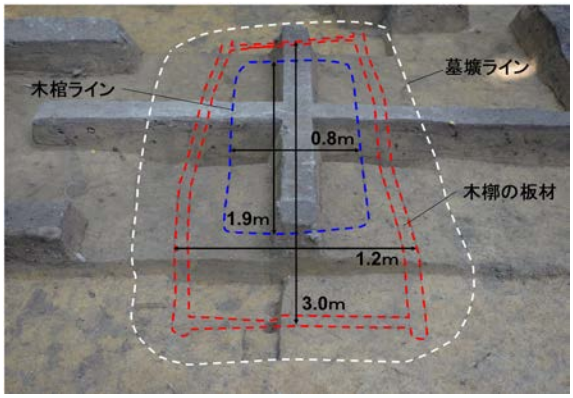
②墓壙内に板で長方形の空間（木槨）をつくります。長側板に小口板を挟みこむ構造で、墓壙と木槨との間には裏込土を入れて木槨を固定します。底板は用いず、木槨内下部に土を平坦に敷いて整地し、棺を置くための床（棺床）をつくります。

③木槨内部に木棺を入れます。木棺も底板を用いなかったと考えられ、現地で組み立てたものと推測されます。

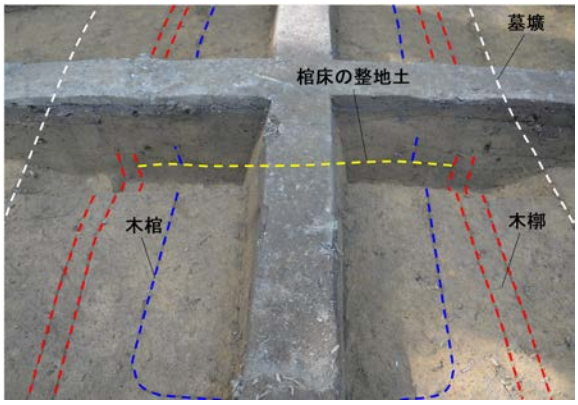
④木棺、木槨に蓋をし、土で覆って墳丘を完成させます。



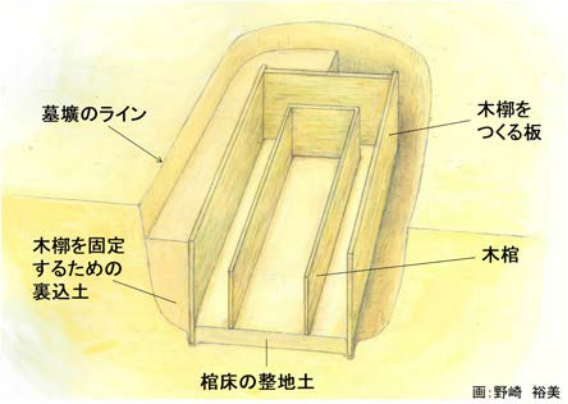
方形周溝墓（SZ743）埋葬部１～４全景（東から）



方形周溝墓（SZ743）埋葬部１全景（東から）



方形周溝墓（SZ743）埋葬部１の断面（東から）



方形周溝墓（SZ743）埋葬部１の推定復元イメージ画

おわりに

令和４年の調査により、遺跡北東部の丘陵中腹域に位置する尾根の北側が、弥生時代後期末以降、墓域として利用された実態が明らかになりました。方形周溝墓（SZ743）は、県内初となる弥生時代の複数埋葬事例で、中心埋葬施設に木槨構造を採用するなど、東日本では特異なお墓といえ、西日本の墓制の影響を強く受けていると考えられます。

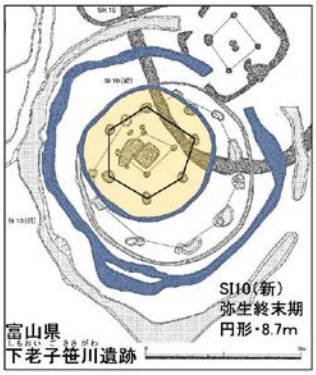
なお、南東約 150mに位置する弥生時代終末期の大型竪穴建物（SI１）も、６本柱の主柱構造や排水溝の存在など、西の拠点集落との関係が推測されています。

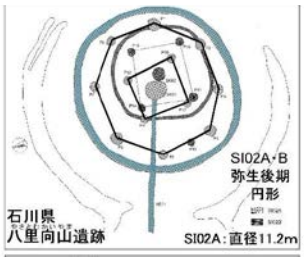
弥生時代から古墳時代における古津八幡山遺跡の動向

※赤字は平成29年～令和4年の調査で見つかった遺構

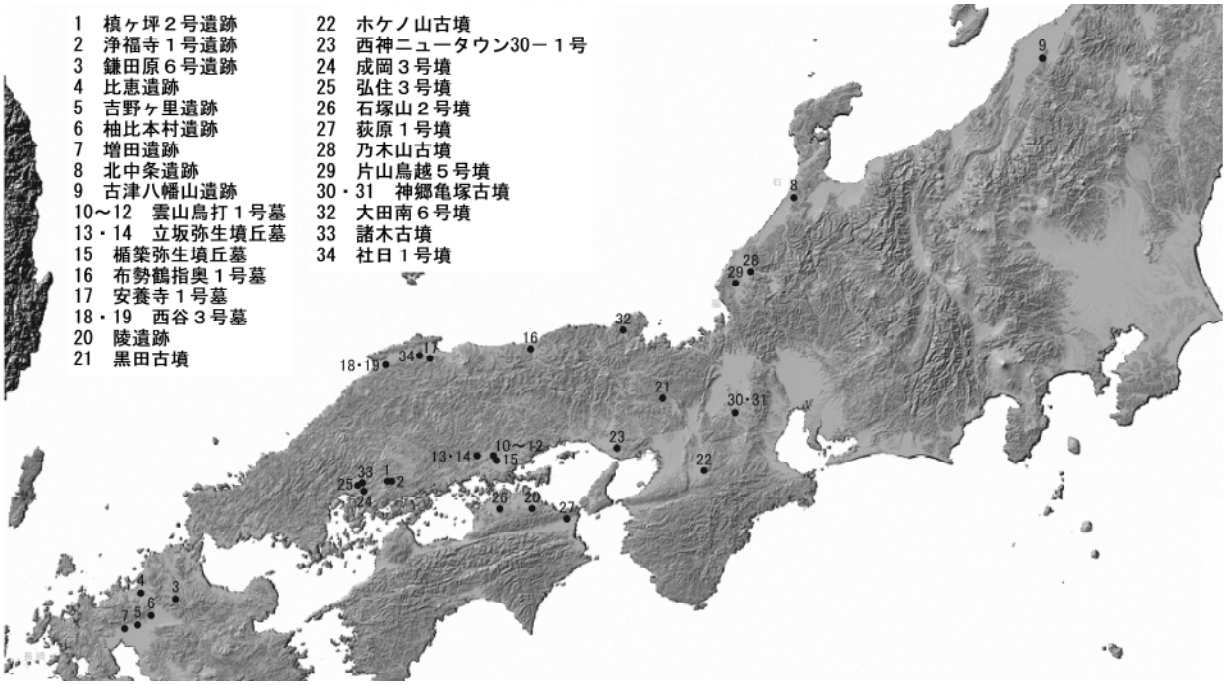
時代	北陸南西部編年		古墳集成編年	新潟シンポジウム編年	古津八幡山遺跡			
					環濠	竪穴建物	掘立柱建物	墓
弥生時代中期	小松 専光寺 戸水B				―	―	―	―
弥生時代後期 後期前半	1群 V－1群	猫橋式		1期	集落の出現			方形周溝墓
	1群 V－2群				外環濠の掘削	SI802・SI821 SI0603 SI03S03 SI03S05 SI0602 SI728 SI03S06 SI03N03 大型竪穴建物（SI1） SI465	掘立柱建物群？	SX1005 SX1006 SX1004 SZ743 （大型方形周溝墓） SZ822？
	1群 V－3群							
後期後半	2群 2－1群	法仏式		2期				
	2群 2－2群							
後期末	3群	月影式		3期	環濠の一部埋没 ⇒一部環濠の再掘削？ 内環濠掘削？			
弥生時代終末期～古墳時代早期	4群	白江式		4期				
	5群			5期	高地性集落の廃絶、平地での集落の出現			前方後方形周溝墓？
	6群			6期				
古墳時代前期	7群	古府クルビ式	1期	7期				
	8群	高畠式	2期	8期				
	9群		3期	9期				
	10群		4期	10期				

↓古津八幡山古墳（古墳中期）





北陸の主な大型竪穴建物



木槨構造の墓の分布（番号は 10 頁一覧表と対応）

国内の主な木槨墓

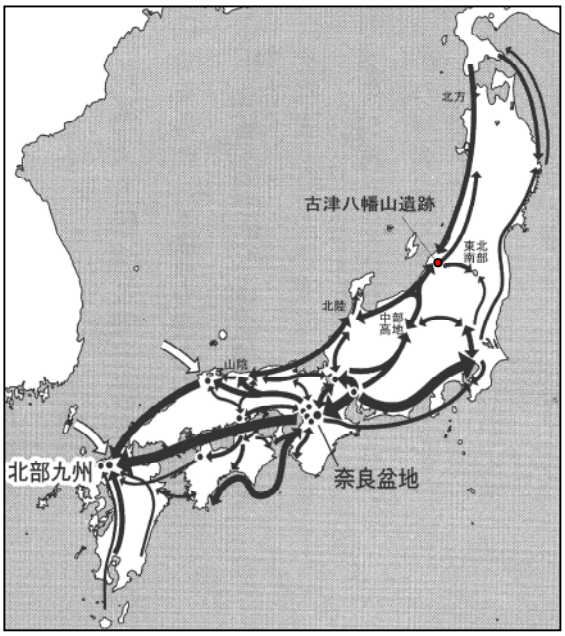
（岡林孝作2018『古墳時代棺槨構造と系譜』同成社、
小羽山墳墓群研究会2010『小羽山墳墓群の研究』福井市立郷土歴史博物館をもとに作成・一部追加）

類型		長幅比	四側板を立てた後の槨底面の整備	槨の裏込め
A		3.0～4.0前後	なし	あり
B		1.5～2.5前後	平らに整える	あり
C	1	1.5～2.5前後	中央が舟底状にくぼんだ棺床を整える	あり
	2			なし

	遺跡・遺構	所在地	時期	類型	墳形	規模（m）	墓壙			木槨					木棺		
							長さ	幅	深さ	棺床	長さ	幅	高さ	長幅比	形式	棺長	幅
1	槙ヶ坪２号遺跡SK１	広島県東広島町	弥生中期後葉	A	円	6.5	2.5	0.8	0.45-0.5	棺壙・配石	2.15	0.55	0.15-0.2	3.9	（刳抜式）	2.1	0.4±
2	浄福寺１号遺跡SK５	広島県東広島町	弥生中期後葉？	A	（木槨墓）		2	0.7-0.75	0.15+	棺壙	2	0.55		3.6	（刳抜式）	2	
3	鍵田原６号木槨墓	福岡県嘉麻市	弥生中期前半～中葉	A	隅丸長方	25×23	6.45	4.25		棺壙・粘土敷	3.59	0.88		4.1	箱形	2.2+	0.46
4	比恵遺跡SX03	福岡県福岡市	弥生中期前葉	A	（土坑墓）		4.1	1.8		棺壙	3.4+	1.1		3.1	（刳抜式）	2.7	0.5-0.6
5	吉野ヶ里遺跡SP0912	佐賀県吉野ヶ里町	弥生中期中葉	A	（木棺墓）		2.8	1.3		棺壙	2	0.7		2.9	（刳抜式）	1.9	0.5
6	柚比本村遺跡SP1100	佐賀県鳥栖市	弥生中期初頭	A	（木棺墓）		7.35+	3.7+		棺壙	2.65	0.7-0.8		3.5	（刳抜式）	2	0.6
7	増田遺跡SP6407	佐賀県佐賀市	弥生前期末～中期前半	A	（木棺墓）		2.45	0.95	0.55	棺壙	2.1	0.75		2.8	（刳抜式）	1.9	0.45
8	北中条遺跡木槨墓	石川県津幡町	弥生後期末	(B)	（木槨墓）		3.86	2.92	0.45	×	3.2	1.58		2	（組合式）		
9	古津八幡山遺跡方形周溝墓（SZ743）埋葬部１	新潟県新潟市	弥生後期後葉～末	B	方	9.6×8.4	(3.4)	1.75		×	3	1.2		2.5	組合式	(1.92)	(0.8)
10	雲山鳥打１号墓（第３主体）	岡山県岡山市	弥生後期後葉	B	長方	約20×15	4	2.5	0.9	置き土	2.7	1.4		1.9	組合式	1.9	0.55
11	雲山鳥打１号墓（第２主体）		弥生後期後葉	B			4.3	2.5	1.3	?	3	0.95		3.2	組合式	1.6	0.45
12	雲山鳥打１号墓（第１主体）		弥生後期後葉	B			4.1	3.8	0.6+	?	2.5	1.3	0.6	1.9	組合式		
13	立坂弥生墳丘墓（第２主体）	岡山県総社市	弥生後期後葉	B	楕円	約18				板石敷	2+	1			組合式	1.7+	
14	立坂弥生墳丘墓（第３主体）		弥生後期後葉	B						小礫敷	2.7	0.9		3	組合式		
15	楯築弥生墳丘墓（中心主体）	岡山県倉敷市	弥生後期後葉	B	双方中円	約80	9	6.25-5.5	2.1	底板	3.6	1.3-1.6	0.88+	2.3	組合式	2.2	0.8-0.9
16	布勢鶴指奥１号墓（第１主体部）	鳥取県鳥取市	弥生後期中葉	B	長方	17.8×10.6	4.8	3.4	1.4	×	2.96	1.18	1	2.5	組合式	2	0.4-0.56
17	安養寺１号墓（第１主体）	島根県安来市	弥生後期末	(B)	四隅突出	20×16	5	3.3	1.2-1.3	×	3	1.3-1.6		2.1	組合式	2.25	0.4-0.7
18	西谷３号墓（第１主体）	島根県出雲市	弥生後期後葉	B	四隅突出	50×40（突出部含む）	6.1	4.8-4.4	1	置き土	2.6	1.2-1.25	0.7-0.8	2.1	組合式	2.1	0.8-0.85
19	西谷３号墓（第４主体主棺）		弥生後期後葉	(B)			6	4.5		×	2.6	1.25	0.8	2.1	組合式	2.3	0.8
20	陵遺跡ST－02（第１墓壙）	香川県さぬき市	弥生後期中葉	B?	円	11	—	—	—	×	2.83+	1.55		-2	?		
21	黒田古墳（第１主体部）	京都府南丹市	古墳前期初葉	C1	前方後円	52	10	6.5	2.5	礫床	6.5	2.5/2.7	1.5	2.5	舟形	4	0.7-1.2
22	ホケノ山古墳（中心埋葬施設）	奈良県桜井市	古墳前期初葉	C2	前方後円	80	10	6		礫床	6.5	2.6	(約1)	2.5	舟形	5.3	1.3
23	西神ニュータウン30－１号	兵庫県神戸市	古墳中期	C	円	16	2.7+	1.9		礫床	2+	1.4-1.6			刳抜式	1.3+	0.4
24	成岡３号墳（第１主体）	広島県広島市	古墳前期初葉	C1	円	13.5×11.5	3.85	1.9	0.94	置き土	2.6	1	0.4	2.6	舟形	2.6-	1-
25	弘住３号墳	広島県広島市	古墳前期初葉	C2	双方中円	25の円丘に5以上の突出部	4.5	3	1.3	礫床	2.7	1.2	1.2	2.3	舟形	-2	0.8
26	石塚山２号墳（第１主体部）	香川県丸亀市	古墳前期初葉	C2	円	約25	3.65	2.55	1.25	×	3.65	2.55	1.25	1.4	?	2.1	0.8
27	萩原１号墳	徳島県鳴門市	古墳前期初葉	C2	前方後円	26.5	—	—	—	礫床	5.5	3		1.8	舟形	4	1.3
28	乃木山古墳（第１埋葬施設）	福井県永平寺町	古墳前期初葉	(A´)	長方	30×24	7.2	4.5	1.1	×	4.7	1.4-1.6	1	2.9	組合式	3	0.7
29	片山鳥越５号墳（第１埋葬）	福井県清水町	古墳前期初葉	(A´)	長方	16.5×14.5	3.6	2.2	0.9	×	3	1.2		2.5	組合式	2	0.5
30	神郷亀塚古墳（第１主体）	滋賀県東近江市	古墳前期初葉？	(A´)	前方後方	36.5	—	—	—	粘土床？	4.7	1.3	1.3	3.6	舟形	(2-2.5)	0.5
31	神郷亀塚古墳（第２主体）		古墳前期初葉？	(A´)			?	1.25		（棺壙）	3.5	1.1	1.1	3.2	舟形	2	0.5
32	大田南６号墳	京都府京丹後市	古墳前期後葉	A´	円	28.5	9.6	6.5	2.5	×	6.2	1.18-1.37	0.5-0.6	4.5	箱形	5.4	0.8-1.14
33	諸木古墳	広島県広島市	５世紀後半	A´	円	11	2.62		0.6-0.7	棺壙・配石	2.3	0.9		2.6	組合式	2	0.5
34	社日１号墳（第１主体部）	島根県松江市	古墳前期初葉	(A´)	方	19.5×15	5	1.6-2	1.1	×	3.5	0.7-0.85	0.8+	4.5	刳抜式	3	0.6

以上、古津八幡山遺跡では弥生時代後期末（新潟シンポ編年３期）以降、西方の有力者層との関係が強まったと推測されるとともに、その交流が首長間のネットワークを介してピンポイントで行われた状況が示唆されます。弥生時代から古墳時代への移行期にあたる３世紀前半は、激動の時代を表すかのように列島各地で人やモノの動きが活発化する時期ですが、古津八幡山遺跡の動向もその流れを反映したものと考えられます。

最後に、平成 29（2017）年から実施してきた確認調査ですが、令和４（2022）年をもちまして一旦終了となります。調査にあたりご理解・ご協力を頂いた地権者・関係者の皆様にお礼申し上げます。



３世紀前半の人の動き

（松木武彦 2007『列島創世期』小学館から・一部改変）

企画展の開催にあたって

弥生時代は日本列島において鉄の利用が始まり、そして次第に普及していく時代です。今から約 2200 年前ごろ（弥生時代前期末から中期初頭）に大陸から鉄器が入ってきます。そして今から約 2100 年前ごろ（弥生時代中期後葉）になると、日本国内でも鍛冶技術、鉄器の製作技術が確認できるようになります。しかし、国内に広く鉄製品が普及していくのは古津八幡山遺跡の主要な時期である弥生時代後期（約 2000 年前）以降のことで、県内の遺跡からも鉄製品が出土するようになります。

古津八幡山遺跡でも、鉄剣や鉄鏃、ヤリガンナなどの鉄器が出土しており、当時の日本海側における鉄器分布の北限域となっています。一方、鉄器の流入によって、集落における石器の種類や量、利用方法などに変化の生じたことが推測されています。

本企画展では、古津八幡山遺跡において昭和 62 年から令和４年までの 25 回の発掘調査で出土した石器や鉄器などを展示し、それらの変化や動向などについて探ります。

企画展で使用する時代・時期名称について

企画展の中心となるのは、古津八幡山遺跡の弥生時代のムラが営まれた弥生時代後期と終末期で、邪馬台国の女王、卑弥呼が生きた時代と一部重なる時期です。なお、弥生時代終末期については古墳時代早期と呼ぶ場合もあります。

本企画展では、弥生時代を前期、中期、後期、終末期の４時期に区分し、さらに後期については前半、後半、末と３段階に分けています。実年代については諸説ありますが、弥生時代後期のはじまりは紀元後すぐくらい、古墳時代前期のはじまりは西暦 250 年くらいと推測されています。

古津八幡山遺跡の動向と時代・時期名称

※赤字は平成29年～令和4年の調査で見つかった遺構

時代	北陸南西部編年			古墳集成編年	新潟シンポジウム編年	古津八幡山遺跡			
						環濠	竪穴建物	掘立柱建物	墓
弥生時代中期			小松 専光寺 戸水B			―	―	―	―
1 弥生時代後期 後期前半	1群	V－1群 V－2群 V－3群	猫橋式						
					1期	集落の出現			方形周溝墓
100 後期後半	2群	2－1群 2－2群	法仏式		2期	外環濠の掘削	SI03S20 SI0804 SI802・SI821 SI0603 SI03S03 SI0602 SI1307 SI728	掘立柱建物群？	SX1005 SX1006 SX1004
200 後期末		3群	月影式		3期	環濠の一部埋没 ⇒一部環濠の再掘削？ 内環濠掘削？ SD03S16・SD1011	SI03S06 SI03N03 大型竪穴建物（SI1） SI465		SZ743 （大型方形周溝墓） SZ822？
弥生時代末期～古墳時代早期		4群	白江式		4期				
		5群			5期	高地性集落の廃絶、平地での集落の出現			前方後方形周溝墓？
		6群			6期				
古墳時代前期		7群	古府クルビ式	1期	7期				
300		8群		2期	8期				
		9群	高畠式	3期	9期				
		10群		4期	10期				

↓古津八幡山古墳（古墳中期）

石器と鉄器

現在、世界最古の確実な石器は、地上での直立二足歩行生活を行った猿人アウストラロピテクスによる約 260 万年前の石器とされています。

また、人類が使用した最初の鉄器は、地球外から降ってきた隕鉄を加工したもので、古くは紀元前 3000 年頃のものが見つかっています。やがて自然界に存在する鉄鉱石や砂鉄から木炭などで還元して人工の鉄をつくりだすようになります。世界最古の人工鉄についてはさまざまな意見がありますが、紀元前 2000 年頃とされています。

鉄器が大陸から日本列島に伝わるのは、今のところ弥生時代前期末（紀元前 200 年）頃と考えられています。そして、弥生時代後期（紀元直後から西暦 200 年頃）には利器の中心が石器から鉄器へと移り変わっていきます。

ドイツ帝国の首相ビスマルクの演説から生まれた「鉄は国家なり」の標語に象徴されるように、鉄の役割はその後さらに重要になっていきます。現在も、鉄は私たちの生活の隅々で利用され、世界で最も多く生産、消費されている中心的な金属素材であることを考えると、弥生時代の鉄の導入がいかに大きな出来事であったかが分かります。

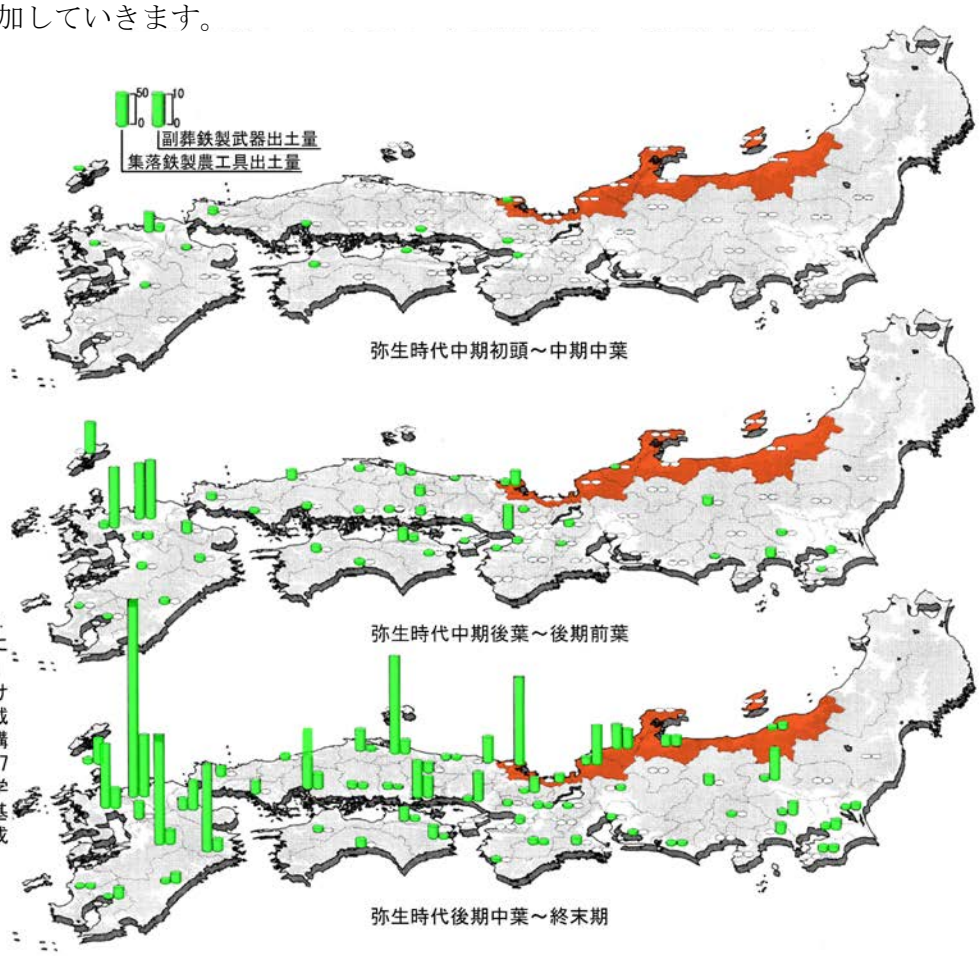
弥生時代における石器・鉄器の概要

弥生時代、日本列島は大きな画期を迎えます。水路などの灌漑施設をもつ水田稲作の伝播によって、コメをはじめとする食糧生産が本格的に始まります。さらに、それまで

の石器に加え、青銅器や鉄器という新たな材質の道具を使用するようになります。

人類が手にした最初の道具である石器は、日本列島において旧石器時代、縄文時代、弥生時代と使われ続けますが、利器としての石器使用の伝統は弥生時代をもって基本的に終わりを迎えます。

地域により導入時期や出土量は異なりますが、弥生時代前期末から中期初頭（約 2200 年前）になると九州などで本格的に鉄器の導入がはじまります。ただし、導入期は中国で製作された鉄斧の破片を、石器で擦り切ったり、砥石で研磨して変形させることで再加工するものが主体でした。鉄器は次第に列島各地へも普及し、新潟県では少なくとも弥生時代後期（約 2000 年前）には鉄器を使用していたことが出土品から分かっています。古墳時代（約 1700 年前）になると鉄器の生産や利用は一段と活発となり、出土量は急激に増加していきます。



野島　永2008「5.弥生・古墳時代における鉄器文化」『弥生時代における初期鉄器の舶載時期とその流通構造の解明』平成17～平成19年度科学研究費補助金　基盤研究（C）研究成果報告書より作成・一部改変

弥生時代における日本列島各地の鉄器出土量

古津八幡山遺跡の概要

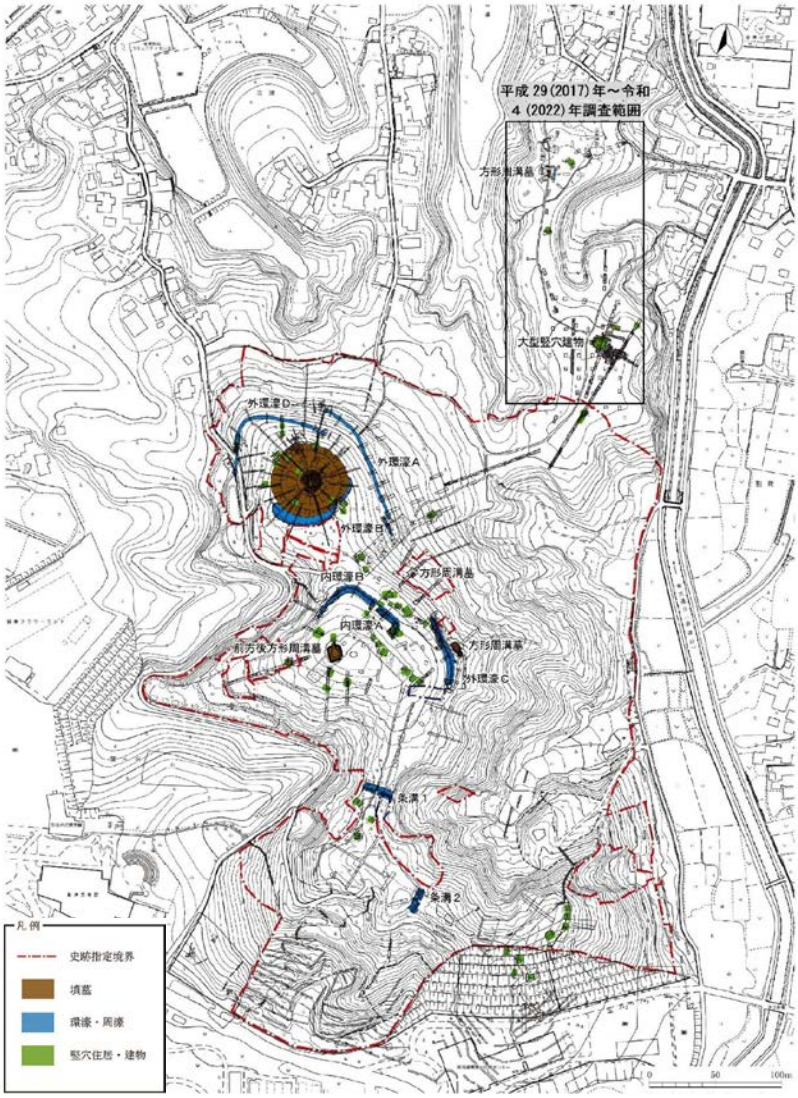
古津八幡山遺跡は、昭和 62（1987）年の磐越自動車道のための土取りに伴う調査（第１次）で発見されました。標高約 50mの丘陵上にある弥生時代後期・終末期（約 2000 年前～1750 年前）を中心とした大規模な高地性環濠集落で、古墳時代中期（約 1600 年

前）頃には県内最大の古墳、古津八幡山古墳が築かれています。

これまでに 25 次に及ぶ発掘調査が行われ、弥生時代の環濠や条溝、竪穴建物 66 棟、方形周溝墓５基、前方後方形周溝墓１基などが確認されています。また多量の土器や石器のほか、鉄器やガラス玉なども出土しています。

丘陵上という立地や、幅約２ｍ・深さ約２ｍの断面が Ｖ 字形の濠（環濠・条溝）を周囲にもつなど、中国の歴史書『魏志倭人伝』に書かれた「倭国乱」に関連する戦いに備えた防御的な集落と考えられています。

なお、遺跡北東部の標高約 20～25ｍの丘陵中腹域において平成 29 年から令和４年に行った発掘調査では、遺跡で最大となる大型の竪穴建物（SI１）や、木槨構造の埋葬施設を含む計４基の埋葬施設をもつ大型の方形周溝墓（SZ743）など、新たな重要な発見がありました。



古津八幡山遺跡遺構平面図および平成 29 年～令和４年調査範囲

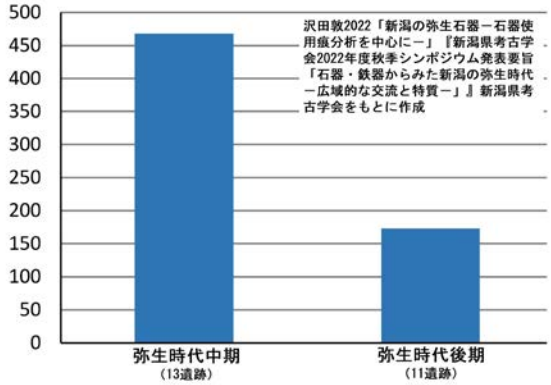
新潟県における弥生時代の石器の概要

県内において鉄器が普及する前の弥生時代中期（約 2200～2000 年前）と、鉄器が普及し始めた後の弥生時代後期（約 2000～1800 年前）との石器組成を比較すると、弥生時代後期になると石鏃や石錐が大きく減少しており、石斧などの磨製石器や石製収穫具はほとんど確認できなくなっています。また、石器の出土量自体も中期から後期にかけて大幅に減少しています。

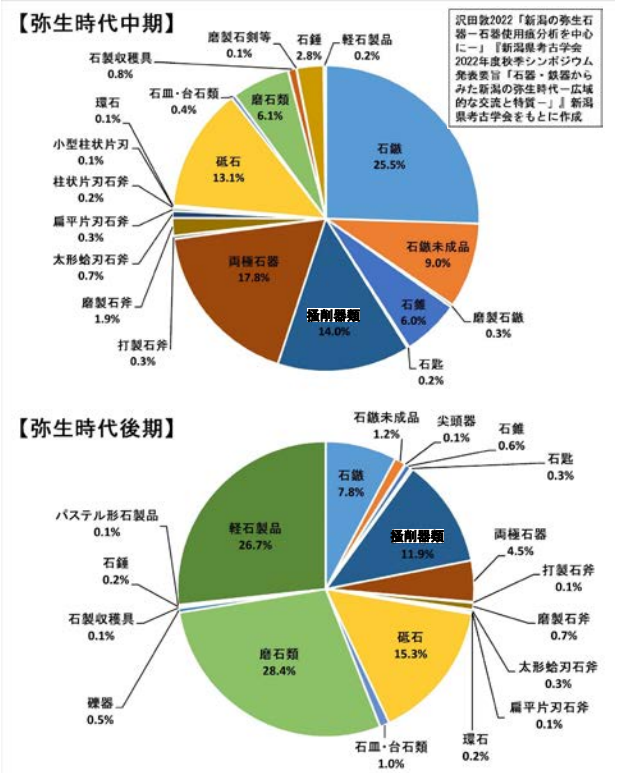
砥石は割合としては微増ですが、後期以降、砥石目の細かい仕上砥の増加や、金属器

の刃部先端を研いだ痕跡の見られる砥石、鑿状鉄製工具による加工痕のある砥石、さらには針状鉄製品（穿孔具）との接触による凹みが認められる砥石などが確認されており、鉄器用の砥石が増加した状況が推測されています。また、軽石製品や磨石類の割合も増加しています。

県内において鉄器化が進行する前後にあたる弥生時代中期と後期とで、石器の出土量や組成が大きく変化した状況がうかがえます。木の伐採実験では鉄斧が石斧の 1/3 の時間で伐採したとするデータもありますが、鉄器が当時の社会にもたらしたインパクトは大きかったことでしょう。



新潟県の主な弥生時代中期・後期遺跡における
１遺跡あたりの石器の平均出土点数



新潟県の主な弥生時代中期・後期遺跡の石器組成

新潟県における弥生時代の鉄器の概要

北陸西部（石川県・福井県）では、少なくとも弥生時代中期半ば（約 2100 年前）頃までには鉄器が導入されます。最初は鑿（のみ）や鏨（たがね）、鉄斧など木工用工具から導入され、後期中葉（約 1900 年前）になると鍬や鋤先、鎌といった農具も出現するなど、ほぼ全ての利器が鉄器化します。

また、石川県では弥生時代中期の終わりごろ（約 2000 年前）には簡易な鍛冶技術による鉄器製作も行われています。石川県の鉄器や鍛冶技術は全体的に山陰の様相と類似しており、日本海沿岸地域を西側からリレー方式でもたらされた可能性が考えられています。なお、鉄の交換財、対価として玉の生産を行っていた可能性も指摘されています。

新潟県における弥生時代の鉄器は、これまでに 50 点以上出土していますが、弥生時代中期まで確実に遡る事例は今のところありません。見つかっている鉄器はいずれも弥生時代後期（約 2000 年前）以降のもので、県内では弥生時代後期以降、鉄器が普及したと考えられます。

なお、県内の鉄器生産については、確実なもので古墳時代前期の鍛冶遺構がありますが、弥生時代後期にも簡易な鍛冶遺構の可能性が指摘されるものがあり、古くなる可能性もあります。

新潟県における弥生時代の鉄器一覧

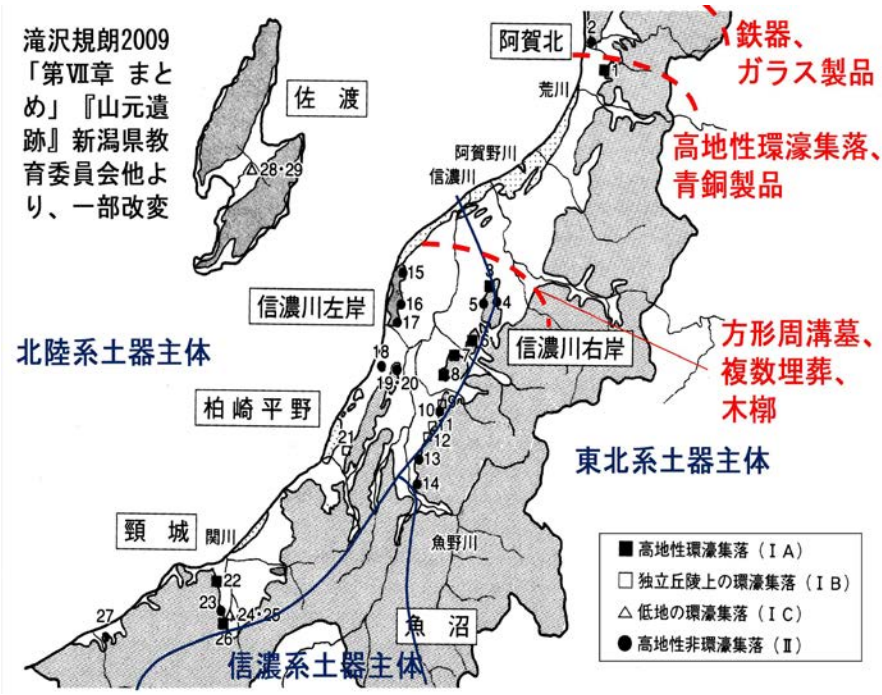
No.	遺跡名	所在地	時期（弥生時代）	器種・数量								計	備　　考
				鏃	鋤先	針状	斧	剣	刀子	鉈	不明・他		
1	堂の前	村上市下新保	中期後葉～後期前葉								1	1	竪穴建物SI318
2	山元	村上市下助渕	中期後葉～後期後葉					1				1	埋設土器内
3	砂山	村上市岩船町	中期後葉～後期後葉								2	2	
4	古津八幡山	新潟市秋葉区古津	後期前葉～終末期	2				1		1		4	剣は方形周溝墓（SX1005）、鏃は竪穴建物（SI0804・SI728）、鉈は大型竪穴建物（SI１）
5	経塚山	三条市妙法寺	後期後葉				1					1	３号住居址
6	奈良崎	長岡市島崎	後期後葉						1		4	5	弧状をなす不明品のみ竪穴出土
7	姥ヶ入南	長岡市島崎	後期後葉				1	1				2	周溝墓主体部
8	横山	長岡市横山	後期後葉								1	1	
9	西谷	刈羽村大塚	後期前葉～後期後葉								1	1	環濠内
10	裏山	上越市岩木	後期後葉	3	6						2	11	鋤先１点を除き包含層
11	下馬場	上越市下馬場	後期中葉	1		9					4	14	針状鉄製品は13号竪穴
12	斐太	妙高市宮内	後期後葉	2					1		4	7	鏃は土坑墓上層、他は竪穴建物
13	後生山	糸魚川市一の宮	後期前葉～後期後葉								1	1	鉈or鉄鏃、１号住居址
14	千種	佐渡市金井町	後期後葉					1				1	
合計				8	6	9	2	4	2	1	20	52	

新潟県内におけるおもな防御的集落と各要素

弥生時代の中・後期、越後平野では周りに濠を巡らす集落（環濠集落）や、標高の高い場所に営まれる集落（高地性集落）が出現します。これらは防御的集落とも呼ばれ、中国の歴史書『魏志倭人伝』に書かれた日本国内での争いごとである「倭国乱」との関連が指摘されています。

越後平野は日本海側における防御的集落の分布の北限域にあたり、現状では村上市の滝の前遺跡が防御的集落（高地性集落）で最北の遺跡となっています。また、越後平野は防御的集落に限らず、弥生時代のさまざまな要素の日本海側における北限域でもあり、方形周溝墓（最北は新潟市古津八幡山遺跡）や環濠集落（最北は村上市山元遺跡）、青銅製品（最北は村上市山元遺跡）、鉄器（最北は村上市堂の前遺跡）、ガラス製品（最北は村上市堂の前遺跡）などがあげられます。

なお、弥生時代後期後半の県内は、地域によって北陸系土器が主体となる地域と、東北系土器が主体となる地域、信濃系土器が主体となる地域がそれぞれ錯綜しながらも分かれています。このうち、北陸系土器が主体の地域と東北系土器を主体とする地域との境界は、信濃川の河口付近から新津丘陵の古津八幡山遺跡をつないだ辺りになります。



新潟県の主な防御的集落と日本海側北限の各種要素（赤字）

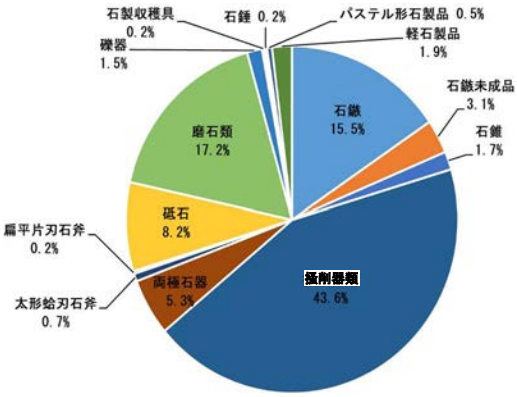
新潟県の主な防御的集落（高地性集落・環濠集落）と各要素

No	遺跡名	所在地	地域区分	時期	類型	周辺との比高	調査	墓	主体の土器群	鉄器・青銅器の有無	ガラス製品の有無
1	山元	村上市(旧神林村)大字下助渕	阿賀北	中期後葉～後期後葉	IA	37m	確認	環濠外(土坑墓)	東北系	○	○
2	滝ノ前	村上市大字岩ケ崎	阿賀北	後期後葉～古墳前期	Ⅱ？	約40m	本堀		東北系		
3	古津八幡山	新潟市(旧新津市)古津	信濃川右岸	後期前葉～末葉	IA	約50m	確認	環濠外(方形周溝墓)	北陸系・東北系	○	○
4	大倉山	五泉市大字橋下	信濃川右岸	後期	Ⅱ？	約60m	踏査		北陸系		
5	中店	南蒲原郡田上町大字田上	信濃川右岸	後期	Ⅱ？	約55m	本堀	集落内？	東北系		
6	二ツ山山頂	三条市大字上保内	信濃川右岸	後期	IA？	約80m	踏査		北陸系		
7	経塚山	三条市大字如法寺	信濃川右岸	後期後葉	IA	約60m	本堀		北陸系	○	
8	大平城	見附市鳥切窪町	信濃川右岸	後期後葉	IA	約80m	本堀	環濠内（方形台状墓）	北陸系		
9	高稲場	見附市田井町	信濃川右岸	後期後葉	IB	15～20m	確認		北陸系		
10	岩沢	見附市名木野町	信濃川右岸	後期後葉	Ⅱ？	約40m	確認		北陸系		
11	横山	長岡市桂町	信濃川右岸	後期後葉～古墳前期	IB	約10m	本堀	環濠外(方形周溝墓)	北陸系	○	○
12	原山	長岡市加津町	信濃川右岸	後期	IB？	約20m	踏査		北陸系		○
13	堅正寺	長岡市御山町	信濃川右岸	後期	Ⅱ？	約45m	踏査		東北系		
14	阿部山	長岡市滝谷町	信濃川右岸	後期	Ⅱ？	約65m	踏査		東北系		
15	大沢	新潟市(旧巻町)大字稲島諏訪	信濃川左岸	後期前葉～古墳前期	Ⅱ	約30m	本堀		北陸系		
16	山谷古墳下層	新潟市(旧巻町)大字福井	信濃川左岸	後期前葉～後葉	Ⅱ	約30m	本堀		北陸系		
17	稲場塚古墳下層	新潟市(旧弥彦村)	信濃川左岸	後期後葉	Ⅱ？	約40m	踏査		北陸系		
18	大平	長岡市(旧和島村)大字北野	信濃川左岸	後期	Ⅱ？	約40m	踏査		北陸系		
19	赤坂	長岡市(旧和島村)大字上桐	信濃川左岸	後期	Ⅱ？	約80m	学術		北陸系	○	
20	姥ケ入南	長岡市(旧和島村)大字島崎	信濃川左岸	後期	Ⅱ	30～40m	本堀	円？方形周溝墓	北陸系	○	
21	西谷	刈羽郡刈羽村大字大塚	柏崎平野	後期後葉～古墳前期	IB	8m	本堀		北陸系	○	
22	裏山	上越市大字岩木	頸城	後期後葉	IA	約70m	本堀		北陸系	○	○
23	下馬場	上越市大字下馬場	頸城	後期後葉～古墳前期	Ⅱ	約40m	本堀		北陸系	○	
24	吹上	上越市大字稲荷	頸城	中期中葉～後葉	IC	0m	本堀		北陸系・信濃系		
25	釜蓋	上越市大字	頸城	後期末葉	IC	0m	確認		北陸系		○
26	斐太遺跡群	妙高市(旧新井市)大字宮内ほか	頸城	後期後葉～古墳前期	IA	約50m	本堀		北陸系	○	
27	後生山	糸魚川市	頸城	後期前葉～後葉	Ⅱ	約40m	本堀		北陸系	○	
28	平田	佐渡市(旧新穂村)	佐渡	中期中葉～後葉	IC	0m	本堀		北陸系		
29	蔵王	佐渡市(旧新穂村)	佐渡	後期？	IC	0m	本堀		北陸系	○	○

滝沢規朗2009「まとめ」『山元遺跡』新潟県教育委員会ほかをもとに作成・一部改変

古津八幡山遺跡の石器・鉄器の概要

古津八幡山遺跡の弥生時代後期の石器組成をみると、掻削器類の比率が最も高く、磨石類、石鏃、砥石と続きます。県内における弥生時代後期の石器組成と比較すると、石鏃や掻削器類の比率が高い一方、軽石製品や砥石の比率が低い傾向がうかがえます。



（沢田敦 2022「新潟の弥生石器ー石器使用痕分析を中心にー」『新潟県考古学会 2022 年度秋季シンポジウム発表要旨「石器・鉄器からみた新潟の弥生時代ー広域的な交流と特質ー」』新潟県考古学会をもとに作成）

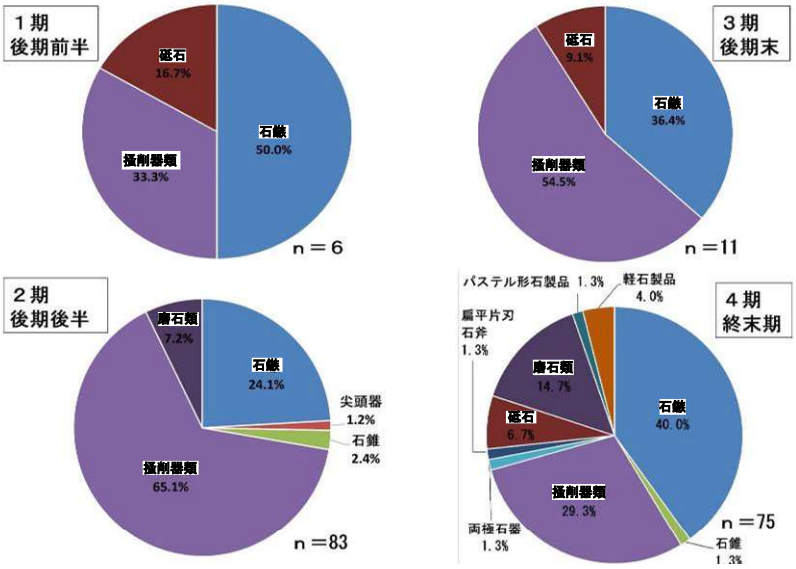
古津八幡山遺跡の弥生時代後期の石器組成

また、古津八幡山遺跡ではこれまでの発掘調査で弥生時代の鉄器が計４点出土しています。古い順に見ていくと、弥生時代後期前半の鉄剣１点・鉄鏃１点（方形周溝墓 SX1005･竪穴建物 SI0804）、弥生時代後期後半の鉄鏃１点（竪穴建物 SI728）、弥生時代終末期のヤリガンナ１点（SI1）が出土しています。また、細かい時期は不明ですが、古津八幡山古墳の盛土から出土した刀子状鉄製品も弥生時代の可能性があります。出土点数はそれほど多くありませんが、鉄は再加工ができ、貴重であまり廃棄しないため、実際にはもっと多くの鉄器を所有していたと推測されています。

古津八幡山遺跡の時期別石器組成

図は、出土土器などによって時期が判別できる古津八幡山遺跡の遺構から出土した石器の時期別石器組成です。

対象とする遺構が限られ、分母の数も多くないため不確定な部分が多いですが、弥生時代後期・終末期をとおして石鏃や掻削器類の比率が比較的高い一方、軽石製品の比率の低いことが推測されます。また、砥石は弥生時代後期、終末期を通じて一定の比率を占めています。なお、砥石の中には鉄器の刃先を研磨した痕跡を残すものがあり、当時の鉄器利用の



古津八幡山遺跡における時期別石器組成
（時期の分かる遺構出土石器に限る）

一端をうかがうことができます。

ちなみに、弥生時代後期末～終末期になると東北南部を中心に分布するアメリカ式石鏃がほぼ確認できなくなります。この時期、東北系土器がほぼ確認できなくなることと共通した流れと考えられます。

また、弥生時代後期末～終末期には、東日本では珍しい計４基の複数埋葬施設を有し、そのうちの１基が木槨構造となる大型の方形周溝墓（SZ743）や、６本柱の構造で排水溝をもつ大型の竪穴建物（SI１）が出現するなど、それまでの地域間関係、首長間関係に大きな変化が起こっていたことが推測されます。

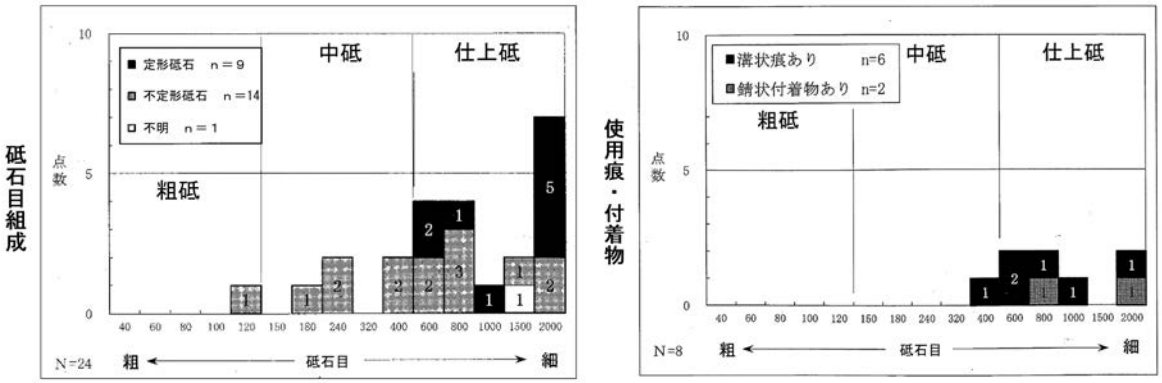
砥石

遺跡から出土する石器の中に砥石があります。砥石はおもに石や鉄などを素材とする利器の刃の部分を研磨する目的で利用され、特に鉄器は研がないと錆びて使用できなくなってしまいます。砥石は昔も今も形が大きく変わっていないため、私たちにとって見慣れた資料ともいえます。

さて、古津八幡山遺跡では仕上砥が多く出土していますが、時期を追って砥石目が細かい、細粒の仕上げ用砥石の割合が増加する傾向にあります。また、少なくとも弥生時代後期後半頃には直方体状あるいは多角柱状を呈する定形化した砥石があり、弥生時代終末期には小型の定形砥石も確認できます。

なお、古津八幡山遺跡の砥石の中には、仕上砥を中心に鉄器の刃部先端を研いだと推定される細い線状の痕跡が見られる砥石や、鑿状鉄製工具による加工痕との指摘のある砥石が存在します。このような傾向や変化は、古津八幡山遺跡における鉄器化の進展状況と深く関連することが推測されるとともに、当時の鉄器利用の一旦をうかがい知ることができます。

古津八幡山遺跡出土の鉄器研磨と推定される線状痕を残す砥石



森貴教 2020「越後における弥生時代の鉄器化－砥石の分析から－」『新潟考古』第 31 号　新潟県考古学会より・一部改変

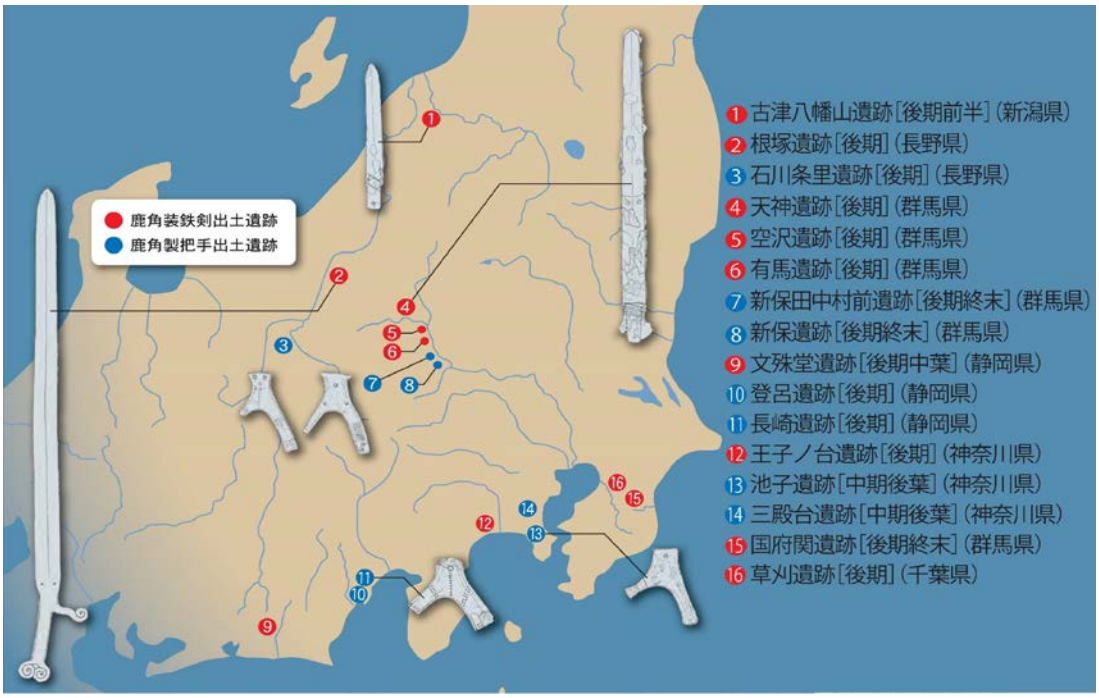
古津八幡山遺跡出土砥石における種類別の砥石目組成（左）と使用痕・付着物（右）

古津八幡山遺跡の鉄器

古津八幡山遺跡で確実に弥生時代に位置づけられる鉄器は今のところ４点で、鉄剣１点（後期前半）、鉄鏃２点（後期前半と後期後半）、ヤリガンナ１点（終末期）です。古津八幡山遺跡は、弥生時代の後期前半から終末期までの約 200 年営まれたムラなので、丘陵上にムラができた当初からムラがなくなる最後まで、鉄器を保有していたことがうかがえます。

鉄剣は方形周溝墓（SX1005）の木棺内に副葬されており、鹿の角の柄が装着された鹿角装鉄剣と考えられています。なお、鉄剣部分は朝鮮半島で生産された可能性も指摘されています。本事例は鹿角装鉄剣が密集する地域から離れており、その由来が注目されます。また、剣の一部には布も付着しており、布巻きもしくは布かけの状態で副葬されていたと推測されます。

方形周溝墓（SX1005）埋葬部

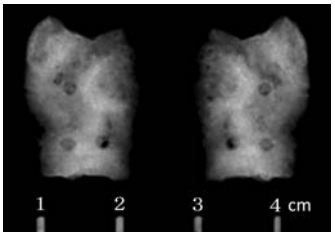


鹿角装鉄剣と鹿角製把の分布

鉄鏃２点はどちらも竪穴建物から出土しています（SI0804：後期前半・SI728：後期後半）。SI0804 の鉄鏃は、下部１か所を穿孔しており、鉄鏃と矢柄とを目釘で固定したものとみられます。細身の形態で、下部は矢柄へ差し込むための茎がつかず（無茎）、両端に下へ鋭く突き出す逆刺（かえり）をもつ形態のものです。形態から朝鮮半島や北部九州との関連性を指摘する意見もあります。

鉄鏃
（SI0804）

SI728 の鉄鏃は、X線写真で撮影したところ２個１対の配置で上下２列、計４つの孔をもつことが確認されました。対の穴が上下２列あるのは、先端部が欠損したために再加工してつくり出し、再加工で短くなった分、改めて下列に２孔を穿ったためと推測しています。両端が欠損しているため全体の形は不明ですが、無茎で左右両端がＳ字にカーブする柳葉形の平面形態の鉄鏃（無茎柳葉式鉄鏃）である可能性があります。



鉄鏃Ｘ線写真（SI728　両面）

ヤリガンナは、遺跡の中心部である標高約 50mの丘陵頂上部から北東方向に一段下がった標高約 25mの丘陵中腹域において近年見つかった大型の竪穴建物（SI１）から出土しています。比較的小型のもので、木製品の加工などに使用した可能性が推測されます。

ヤリガンナＸ線写真
（SI１　上・横）

古津八幡山遺跡が営まれた弥生時代後期･終末期を通して石鏃が見られ、木の加工や細工に使用する扁平片刃石斧も出土していることから、鉄鏃と石鏃、ヤリガンナと扁平片刃石斧など、同じ用途でも鉄器と石器とを併用していたことがうかがえます。

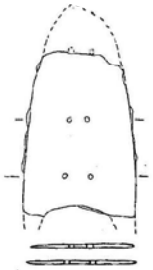
古津八幡山遺跡出土の
扁平片刃石斧（左端）と太形蛤刃石斧

木の加工方法と道具
（小松市埋蔵文化財センター2019『こまつ原始・古代のものづくり』より・一部改変）

ヤリガンナと鉄鏃の推定復元レプリカについて

展示してあるヤリガンナの推定復元レプリカは、ほぼ同じ大きさのヤリガンナが木製の柄に装着された状態で見つかった石川県小松市の八日市地方（ようかいち じかた）遺跡の事例（弥生時代中期）を参考に推定復元しました。

八日市地方遺跡のヤリガンナは、柄の上半部を二枚合わせにして鉄部分を挟みこみ、糸を巻き付けて固定した上からテープ状に加工したサクラの樹皮を巻き付けた構造であることが分かっており、今回、古津八幡山遺跡のレプリカも同じ構造で復元しています。


狩尾遺跡出土鉄鏃
（熊本県教育委員会 1993『狩尾遺跡群』より）

竪穴建物 SI728 出土の鉄鏃は、X線写真により２個１対の配置で上下２列、計４つの穿孔が確認されました。熊本県狩尾遺跡出土の弥生

時代後期の鉄鏃の中にも２個１対の配置で、上下３列、計６つの穿孔のある鉄鏃があります。一番上の列を目釘で止めてしまうと先端が短くなり鉄鏃として十分に機能しないため、もとは先端がもっと長かったのが欠けたために改めて先端部をつくり出し、短くなった分、下方に再度２個１対の孔を穿って固定したものと推測されます。同様にSI728の鉄鏃も穿孔をし直したとの推定のもと復元レプリカを作成しました。

おわりに

弥生時代に日本列島にもたらされた鉄は、石から鉄への素材の変化にとどまらず、その入手方法や生産、流通、権力体制の変化などをもたらし、結果として社会に大きな変化を引き起こす要因となりました。そして弥生時代後期には西日本を中心に各地で政治的、経済的なまとまりが形成され、それぞれに王（首長）が出現し、古津八幡山遺跡のように首長墓が各地でつくられていくこととなります。

さて、古津八幡山遺跡で確実な弥生時代の鉄器は今のところ４点と多くはありませんが、鉄器に加えて、砥石の情報や石器組成の変化、データなどから、弥生時代後期・終末期を通じてある程度の量の鉄器を保有していた状況を改めて推察することができました。また、鉄器と石器とを併用していた実態についても確認することができました。

新潟県は日本海沿岸地域のなかでは山陰や北陸西部などに比べ鉄器の出土量は多くありませんが、日本海から内陸への物資の流通経路にあたるとともに、朝鮮半島南部や北部九州など遠隔地との関連を示唆する鉄器の出土が目立つ地域との指摘もあり、その系譜や流入の実態・背景など、石器の分析と併せて今後の研究が注目されています。

【お知らせ】

関連講演会

「石器・鉄器から探る新潟の弥生文化」

講師　森 貴教 氏（新潟大学准教授）

日時　令和5（2023）年**11月26日（日）** 13:30～15:30

会場　新潟市文化財センター　研修室

（展示会場とは異なります）

＊オンライン配信も行います

展示解説

日時　令和5（2023）年**12月3日（日）** 14:00～

会場　史跡古津八幡山　弥生の丘展示館

申し込み　不要（直接会場にお越しください）

★講演会のお申込み方法★

会場での聴講は申込み不要です。オンライン配信希望の方は右記2次元コードから新潟市オンライン申請システム（e-NIIGATA）でお申し込みください。

https://lgpos.task-asp.net/cu/151009/ea/residents/procedures/apply/14f9096c-da2e-4925-bb03-0d64039c1b03/start

申し込み期間　**10月4日（水）～11月19日（日）**

講師略歴

森　貴教（もり　たかのり）

愛知県岡崎市出身

新潟大学人文社会科学系（人文学部）准教授

令和５年度
史跡古津八幡山 弥生の丘展示館
企画展関連講演会　記録集

編集　　新潟市文化財センター
〒950－1122　新潟市西区木場 2748－１
TEL　025－378－0480　　FAX　025－378－0484
発行　　2024 年３月 29 日